

1997年9月第3号

人環フォーラム NO. 3

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

対談:「森林の文化」を再考する

河合雅雄vs北村昌美 司会 間宮陽介

特集:東西文明の交流

川勝平太・E.ヨリッセン・小岸 昭・村形明子

「人環フォーラム」の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのようにのりこえ、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見だしていくことができるのかにかかっている、といえましょう。

「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科（略称「人環」）は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索していくため、「人環フォーラム」を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえにたつて、精神的な豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけていきたいと考えています。



◎目次＝人環フォーラム3＝

巻頭言	Page 1
琵琶湖博物館での一年	川那部浩哉
対談	Page 2
「森林の文化」を再考する	河合雅雄・北村昌美 司会 間宮陽介
特集：東西文明の交流	Page 10 — 27
「東西文明の交流」を越えて／川勝平太	Page 10
ゴアの一夜／エンゲルベルト・ヨリッセン	Page 14
マッタンチェリーの対話／小岸 昭	Page 20
世界文学・演劇としての能／村形明子	Page 24
フィールド便り	Page 28 — 33
仮面を生きる人びと／佐々木重洋	Page 28
日本のアカウミガメの生活を探る／亀崎直樹	Page 30
踊りつがれるエスニシティ／城田 愛	Page 32
リレー連載「環境を考える」	Page 34
「環境」について―「現像学の天才」マックス・シェラーの場合…小川 侃	
フロンティア	Page 40 — 45
電子が語る、生体組織中の金属イオンの環境／川村淑子	Page 40
クワガタムシの大顎の謎／荒谷邦雄	Page 41
無色の銅化合物が存在するか／李 勇	Page 42
風景論の構成へ向けて／香西克彦	Page 43
言語と有機体／斉藤 渉	Page 44
理性の有限性／内藤可夫	Page 45
サイエンティストの眼	Page 46
動物の脳からヒトのこころを探る	船橋新太郎
社会を斬る	Page 48
私利と公共心	足立幸男
フィールド便り	Page 50 — 55
神の食事と人の食事／田中雅一	Page 50
中国の少数民族トン族における風水思想の受容／兼重 努	Page 52
民俗知識で彩られる魚／川端 牧	Page 54
文学の周辺	Page 56
時間の文学的再構成	木村 崇
奈文研の散歩道	Page 58
トイレ考古学事始め	松井 章
京博便り	Page 60
日本美術に関する感傷的記述	狩野博幸
書評	Page 62 — 66
篠原資明「心にひびく短詩の世界」／上倉康敬	Page 62
小岸 昭「離散するユダヤ人」／細見和之	Page 63
坪内良博「マレー農村の20年」／松田素二	Page 64
谷 泰「神・人・家畜」／小長谷有紀	Page 65
安枝英紳・西村健一郎「労働基準法」／小寫典明	Page 66
人環図書	Page 67
瓦版	Page 68
コラム	Page 19, 31, 49
ドッグウッドの並木道／戸部 博	Page 19
天空からみた熱帯雨林／市川光雄	Page 31
平安京は「バンドラの箱」?!／西山良平	Page 49

琵琶湖博物館での一年

川那部浩哉 | HIROYA KAWANABE | 滋賀県立琵琶湖博物館長



琵琶湖博物館へ来て一年経った。昨年十月二十日の公開以来、四月末で観客数は六十万人になりそうで、予測の倍以上という。とりあえずは悦ばしい。

最近の博物館は、何らかの主題をもつものが流行と聞く。ここもその驥尾に付して、「湖と人間」なる主題を持っている。昔から私が使っていた言葉をもじれば、「琵琶湖と人間との関係の連鎖の総体を歴史的に扱う」というわけだ。

少し考えてみると、これはまことに「ずるい」主題の選びかたである。通常の自然史博物館であれば、たとえば、南アメリカに以前棲息していた大型の奇妙な哺乳類の化石が一つもないのは、見識を問われるかもしれない。だが琵琶湖博物館の場合はなくとも良い。いや、人間の起源も展示する必要はない。琵琶湖と人間の交渉史を、証拠をもって挙げるところから済むこと。だから、八年の準備室時代に学芸員が、自分自身の研究調査を進め、展示を作り上げてくることが可能だったのである。

ここへ来た当初、学芸員諸兄弟から数時間ずつ講義を受けた。自然科学はもとより、考古学・歴史学・民族学・社会学・博物館学・河川工学・農村計画学・教育学などの研究者がいる。生物学、それも水の中の生態学しかやってこなかった当方にとっては、知らないことばかりだ。そのうえ、何を尋ねても恥ずかしくない。「本当にもの知らずの人だ」と呆れられたには違いないが、「専門馬鹿は昔から」と開き

直れる。「これは面白い」「それは面白い」。活き活きと受け止めながら、しかし、これらを結びつけるのはなかなかのことと思いついた。その一方で、参画している「生物多様性科学国際共同研究計画」の議論においても、生物多様性は文化多様性を生み出す基盤になっており、逆に、生物多様性の維持・保全のためには文化多様性が意義を持っているような、気がしてならなくなってきた。

そこでこの六月の開館記念国際シンポジウムにおいて、「生物と文化の多様性」の関係を、世界の古代湖を対象に論じてはと考えた。しかし、こんなものを研究しているような人は、まだ存在しない。人々のくらしは連続的でも、科学は徹底して分断化している。そのうえくらしもまた、個別的・分断的になってきているのだから。すなわちこのシンポジウムは、試みである。かりに失敗しても、真摯に議論した結果なら、現在の科学あるいは人間の限界として、それはそれで仕方がないではないか。そう居直って、進めているところだ。この六月下旬は、この意味で大いなる楽しみである。

ところで今になって気づいたが、「人間・環境学研究科」は、この「科学の総合化」の壮大な試みとして作られたものではなかったか。それなら、発足してもう六年あまりになるこの研究科に、もっと早くその実績をお尋ねするべきであった。いや、今からでも遅くはあるまい。どうだったか、ぜひ教えてください。



北村昌美

MASAMI KITAMURA

「森林の文化」を 再考する

●司会
YOSUKE MAMIYA
間宮陽介



河合雅雄

MASAO KAWAI



今回は、丹波の森公苑に河合雅雄先生と北村昌美先生をお訪ねし、定例理事会前のひとときを割いていただいで対談をお願いしました。森について語るときの先生方はとても楽しそうで、言葉の端々に森への愛着がにじみ出ていました。話が森の妖怪たちに及んだときには、気のせいか、先生方自身が森の妖怪ではないかと思われたほでした。

●河合雅雄（かわい まさお）

一九二四年、兵庫県生まれ。兵庫県立人と自然の博物館長、京都大学名誉教授。理学博士。生態学・人類学。「森林がサルを生んだ」（朝日文庫）、「人間の由来上・下」（小学館、毎日出版文化賞）、「小さな博物誌」（筑摩書房、産経児童出版文化賞）、「河合雅雄著作集（三巻）（小学館）」など。紫綬褒章、朝日賞、NHK放送文化賞受賞。

●北村昌美（きたむら まさみ）

一九二六年、兵庫県生まれ。山形大学名誉教授。農学博士。森林経理学・比較森林文化論。「森林と文化―シエヴァルツヴァルトの四季」（東洋経済新報社）、「森林と日本人―森の心に迫る」（小学館）、「森を知らう・森を楽しもう―森林彩時記」（小学館）、「森林の百科事典（共編）」（丸善）など。河北文化賞、日本林学会賞、日本雪氷学会功績賞受賞。

●間宮陽介（まみや ようすけ）

一九四八年、長崎県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。コモンズをはじめとして、都市、政治領域などを空間論の視点から構成しようとしている。主な著書に、『モラル・サイエンスとしての経済学』（ミネルヴァ書房）、「ケインズとハイエク」（中央公論社）、「法人企業と現代資本主義」（岩波書店）などがある。

間宮 今日はお忙しいなか、どうもありがとうございました。わたくしども『人環フォーラム』という雑誌を出しておりますが、これで第三号になります。毎号、対談をお願いしているのですが、今回は、「森」についてお話を伺おうということで、お二人の先生にお願いした次第です。

九二年でしたか、ブラジルでリオ・サミット、環境サミットが開かれまして、そこで「持続可能な開発」、「サステイナブル・ディベロプメント」という理念が謳われました。それは要するに、資源、といつても石油や石炭みたいな枯渇性資源ではなくて、再生可能な資源のこ

対談会場となった丹波の森公苑



とですが、そうした資源を残すにはどうしたらいいかということでサステイナブル・デベロプメントということが謳われたわけです。

日本、アメリカ、イギリス、その他の先進国は市場経済をとっています。その市場経済の枠組の中で自然資源を採取し、売り買いしているわけです。そういう市場経済の中で資源を取り引きすると、乱獲という現象が起こって資源がなくなっていく。ところが振り返ってみますと、漁業にしろ、農業にしろ、それから林業もそうですが、何百年あるいは千年以上にわたって営みが続けられてきた。要するに持続可能な農業や漁業が営まれてきたわけです。ですから持続可能な開発を考えると、もう一度、農業や漁業や林業のあり方を再検討してみようという動きが始まってきたわけです。

今日はそうしたことも関連しまして、森林についてお話を伺いたいわけですが、まず河合先生のほうから、口火を切っていただけたませんか。

森林文化とは何か

河合 … 何から話をしていきたいと思います。… もうちょっと一般的な話から始めますと、人間にとつて森林とは何かという問題がありますね。日本人が多用してきたのは、一つは森とは「生産資源」だ、ということですね。森は材木、あるいは薪、それから山の幸、いろんなものを与えてくれる。これはもう説明するまでもないことだと思うんです。そのための植林技術とか、いろんなことが発明されてきた。もう一つは「環境資源」という言い方がありますね。それは、防風、保水、空気の浄化など、いろんな森が持っている環境に対する効用、これも日本人はとても大事にしてきた。もう一つの大きな、森の持っている対人関係といった面で欠落しているものがあつたと思うんですよ。それは何かというと、森を「文化資源」としてみる、そういうことだと思うんです。今日、とくに北村さんと話をしたいと思ったのは、今、緑を大事にしよう、森を復活しようという声がすごく高いわけだけど、その中で、欠落していると言った森を文化資源としてみるということについてなんです。森林文化とか里山というのは今すごく使われています。これはじつは新しい言葉なんです。おそらく森林文化という言葉を使ったのは、日本で北村さんが初めてじゃないかと思うんですよ。里山という言葉もすごくポピュラーになっているけど、字引引いたら

のってませんよ。これも新しい言葉で、四手井綱英さんが、多分昭和四〇年ぐらいに造った言葉です。

間宮 里山？

河合 ええ。今もう何かというと、里山、里山、里山ブームですけど、それが内包している意味で使われているのは割合最近ですね。それは、どちらも森を一つの文化の対象としてみようというところから始まっていると思うんですね。里山というのは、これ、北村さんが詳しいと思うんだけど、もともと農用林って言っていたんですね。

北村 そうですね。

河合 農用林って、つまり、農業に用いる林。薪を採ったり、柴刈ったり、松茸採ったり。田んぼや畑と同じく、山も一つの農業用地だったんです。ところが里山という言葉は、もう少し文化的な意味合いを込めた言葉だと思うんですね。森というものを文化的に見ていこうとする新しい見方、新しい運動が日本で起こってきた。ヨーロッパでは、そういう森の文化ってのは、非常に成熟した姿であるわけです。森と人間との関わり合い、この点は日本人とね、ヨーロッパ、アメリカとは違いが大きい。とくに文化資源としてみていくところが。

森の文化、森林文化っていうのはね、何かあったようにわからないところがある。北村さん、そのことをちよつと説明してください。

北村 一つは、森から得られる文化ということ。木材にしたって、家にしたって、そういうものは全部、森から出てきたもので、文化的産物という。でもそれだけでは一面しか言っていないで、他方には人間が森に働きかけるといふ面がある。森と人間との間に共有の空間ができる。つまり私は、森と人間の関係そのものが森林文化じゃないかなというふうに思っているわけです。

日本では従来は、里山という言葉を用いなかったんです。なぜ里山という言葉がなかったかというところ、里山が自分の皮膚の一部みたいなものだったからです。生活の一部でしたから。それをわざわざ取り出して、里山という概念を創らなくてもよかった。



雑木林・スギ植林・アカマツ林からなる丹波の代表的な森を望む

間宮 日本よりもヨーロッパの方が、人間と森との関わりが深いようにみえます。たとえば東京のような大都會のど真ん中にも「何とか山」という地名が結構多いのですね。大岡山ですとか、浜田山ですとか、茗荷谷というのがあります。山あり谷ありで、結構生活の近辺まで山があったという気がするんですね。ところが都市化が進むにつれて、人間と森林はしだいに関わりが疎遠になってしまった。

北村 人間側のご都合が先に立って、森林は「悪しきもの」、「排除すべきもの」となってきたのが日本じゃないかと思うんです。ヨーロッパでも同じです。ただちよっと違うのは、自然を駆逐していく過程で、これはちよっと人間にとって具合が悪いんじゃないかということに気がついているということです。ヨーロッパでは一七世紀ぐらいまで、どんどん森林を駆逐した。それから心を入れ替えて森林を復活するというところに着手したわけですが、日本では、森林は減る一方ですね。森林は要するに駆逐されるべきものとしてしか意識されていないですね。

間宮 ヨーロッパの田園地帯は、創られた田園地帯、わりと人工的な感じがするんですが、森林についてはどうなんですか。

北村 中部ヨーロッパに関してはほとんど人工的です、人間の管理の行き届いた森林という意味で。もう隅々まで技術的な注意が払われている、視線が注がれているという感じがするわけです。

間宮 人間との関係でいえば、川や海とはまた違った独特な面が森林にはございますか。

河合 ええ、あると思うんですね。さっきの里山ですけど、あれは農用林といわれたように、かつては、農家を支えていくためには田んぼ、畑と同じように必要な場所だったんですね。ところが昭和三〇年代に入り、全部化石燃料使うようになってから、柴とか薪とか要らなくなったわけですね。だから今度は植林しようということ、どんどん植林が始まっていく。植えられるところは、もう全部、すさまじいぐらいに植林してしまった。ところが材木不況で、それも全部遊んじやったでしょ。日本の里山といわれるところは、今ほとんど遊んでいるんじゃないかと思うんですね。ある意味でこれすくもったいないことです。だから、そういう里山をわれわれの文化資源として大いに活用していつてはどうかということなんです。木を切り出して何かを作ることも一つの文化を創るわけですが、そういうものとは別に、自分の

生活の中に森を楽しむ空間として取り入れるといいと思うんですね。

ヨーロッパの人たちは本当に森を楽しんでいるわけですね。休みになれば、とくにドイツ、オーストリアあたりになると、もうみんな山を歩いている。日本人から見れば不思議に見えるぐらい、みなさん森を楽しんでいる。日本にもちよっと行けば、そういう里山がいっぱいあるんですから、そういう楽しみの中に取り込んだらいいと思うんですがね。川だって同じです。人間の一つの楽しみの空間として、日本人は川を取り入れていったわけですよ。江戸時代から隅田川一つとって、川の文化っていっぱいありました。川ってというのは本当に楽しさにあふれた遊び場ですよ。日本人は森というと植物しか思い浮かべない。それが日本の森林観の、一つの欠点だと思うんですけどね。森にはいろんな昆虫がいるし、獣がいる。植物も木だけでなく、その辺のいわゆる雑草といわれる草木など、本当によく見れば、可愛いもの、楽しいもの、美しいものがいっぱいありますね。だからその気にさえなれば、無限の楽しい空間がある。それを自分らの生活の一部の楽しみの中に取り入れたらと、僕らは喧しく言っているわけです。

間宮 遠足とか、夏の昆虫採集とか、私たちは子供のころよく山に行きました。たいした林じゃないんですけども、山に入るとすぐく期待感があるんですね。どんな虫がいるかと、そうした期待感を持って入ったんですけど、最近の子供は遠足でもあまり山には行かないんじゃないでしょうかねえ。

北村 どうなんですかねえ。(笑)

河合 行かないですよ。

間宮 行かないですね。

河合 行かないというのはいくつか理由があるけど、一つは学校がそういうこと避けてるわけだからね。

北村 皮肉なことに、里山を活用してるのはゴルフ場なんです。情けないことですけども、実際はそうなんです。でもあれば、大人は遊んでるけれど、子供は遊んでいないですね。

丹波の森に集う

河合 丹波の森構想というのがあって、私ら一緒に森づくりをやっているんですけど、「どこに森をつくるんだ」と、こう皆さんすぐに言うわけですよ。そうすると、たとえば、代々木の森みたいな、あ



丹波地方の名産、丹波黒大豆（クロマメ）の収穫

あいうものをすぐ考えるわけです。そうじゃなくって、丹波っていうのはちょうど二つの郡、多紀郡と氷上郡、町が一〇あるのですが、これを全部含めて丹波の森と名づけるわけです。丹波地区というのは、森の中に集落があり、川が流れ、田んぼがあり、それから虫がおり、というふうな森の中に埋没しているところなんです。そういう森の中に包まれた、森林町を創つていこうということなんです。

これはねえ、モデルが一つはウィーンとかシュヴァルツヴァルトなんです。ウィーンの森という皆さん、ちっちゃな森があるかと思うんだけど、そうじゃなくって、あれは確か一二〇〇平方キロぐらいあるわけですが、その中に村があり、町があり、教会があり、畑があり、それを全部ひっくるめてウィーンの森といっているわけです。それと同じように、ここは阪神間っていう大きな都市の集合体があつて、その人たちがウィーンの森を楽しむように丹波の森を楽しんでもらおうやないか、新しい緑の生活空間を創ろうやないかと。そういうことを今後構想しているわけです。それには一つの拠点がいらいますので、そこでこの「丹波の森公苑」という施設ができたわけです。

ちょうどシユーベルトが亡くなって二〇〇年ですから、シユーベルト・ティアーデというのをずっとやってるんです、街角コンサートといって。畑儀文さんというシユーベルトのリート歌手がいて、その人が中心になって、町々のお寺でやったり、公会堂でやったり、あちこちでやるんですよ。田んぼの刈り跡でやったり、赤とんぼが飛んできて、町の合唱団が歌う「美しい水車小屋」の旋律にのって舞うとびつたりの感じなんです。それとシユーベルトのお祖父さんの直系の人で、トマス・シユーベルトさんという音楽家の人に来てるんですが、丹波がものすごく好きになって帰らないんですよ。二ヶ月もいるんです。街角コンサートにも全部出てくれるわけ。今年もまた来てくれますけど、そういうふうに一〇の町々で行われているのですが、それも全部ボランティアでやっているんです。

それから草木染をやるクラブとか。ここはとくに高齢者が多いですから、そういう人たちの本当の楽しみの場所。森の持っているいろんな幸を引き出して、自分たちの生活を豊かにしていこう、そういうことを試みているわけです。それと、ここは県立なんですけど、運営は丹波の森協会というのがやっています。丹波の森協会というのは、一〇町が全部出資して創った財団法人なんです。

北村 河合先生に勧められて、私もね、丹波の森に参加させていただいておるんです。

河合 勧められてやってきた？ 引っ張り込んだのか押し入ったのか？（笑）

北村 違う（笑）。この概念がね、わたくしすばらしいと思っているんです。地域全体を森という概念で包み込んで、その中に今のような音楽会も入ってくる、といったことですね。

河合 音楽会から演芸、リサイクル運動までやっている。

北村 いわゆる生活文化ですね。そういうものを全部包括したものが丹波の森という概念やと。私が住んでいる山形県の小国町、そこが似たことをやっている。白い森構想というんです。シュヴァルツヴァルトを模範にして、シュヴァルツヴァルトを望みながらやっているわけです。他にはそういう概念で森を捉えているところはまだ日本にはないんじゃないでしょうか。そういう意味では、ここはすごい。森という概念に新しい光を当て、先鞭をつけた地域だと思っているんです。

河合 意外に難しいんですよ、この概念の理解が。だからこの地域の人達が、そういうふうな概念なり、理念をしつかり身につけてくれることが大事でしょ。そのためにここでいろんなことをやっていますけども、たとえば丹波の森大学っていうのもその一つなんです。北村さんとか、本場にトップクラスの講師陣に来てもらっているんですよ。そこにみなさんが一〇回の講座に出るわけです。今年は一二〇名ですね、受講者が。

間宮 受講者はどこから来るんでしょうか。

河合 ほとんどは丹波地区の人なんです……。

北村 たまに丹波以外からも来ますね。

河合 どこからでもいいんですよ。去年なんかは栃木県から来た人もあった。そういう人たちが、六年もやれば、五〇〇人ぐらいになるんですよ。それからウィーンの二三区と姉妹都市関係を結びまして、毎年四〇人ウィーンの町へ行くんですよ、ウィーンの森へ。向こうの人たちがウィーンの森を案内してくれるわけですね。そのようにして、森に非常に深い関心を持つ人たちが、一〇年になると千名を超えますね。そうなれば森に対する、森林文化に対する本格的な理解を持つ人がたくさんできるわけで、丹波の森つくりの土台ができる。それを楽しみにやっているんですよ。



篠山町雪願寺で催された丹波の森国際音楽祭、シユーベルト・ティアーデ丹波'96



北村 それだけ厳しいですよ、こちらの立場というものが。そういう期待に応えないかということ。結局、私たちが丹波の森大学で勉強させられてるわけですよ。大学の講義より熱心にやらざるを得ない。

河合 六年間、全部違うことしゃべるのはちょっとしんどい。

北村 それはしんどいでしょう。

河合 全部テーマ変えてるんだからねえ、しんどいですよ、本当に。

間宮 受講生の方たちは何か活動をやっておられるのでしょうか。

北村 専攻科というものに入ってから、皆さん自分なりの研究の成果をまとめて出しています。

河合 みんなで川の文化をやるうかとか、あるいは民話をやるうかとか、いろんなことを専攻科の人たちがやっています。

北村 それから、一回目の丹波の森大学の講義が本になって出ました。これは講師陣の成果です。

日本の森林行政

河合 森の中ではね、川も非常に重要な要素だと僕思ってるんですよ。ところがね、川遊びがねえ、本当に衰退したでしょ。

間宮 そうですね。

河合 まあ一番悪いのが、建設省ですけどね。もうとにかく全部セメント漬け。川遊びができない、水泳にも行けない。田舎でもプールつくって泳いでいる。僕はあんなもん爆破したいと冗談言っているんですよ。(笑) この頃はようやくまた……。

北村 ちょっと心入れ替えて。

河合 自然工法とかね。

北村 秋田でしたか、カモシカが溝にはまり込んで、上がる所がなく、とうとう市街まで出てきたという話があるんです。

それがいま、これまでのやり方に対する反省が出てきた。出てきたのはいいんですけども、今度は建設省が親水空間ということを出したんですね。ダムでもなんでも魚の上る道をつくろうという、魚道をつくろうという……。手のひらを返したような話で、今度は逆に心配になってくるんですよ。

河合 日本中、これまでに大方がセメント漬けできた。きつい見方かもしれないけど、今度は予算を確保するためにそれをつぶすんですよ。そのために、今度は親水空間とか、多目的自然工法とか、また掘り返している。そうすれば予算確保できるという仕組みじゃないかと疑っている。だからそのためにいっぺんセメント漬けにするんじゃないかなあ。官僚は賢いから、セメント漬けが悪いことなんか知っている(笑)。

間宮 森林文化は人間と森林が創る共有空間みたいな所だというお話がありました。どうしても市場経済のもとでは人間の方が優勢になってくるところがありましてね。ですから公共事業も経済効果を優先させるんですね。道路を造るにしても、経済効果が何兆円ある、だからこれは工事の価値があるんだというふうに考えられる。その結果、都市がますます悪くなっていくわけです。

河合 僕は経済学者の悪口を言うわけじゃないけど、すごくおかしい話だと思えますよ。政治家と業界、官界とがものすごく密着している。なんで公共投資やるかというのと、「土建業者」のためとしか思えない。あの金どこに行くかというね、結局政治家の所に還流する。そういうシステムを、田中の角さん以来、ガチッとつくってあるんですよ。だが、本当に経済効果があるのか、僕ら疑問を持つけど。多少言いすぎだと思うけど、あんまり腹がたつから、これくらいのことはいいたいですね。

間宮 まあ全体の経済効果よりも、「土建業者」に対する経済効果というのが大きいんでしょうけれど。

森林にとって道というのは、普通は悪いものと言われているけれども、必ずしもそうじゃないんだと北村先生はいつかおっしゃってましたね。それは道が人間と自然との接点をつくるということなんでは



丹波の森公苑内の砂防堰堤。コンクリート表面を木製パネルで覆い、周囲の森景観と調和させようとしている。

写真(上)
丹波地方に残るカヤぶき屋根農家。



ようか。

北村 自然にとつては、あまり

手を触れない方がいい。しかし私は自然に接触するための道というのがなければ、そこに誰も行けないんじゃないか、というふうに思っているわけです。だからそのへんのバランスをどうとるか、どこで折り合いをつけるかというところに、結局は帰着してしまうのではないかと思うんです。本来の道というのは、自然を壊すためのものではないはずで、先ほどのお話

にありましたウイーンの森でもシュヴァルツヴァルトでも、道が森林を荒らしているというのではなくて、逆に道があるために森林が非常にうまく管理されているのです。シュヴァルツヴァルトでは、道を造るのはお上の仕事ではなくて協会や法人をつくってやっているわけです。そこまですばらしいんじゃないかな、と思うんです。

間宮 それから林野行政。国有林は独立採算制をとっているわけですね。営利事業じゃないにもかかわらず、コストに見合うだけの収入がないといけない。膨大なコストが掛かるわけですから、収入を得るためには木を売らないといけないわけです。それが森林の破壊をますます促進していくように思うのですが。

北村 一時期そうやって、国有林を一生懸命伐ったわけですね。見かけの収益がある間はそれで何とかごまかしがきいたんですけど、今はもうどういふふうな細工をしても儲からないところまで来てしまったわけです。

河合 独立採算制を導入したこと自体が、もう根本的な間違いだと思いますよ。

北村 ええ、あれは誤りです。

河合 今はまだいいけど、昔はもう無茶苦茶でした。山がどんどん裸になっていくわけですよ。独立採算制とつたらそうせざるを得ないわけです。それで後で植林しました、山を維持しましたということですね、営林署長は榮転していきよるわけですよ。独立採算制をとる限りはあ

る意味でしようがないんでしょうねえ。

北村 あれねえ、やっぱり思い上がりですよ。

河合 だから独立採算制にするのがおかしいんでね。森を守るのは国防だと考えればね、いいんですよ。

北村 コストも国土保全費といいますかね。

間宮 森林は「生産資源」と「環境資源」と「文化資源」という三つの面を持っているわけですが、独立採算制というのは、森林を生産資源、木材という点からだけ見て、環境（資源）とか文化（資源）とかの生み出す価値をぜんぜん計算にいられてないわけです。

河合 そういうことなんですねえ。

間宮 それを勘定に入れますと、森林はすごいベネフィットを生み出しているわけです。

北村 今までの国有林の経営の中には、生産資源以外のものは、じつは、ほとんど念頭になかったんですね。今でこそ環境のために役に立ってますとか、レクリエーションに使えますとかいうようなことを言っていますが、はじめから念頭にあったわけではないのですね。そして儲かったように思ったのもじつは見かけだけ。経済学の方を前にして悪いんですけど、林業経済の専門家、あの連中は何しとったんだろうと、私今でも腹が立つんですね。

河合 だから生産といっても、木材中心に考えなくとも、森林があるために豊かな水を保つてるといふこと、これはすごい生産をしているというふうに考えなければいけない。水がなければ生活できないし、それから田んぼを潤してくれるし。生産というものをそういう目で見ればね、環境資源イコールものすごい生産資源なんですね。だけどそんなことは勘定に入れてないわけですよ。木を伐って、売ったらいくらになるかというものすごい単純な話になっている。

北村 話をすぐお金の計算に持っていくわけですね。ここは何兆円の働きをしているとか。そういつてしまふともう行き止まりなんです。

河合 けどね、お金の計算も、これだけの水資源を保ってるからという計算をしてくれたらいいですよ。

北村 これはね、一応だしてるんですけども。

河合 経済効果というのなら、空気の浄化作用や防風効果と



丹波の森公苑内のアトリエ。
手前が絵画アトリエ、奥が彫刻アトリエで宿泊しながら創作ができる。

写真（上）
新緑とスギ林

かも入れて。これだけの浄化をするにはどれだけの費用が要るかといったことも勘定に入れるべきですよ。

北村 まったくそうです。ただ聞く方がね、聞き流すだけになるんですよ、数字を言いますとね。やっぱり心から、いやほんまに大事な事やなあという、それを呼び覚ますということをやらないかんですよ。

間宮 森の管理のあり方というのがかなり大事になってくると思います。ある本で読んだんですけども、東南アジアの熱帯林では、最初焼畑をやっている人達が、ローテーションをつくって焼くなど、いろいろな慣行というのを持っていて、それが森林が消滅するのを防いでいた。ところが森を国有にしたために、かえって森が消失したというケースがあるんですね。国が伐採権を売ったり、そうじゃなくても、これまでの焼畑農民の生活環境を壊していくことによって、森林が破壊されていったわけです。日本の森林の場合にも、国有林にしろ、民有林にしろ、やっぱり森を維持していくための管理のあり方というのがあると思うんですね。その点についてはいかがでしょう。

北村 管理のあり方の技術的な面だけだと、今日可能な限りの技術は注ぎ込んでいりし、体系は出来上がっていると思います。でもそれを使うのが人間やということ、そこでいろいろな問題が起こると思うんですね。たとえば森林なんていうのは大きな面積になるほど、非常に合理的な管理ができるということで、国有林なんかも、そういうふうな利点があるって言われてまいりましたですね。それを実際にやったのが東ヨーロッパ。全部国有林にしてみたら、これはもう全然あきませんね。だから結局、唯一の体系というようなことではなくて、その間に介在する人間の問題を考えていかなくてはならない。技術体系は、私は、決して外国に比べても劣っているとは思わないですけども、何が抜けたかというところ、ちょっと抽象的ですけど、魂が抜けてやってきた所に問題がある。つまり森林の生産資源以外の効用に関して配慮が足りなかった。技術体系からいえば何も変わりがないみたいですけど、私はそれを意識するかしないかでものすごい違いがあるんじゃないかなあと思っています。

間宮 そうですね。生産資源として捉える場合でも、営利的に資源をとる場合と、昔ながらのやり方で、そこに住んでいる人が資源を利用する場合とは、やはり違うと思うんですね。森を生活の場に行っている人は、なくなったら大変ですから、大事に資源を利用しますね。

北村 日本では針葉樹に委ねすぎたという所に、じつは問題があるわけですよ。技術体系は針葉樹に対してはきちっと出来上がっていますが、針葉樹でいくべきかどうかというところには話がいらないで、すべて針葉樹にしてしまう。植えられる限り植えて、この辺なんか、もう、すごいもので、こんな急傾斜にみな杉を植林しています。経済的な観点からいえば、最高の方法なわけですけど。

間宮 針葉樹というのは木材資源だけで、他の用途は……。

河合 木材資源一本ですね。

間宮 一本やりですか。

北村 他の効果がないことはないですけど、そんなことは全然念頭に置かないで、木材、木材ということできたわけです。その象徴が針葉樹一辺倒。長崎県あたりも結構多いと思いますし、佐賀県にも多いですね、針葉樹の植林が。あすこは八〇%近くは針葉樹。やはり技術の体系でなくて、それをどう適用するかという所に問題があった。それにもう一つは、先ほども言いましたように、見かけの儲けに幻惑されて、それを本当に儲かったと思いついてしまった。先人の植えたものを伐って、一時に収入を増やしたからといって、どうして儲けになるのか。国有林の場合にはそういうことをやっていたのではないかと思うんですが。

森 人と自然の共生空間

河合 それもねえ、割合最近ですよ。そんなことになってきたのは。それこそ、薪とか柴とか山の幸をくれるものはみんな広葉樹だったわけですよ。ところが、里山燃料が要らなくなったものだから、拡大造林政策で、広葉樹林を全部つぶして、みんな針葉樹に変えていった。つまり何が有効かという考え方が、非常に単純だったんじゃないですか。だから今その見直しが始まっている。里山がすごいブームをよんでいるのはそこだと思うんですね。山を、たとえば林野庁のものじゃなくて、国民のものにしろ、みんなのものにしろ、そういうムーブメントが起こっているんじゃないかと僕は思います。けど山を楽しもうと思うと針葉樹じゃだめ。昔の雑木林、これがもう一番楽しい森ですよ。昔は、雑木林はとくに薪炭林として非常に有用だったけど、今は薪炭林じゃなくなって、今度はみんなの楽しむ場所として、人間だけじゃなくて、鳥も、蝶々も、カブト虫も、生きものみんなが楽しめる、



三國峠より篠山盆地を望む

そういう森がほしい。最近では林野庁もそういうことだにぶ対応しませんでしたね。けどね、悔しいのはね、国有林の林道、あれみんな綱引つ張ってあるじゃないですか。入っちゃいけないとね。けちだね。林野庁も材木だけじゃなくて、青少年の遊び場所とか、キャンプ地だとか、そういうことをどんどんやりだしたけれど、ごく一部を開放しているだけですね。やっぱり性悪説にもとづいているんですかね。人間は悪いことをするんじゃないかと、国の財産を侵すんじゃないかと、なにかそういうお上意識がまだあるんじゃないですか。

北村さん、これがドイツなんかだったら、森を、それこそ林道を造って、どうぞお歩きくださいということになる。あそこは針葉樹が多いですよ。それは材木にも使うし、みんなの遊び場にもしている。全部が公園としての役をしていますね。

北村 針葉樹はまるつきり悪なんじゃなくて、バランスの問題なんです。今おっしゃったように全体をうまく組み合わせ、牧草地もみな含めて、公園のような感じになっています。先ほどおっしゃったコモンスズですね、入会地ですよ。私に言わせれば、ヨーロッパではどこでも森は入会地です。住民でありさえすれば、要するに人間でありさえすれば入ってもよろしいということ。そういうのが確立しておりますね。水源になっていて、人間が入ると困るとか、目下伐採中とか、非常に限られた所だけが入ってはいけないんで、どこでも入れる。しかし車は入れない。これはまた非常に峻別されていますね。そのへんを見ても、なかなか森林との関係がうまくいっているな、と私は思っているんです。確かにおっしゃったように、コモンスズの考え方を全体に及ぼすと、性善か性悪かということが問題になります、ある程度しやうがないというところもあると思いますよ。ヨーロッパだって不埒な者がいて嘆いております。空缶捨てるやつがおつて困るとか。しかし程度がぜんぜん違うという感じがするんです。

こないだ森林文化協会のシンポジウムに出ていたフィンランド生まれのハシモト・ライアンさんですか、あの人の話では、フィンランド辺りは非常に馴染みやすいみたいですね。だから私はドイツ人よりもフィンランドの方がはるかに森に対して姿勢が謙虚だと思えます。この謙虚さというものを日本人は失ってるんじゃないかという感じがするんです。

河合 ちょっと話をかえると、北村さんの日本とヨーロッパの森林観

のいろんなアンケートを見て、僕がすごく面白かったのは、森に神が宿っているか、というアンケートね。日本人が一番そう思っていると思つたら、そうやないんですね。最低は東京ですね。あれ確か二四%ぐらいだったでしょ、東京は。ところがドイツはだいたい五〇%に近いですね。

北村 ドイツが五〇%近くて、フィンランドとフランスが六〇%以上ですね。

河合 森にはなにか超越的なものを感じて、神が宿っている、霊が宿つてると思つているわけですよ。そう思っているのは日本人だけだと考えるのは大間違い。でも、日本でも田舎にいったら違いますね。

北村 田舎にいったら、先ほどのね、植物だけでなく動物もおると、そういうふうな共生の世界が森林なんです。そういうふうには森を見て、そこには妖怪変化もおる。妖怪変化というのは悪いんじゃないかと、いうなれば神様の変形だと思えます。勝手なこんな話しとつたら山折（哲雄）先生なんか怒られるかもしれないけど、それは大事なことだと思えますね。

河合 だから、宮沢賢治の童話に出てくる山男とか、山猫とかねえ、ああいうのはみんな、それこそ里山と奥山をつないでいく一つの妖怪、「怪」と言う言葉はびつたりしないけど、妖怪、霊異というものたちですね。

北村 妖精、うまいこと言ってますね。その怪しげなあれでなくて、なんとなく神秘的な感じで。ムーミンなんかがそうなんです。あれがまさにそういう役割をもっている。それらはだいたい里山、まあ奥山と里山の境目辺りにうろろ出没するんじゃないかと、私は思っているんです。そんなことをあんまり言いますと、なんだ、こいつら自然科学者か、というふうに言われるわけですよ。それがよくないんですよ。自然科学者はそんなこといったら恥づかしいなんていう。そういうふうな姿勢で今までの自然科学がきたところに問題があるとだから丹波には妖怪をもうちょっと入れるような空間を創ったほうがよろしいですね、本当に。

河合 丹波の森にも、やっぱりそういう妖怪たちを育てんといかんね。間宮 今日、本当に面白い話、どうもありがとうございました。



多紀郡中央部の連山、多紀アルプス



丹波の森、ユニトピア篠山のカツラ並木

「東西文明の交流」を越えて

川勝平太

HEITA KAWAKATSU



川勝平太（かわかつ へいた）
一九四八年、京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。同大学院
修了。一九八五年に博士号（オックスフォード大学）取得。一九九
〇年より早稲田大学政治経済学部教授。主な著書に、「日本文明と
近代西洋―鎮国再考」（NHKブックス）、「富国強兵論」（紀伊國屋
書店、アジア太平洋賞特別賞、編著「海から見た歴史」（藤原書店、
佐伯啓思氏との共著「静かなる革命」（リブポート）、ほか。

一、「東西文明の交流」パラダイムの終焉

一九世紀はヨーロッパの世紀であり、富
国強兵を立国の柱とする力の世紀であった。
一九世紀の東洋諸国は、西洋列強の東漸の
もとに、その圧倒的な力に屈し、ほとんど
が植民地と化した。そのなかにあつて独り
日本は政治的には独立を、経済的には工業
化を、文化的には西洋化を推進して、アジ
ア最初の近代国家となった。

近代化を推進した日本人の態度は和魂洋
才といわれる。だが、明治の日本人はどれ
ほど和魂を自覚していたのであろうか。当
時の最高知性と目される福沢諭吉（一八三
五―一九〇一）にとつてすら、文明とは、
東洋文明ではなく、西洋文明のことであつ
た。福沢は明治日本の指針を「西洋文明を
目的とすること」（『文明論之概略』）とし
た。福沢晩年の『福翁自伝』に「どうして
も国民一般を文明開化の門に入れて、この
日本国を兵力の強い商売の繁昌する大国に
してみたいとばかり、それが大本願で」、
「ただ独りで身になうだけのことは勤め
て開国一偏、西洋文明一点張りでありキンで
いる内に、いわゆる文明駁々乎として進歩
するの世の中になったこそ実に有り難い幸

せで、実に不思議なことだ、いわば大願を
成就したようなものだ」とあるとおりであ
る。福沢は一九〇一年に没した。日本はそ
の前後に日清・日露戦争に勝つて富国強兵
の実をあげ、五大強国の一つに数えられ、
文明の仲間入りをした。福沢の夢の一端は
かなえられた。

その結果、二〇世紀になると、一部の日
本人エリートのみだに東洋文明への自覚
が高まった。二〇世紀前半の日本人の文明
論は、東洋文明の自覚と覚醒をめぐって展
開した。それは英文で書かれた内村鑑三
（一八六一―一九三〇）の『代表的日本人』、
新渡戸稲造（一八六二―一九三三）の『武
士道』（一八九九）、岡倉天心（一八六二―
一九一三）の『東洋の理想』（一九〇四）、
『日本の目覚め』（一九〇五）などに共通す
る。いずれも東洋の精神文化が西洋文明に
勝るとも劣らないものであることを西洋社
会に向かって知らしめんとしたのである。

一方、日本社会に向かつては、大隈重信
（一八三三―一九二二）は、晩年に「東西
文明の調和」をとえ、それを実践するた
めに一九〇八年に大日本文明協会を創設し、
数百巻の文明叢書を刊行した。それは、佐
藤能丸『近代日本と早稲田大学』（早稲田
大学出版部）によれば、明治初期の明六社、



写真（上）
東南アジアの島々から中国に
向け出荷される干しナマコ
（インドネシア、東南スラウ
エシ州）。（撮影 田中耕司）

自由民権期の共存同衆の活動の比ではなく、
世界文明の発展に寄与しうる国民を育成し
ようとした国民的規模の文化運動であった。
大隈重信の最晩年の著作『東西文明之調和』
（一九二二）は、おもにギリシャ・ローマ
文明に対して、東洋古代の仏教・儒教を意
識したかっこうで執筆されている。東洋文
明は精神文明として自覚されていたのであ
る。

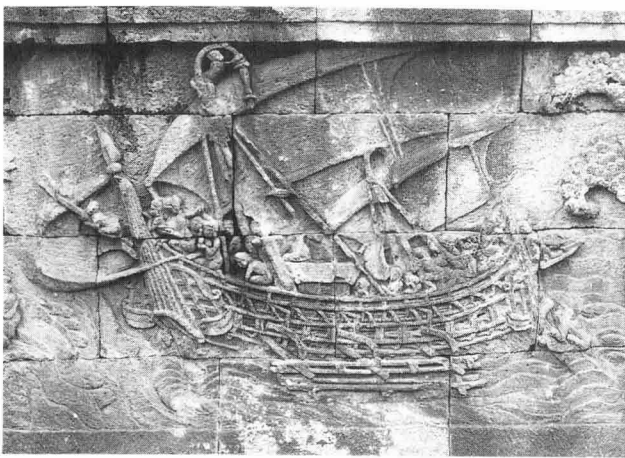
このように、二〇世紀前半の文明論は、西洋文明と肩をならべうる東洋文明の精神性の独自の価値にたいする覚醒のうえにたち、それを内外にむけて発信しようとしたものであった。

しかし、東洋の盟主を目指した日本は先の大戦で完敗し、ポツダム宣言をうけいれ、戦後はアメリカニズムの波にのまれた。戦後日本にあつて、東洋文明の精神性ないしは日本の伝統的価値を称揚する者は反動の烙印をおされた。戦後日本思想の指導者大塚久雄（一九〇七―一九六）や丸山真男（一九一四―一九六）にはアジア的価値への積極的言及はない。彼らは「後進日本」に向かつて西洋近代の基礎を諄々と説いた。そこにある支配的テーゼは「日本は後進国である」というものである。戦後の日本人は、物量面ではアメリカに憧れ、精神面でも近代西洋に比べて後進的であるという劣等感の呪縛にとらわれたのである。

戦後は、戦前とは異なり、「東西」といえば、東西文明のことではなく、西洋文明の枠内でのイデオロギー対立が世界大に拡大し、東の社会主義と西の資本主義の対立問題に変わった。「東洋文明」は東西イデオロギー対立、力と力の対決する政治・外交・軍事対立のなかに埋没した。だが冷戦が終結し、ハンチントンの「文明の衝突」論に代表されるように、イスラム文明、儒教文明など、西洋文明とは異なる東洋的価値の違いを問題とする文明論が浮上してきた。

しかし、二二世紀の文明の課題は、戦前期のような「東西文明の調和」におさま

きるものではない。なぜならば、第一に、「東洋」というコンセプトに対して、東洋人の側から異議申し立てが始まった。サイード『オリエンタリズム』（平凡社）に詳論されているように、「オリエント（東洋）」というコンセプトは自生的なものではなく、西洋から押しつけられた他律的なものであり、「東洋」なるものの存立基盤が問われている。第二に、西洋近代文明の繁栄の基礎である「富国強兵」の原理が、情報社会の到来とともに、揺らいでいる。西洋近代文明の富国の基礎は私的所有権の確立にある。ところが、情報は排他的私有に適さない。土地財産は分ければ減る。それに対して、情報は分けなくても減らない。むしろ、分ければ分けるほど増える。情報化の進展は近代の富国化の基礎であった排他的な私的所有権を揺るがす可能性をはらんでいるの



である。また、冷戦時代の軍事用の情報システムの民生用への大転換がおこり、軍縮が歴史の趨勢になりつつある。近代西洋文明の富国強兵システムがなしくずしに崩壊しつつあるのである。かくして、精神文化の高さを誇った東洋文明も物質文明の豊かさを誇示した西洋文明も、それらの基礎が揺らいでいる。そうである以上、もはや旧来のように両者の融合を理想として明るい未来を展望できる時代は終わったというべきである。

二、「太平洋文明」の時代

二一世紀は、今日の趨勢が続けば、太平洋の世紀になるであろう。今世紀の太平洋には東西のベクトルが働いた。たとえば今世紀前半、新渡戸稲造は太平洋を股にかけて東西文化の架け橋たらんとし、今世紀後半は、東西冷戦のもとケネディ元大統領の肝いりでハワイに東西センターという研究機関が設立され、優れた成果をあげてきた。二〇世紀には文明史的にも戦略論的にも「東西」を考えるべき十分な理由があつた。

しかし、二一世紀を前に、東西冷戦は過去のものとなり、アジア太平洋の担い手になるべきAPEC（アジア太平洋経済協力会議）のメンバーにはパプア・ニューギニアのような東洋にも西洋にも属さない地域が含まれている。太平洋の花ともいふべきメラネシアやポリネシアのマイクロスステイツ（Micro-states, 極小国）の存在を考慮すれば、二一世紀の太平洋をこれまでのように東西のベクトルだけで構想するのは不適当

写真（上）
古代インド洋の航海を描く、
インドネシア、ジャワ島のボ
ロブドゥール寺院の壁面レリ
ーフ。（撮影 田中耕司）

写真（次頁）
中国福建省福州の船上生活者。
（撮影 田中耕司）

であろう。

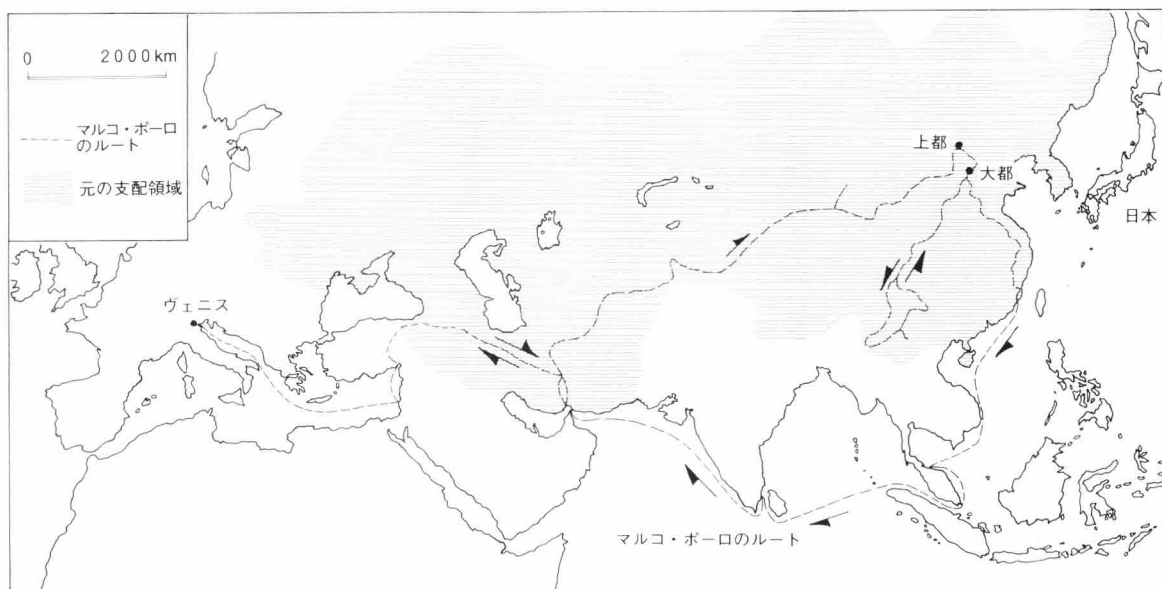
では、どのような柱を立てればよいのか。「海」という観点から世界史・文明史を構想し直すことが適切であると考え。なんといっても太平洋は世界最大のオーシャンである。また日本は島国であり、海との関係は切っても切れない。ところが、これまでの日本史は、非農業民の役割を摘出した網野善彦氏の一連の例外的仕事はあるが、農本主義的な発想で書かれてきた。高校の歴史の教科書では日本史は世界史と切り離され、大学受験で日本史を選択する者は世界史を知らなくても済む。文字通り鎖国的な日本史理解がまかりとおっているのである。「アジア・太平洋」という海の新時代がすでに幕を開けている現在、内陸に閉じこめられた陸地史観から開かれた海洋史観に転換しなければならないであろう。



「太平洋は大きい」とイメージされがちである。だが、日本人宇宙飛行士が何人も宇宙を旅し、「地球は小さい」という認識を、日本の少年少女に語って聞かせてくれている現在、かけがえのない宇宙船地球号のイメージは国民一般にひろく共有されるようになった。太平洋は世界最大のオーシャンではあるが、地球の一部でしかない。それを「小さく愛すべき我らの湖」として包み込む大きな器量がいる。

最後に、海洋史観にたつて、少し長いスパンで文明史を眺めかえしつつ、二一世紀の太平洋を展望してみよう。それは文明の舞台が「陸」から「海」へと移ってきたことを確認し、二一世紀の「可能性としての」太平洋文明のヴィジョンを得るためである。

歴史に最初に登場する文明はチグリス・ユーフラテス、インダス、黄河などアジア大陸を縫って流れる大河の流域に栄えた。陸の道（シルクロード）は大陸文明を結びつける大動脈であった。一二、一四世紀に史上最大の版図を誇った元帝国は、陸の大動脈シルクロードを押さえ、それまで大陸文明の周辺で発達していた海の道（香料の道）「陶磁の道」などと呼ばれる）に結びつけた。元中国に滞在したヴェニス商人マルコ・ポーロは、往路はシルクロードを逆進して大都（元的首都）に至り、復路は船でシナ海―インド洋の海の道を通じてヴェニスに帰還した。この事実が示しているように、元代に「陸の道」と「海の道」を結ぶ世界最大の循環路が出現した。その結果、文明の重心が次第に陸から海に



マルコ・ポーロの旅行経路

移り、「海洋アジア」が世界史の表舞台に登場したのである。

「海洋アジア」の中心はシナ海とインド洋の交わる「東南アジア海域世界」であった。東南アジア海域世界はさまざまな文明の交差路にあたり、一五〜一七世紀の東南アジア海域世界は、アラブ・イスラム文明、ヒンズー文明、中華文明のみならず、その周辺海域からあまたの民族が特産物をもって集散し、「商業の時代」を現出した。繁栄する海洋アジアに最後に加わったのが日本とヨーロッパである。

日本は、環シナ海域に勢力をもつ「海洋中国」から文物を輸入したが、徳川期に生産革命によって国内自給に成功して経済的自立を遂げ「鎖国」を形成した。日本の生産革命Ⅱ勤勉革命の原型は、土地生産性を重視した江南農法にある。江南農法は南宋期に生まれ、一五世紀に中国内陸部、一六世紀に朝鮮、一七世紀には日本に伝播して大開発時代を生み、徳川日本の土地生産性は世界一になった。日本は中国文明から離脱して脱亜を遂げたのである。一方、ヨーロッパは「海洋イスラム」から輸入した文物を、大西洋を股にかけた生産革命によって自給して経済的自立を遂げ「近代世界システム」を形成した。ヨーロッパの生産革命Ⅱ産業革命の原型は、労働生産性を重視したアラブ農業革命にある。イギリスの労働生産性は世界一になり、イギリスを中核とする近代世界システムはイスラム文明から離脱して脱亜を遂げたのである。

大英帝国Ⅱパクス・ブリタニカと鎖国Ⅱパクス・トクガワナとは、一見相異なる

が、大英帝国は海洋自給圏、徳川日本は陸地自給圏をつくりあげたとみれば、違いとともに共通性も見えてこよう。イギリスは大西洋をまたにかけた大英帝国という自給経済圏を成立させ、自給圏の中で自由貿易を謳歌した。大英帝国が自由貿易の原理に立脚したことは疑いないが、それがイギリス中心の自給圏の拡大であったことは強調されてよい。同時期の徳川日本は、海への指向とは逆の「鎖国」という内陸自給経済圏への道を歩んだ。それは無限の可能性をひめた海の世界から小さな孤島への回帰であると特徴づけられる。海と歴史との関係は深い。

「海洋アジア」の両端に浮かぶ日本とヨーロッパに出現した近代経済社会は、一九世紀末から今世紀前半に「海洋アジア」の中心「東南アジア海域世界」に回帰し、その市場をめぐって熾烈な争奪戦を演じた。アジア太平洋戦争である。日本は経済戦には勝利したが、軍事戦において敗退した。

西洋最初の経済社会Ⅱイギリスと東洋最初の経済社会Ⅱ日本はともに島国であるが、大英帝国が世界の陸地の四分の一を支配し、またヨーロッパと合わせれば、地球の陸地のわずか三%の面積を占めるにすぎないヨーロッパの諸帝国が一八〇〇年に全陸地の三五%、一九一四年には八四%を支配した近代日本もそれにならって大陸の覇権的支配をねらった。近代社会は島国に誕生したが、陸地領有的体質を払拭できなかったのである。

現代は「アジアの時代」といわれる。その実態はNIEESでありASEANである。

言い換えれば西太平洋に位置する「海洋アジア」である。西太平洋には世界のなかでもっとも島々が集中している。日本列島もかつていみじくも「ヤポネシア」と名づけられたように、六八〇〇の島々から成る。西太平洋は多島海世界である。

情報社会の到来とともに、ネットワーク型の文明が出現しつつある。世界史は、「大陸文明」の過去から、陸との臍の緒が絶ち切れなかった「海洋への離陸期」の近代を経て、海に浮かぶ島々が情報のネットワークで結ばれる相互依存の「多島海文明」の未来に向かっていく。日本列島は三日月の弧を描いている。海洋アジアも日本列島から東南アジアにかけて三日月の弧を描いている。それは「豊饒の海の三日月地帯」である。そこに出現しつつある新文明を、さしあたって、「太平洋多島海文明」とな

づけておこう。



豊饒の海の三日月地帯
(Sea of Fertile Crescent)

ゴアの一夜 エンゲルベルト・ヨリッセン



Engelbert Jorissen (エンゲルベルト・ヨリッセン)
一九五六年、ドイツ生まれ。ケルン大学文学部Dr. phil.、京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科助教授。日欧、主に日本と西南ヨーロッパの交流史（文化と文学）やポルトガルの植民地政策史を研究している。主な著作に『カルレッティ氏の東洋見聞録』（P.H.P.、一九八七年）、『Das Japanbild im "Traktat" (1585) des Luis Frois』（『フロイスの「日欧文化比較論」における日本像』、Aschendorff、一九八八年）など。

I 三人の男

一五五四年三月一六日（金曜日）の夜更け、三人の男が、ゴア市の小さな暗い部屋に集まっていた。まだかなり暑かったので、彼らは窓を開けていた。マンドヴィー川の河口から吹き寄せてくるアラビア海の微かな風に蠟燭の光が少し震えていた。風の波に乗って、近くのルア・ディレイタ（当時の中央通り）の方から微かに人声が流れてきた。コーチンから到着した船から死体が下ろされ、町の中へ運ばれたのは、その朝のことであった。副王アルフォンソ・デ・ノロンヤをはじめ、ゴアの騎士たちと五、六千人の大衆が岸辺でその死体を待っていた。

三人の男の年齢・身分は、かなり異なっていた。年長の男は五〇歳を越えており、真珠の貿易を生業としていたが、植物、とりわけ葉草やスパイスに深く通じていた。真中の男は、貿易の経験の豊かな商人で、ちよつとした財産を蓄えていたが、彼にはどこか落ち着かないところがあった。二人ともすでに二〇年ほど前に来印していたが、商人の方は来日三回を含めて、東南アジアもよく旅していた。三番目の男はまだ若く、

イエズス会の伊留満だった。三人の名前は、ガルシア・ダ・オルタ（一五〇〇年頃～一五六八年）、フェルナン・メンデス・ピント（一五〇九年頃～一五八三年）、ルイス・フロイス（一五三二～一五九七年）と言った。そして数時間前に運ばれてきたのは、一五五二年二月三日、中国到着を前にして、マカオ近くのサンチャン島で亡くなったフランシスコ・ザビエル（ハビエル）の死体であった。

三人がその夜どんな話をしたのかについて、詳しい資料は残っていないが、それぞれがある不安を隠せなかったであろうことは十分想像することができる。ダ・オルタは、一五四八年一〇月九日ゴアに到着したフロイスに、一五四三年のジェロニモ・ディアスの悲劇を語りはじめた。改宗ユダヤ人であったJ・ディアスは、密かにユダヤ教を信じていた廉で訴えられて、ゴアの司祭や総督らの取り調べを受けた後、まもなく異端者として死刑を言い渡されたのである。公開で懺悔をしたため火炙りの刑に処される前に絞殺されたのは、カトリック教会側の「慈悲の行為」だったのだろうと説明しながら、ダ・オルタは怒りに満ちた苦笑いをするしかなかった。

その時ピントも悲憤を抑えられなかった。

ユダヤ教の信者は言わずもがな、カトリックにとつてのあらゆる異教徒に対して、ポルトガル人は、基本的に経済的理由から宗教的不寛容主義を徹底させていた。「盗みを働きながら説教することが、この世を始める専制君主たちと同じように、主よ、あなたを満足させることができると考えているこれら哀れな愚かものたちのように、あなたについてかくもよく語りながら、あなたの掟をかくも用いない人々がこの世に存在することを我慢しているとは、主よ、あなたの忍耐力は祝福されてあれ」と、ピントは軽蔑的な皮肉を飛ばした。今や聖人のようにこの地に迎えられたザビエルが、ディアスの処刑から三年経った一五四六年、ユダヤ教を信じる者が多すぎるため、ゴアにも異端裁判所が創立されるべきだと進言していたことを、三人とも覚えていた。その上、日本へ出発する前にザビエルが、日本にはユダヤ人もイスラム教徒もいないので日本の宣教活動は早く進められるだろうと言ったことも、彼らは知っていた。このような発言と、キリスト教の主張する神の前でのあらゆる人間の平等とはどう結びつけばよいのか。

フロイスは、数年前ゴアの聖パウロ学院で学んでいた時、諮問委員として学院に籍

(1) Fernão Mendes Pinto, Peregrinação (1614), facsimiled, 天理図書館, 1973, folh. 59v; ここはF・メンデス・ピント、岡村多希子訳『東洋遍歴記』、全三巻、平凡社（一九七九～一九八〇）一九八七年、第一巻、一八五頁から引用。

を置くダ・オルタに紹介されていたが、ピントとこんなに親しく話をするのははじめてだった。頭の回転が早く想像力の豊かなピントが、現実と想像をはっきり区別できない人間であることを、そのときフロイスはいち早く見破っていた。

Ⅱ 三人の出自

以上見たダ・オルタもピントもフロイスも、それぞれの出自に基づき、ヨーロッパ拡張政策への対抗—アイデンティティが色

濃く出た文学的活動を行っていた。植物学者や熱帯医学の先駆者として知られるガルシア・ダ・オルタの『インドの庶物本草』についての対話^②、冒険家・小説家として知られるメンデス・ピントの『東洋遍歴記』、さらに日本の宣教師ルイス・フロイスの『日本史』や『日欧文化比較論』を読むと、そうした傾向を認めることができる。

一五〇〇年頃に生まれたピントが幼い時から繰り返し聞いていた話のうち、おそらく二つのことが彼に大きな影響を及ぼしていたにちがいないかった。その一つは、一四

九七年にユダヤ人がポルトガルから追放されたことであり、今一つは一五〇六年三月に起こったリスボンのユダヤ人虐殺であった。ユダヤ人が一四九二年にスペインから追放されたとき、その多くは、隣国のポルトガルに住む許しを得たが、ポルトガル王室の政治方針が変わり、彼らは元からポルトガルにいたユダヤ人と一緒に再び追放されることになった。それに輪をかけて残酷だったのは、一四歳以下の子供はポルトガルに残らなければならないということであった。D・デ・ゴイスの『マヌエル年代記』



バグドグラ（北インド）の近くにある日曜市（撮影は筆者。以下同じ）

②『対抗—アイデンティティ』という概念は S. Greenblatt, *Marvelous Possessions*, Chicago UP, 1991: (S・グリーンブラット『驚異と占有』、荒木正純訳、みすず書房一九九四年)の中の使い方にしたがって使われる。それについては pp.150-151、二二六—二三八頁を参照。

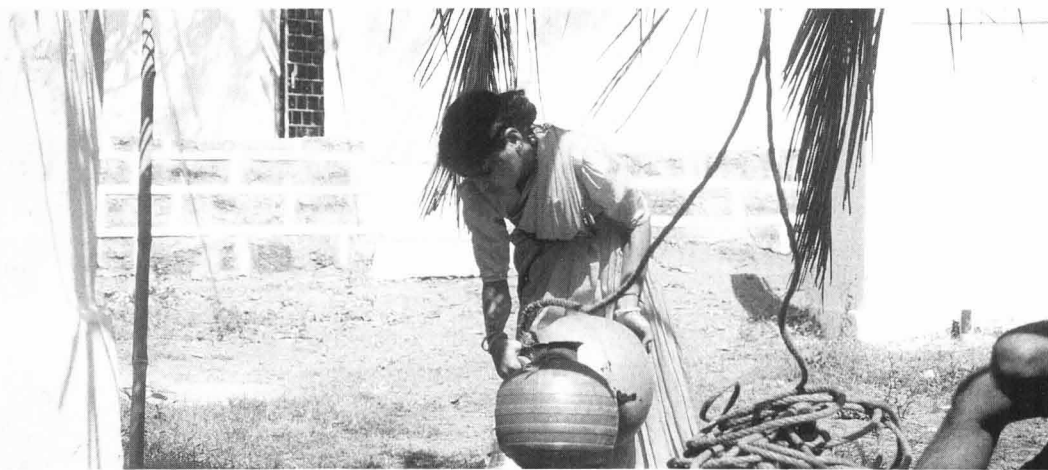
によれば、時を同じくしてポルトガルから追放されたイスラム教徒の子供たちは両親と一緒にポルトガルを出ることを許された。このような差異が生じたのは、ポルトガル人がイスラム諸国での復讐を恐れたからであった。

ピントが生まれる少し前の一五〇六年四月一九日から二一日にかけて、リスボンで一九〇〇人以上の改宗ユダヤ人が虐殺された。ゴイスの『年代記』によると、それは大衆ヒステリーの結果であったが、そこには当時ポルトガルとスペインで反ユダヤ主義がますます高まっていたという背景があったと見なければならぬ。

モンテモル・オ・ヴェリヨ生まれのピントは、少年の頃叔父に連れられてリスボンにやって来た。

アメリカの文学者レベッカ・カッツによると、ピントは改宗ユダヤ人であり、当時アントワープで貿易活動をしていた有名なユダヤ人、メンデス一族と関係があったという。少年の頃リスボンで暮らしたことがあるピントは、ますます厳しくなる反ユダヤ主義のなかで何度か身の危険を感じたことがあったはずだ。だから、一五三六年に異端裁判所が創立されてから一年もたたない一五三七年の春、リスボンを出港する船団に乗り込んでインドへ出発した方がよいと、ピントは決断したにちがいがなかった。

ところで、ピントの小説『東洋遍歴記』は、明らかに、一五世紀末から一六世紀にかけてイベリア半島のマラーノ世界に生まれたピカロ小説に属するものであり、その一つの典型とも言われるものである。ピカ



オールド・ゴアのイエズス会士養成学院裏の古井戸で水を汲む少女

ロを主人公とするピントの物語には、たとえばフェルナンド・デ・ロハスの『ラ・セステイーナ』の場合がそうであるように、言葉遊びや仮面劇など、さまざまな偽装が施されている。それはマラーノたちが、異端裁判所の脅威を前に、とらざるを得なかった生きる術であった。

ガルシア・ダ・オルタの場合、ユダヤ系の出身であることがもつとはっきりしている。ダ・オルタが一五三四年にリスボンからゴアへ旅立ったのも、異端裁判所の創立と無関係ではない。一五六九年に死亡するまで、ダ・オルタは、少なくとも一時的にはゴアのイエズス会士たちにさえ認められた学者として活動していた。

西インド海岸で貿易活動にも従事したダ・オルタは、スパイスに対する関心もあったが、彼とインドとの関係が、一般のポルトガル人とインドとの関係とまったく異なるものであったことは言うまでもない。つまり彼は、スパイスと魂のためにインドへやって来たと言ったというヴァスコ・ダ・ガマにつづく商人や宣教師とは異なる角度からインドを見ていたのである。ダ・オルタは「マラバールの金」と称されるコーチン・トラヴァンコール（現ケララ州）の黒胡椒で金持ちになろうなどとは思ってもしなかったし、植民地政策の犠牲者になるインド人にカトリック信仰を押し付ける気持ちも毛頭もっていなかった。

ダ・オルタの『インドの庶物本草』についての対話』について言えば、まず対話というジャンルの設定やその対話の相手の選択が重視されなくてはならない。ダ・オルタ



パンジム（ゴア州）のメネセス・ブラガンサ研究所にある異端審問テーブル

はその対話のなかで、植物学の次元をはるかに越えて語っている。自分自身が見たもの、経験したものだけを伝えたいと繰り返し述べているのも、あのルネサンス人の「体験」を重要視する態度ではなく、その裏に、本当の顔を見せることのできなかったマラーノたちの寓意的な表現を読みとらなければならぬ。対話におけるダ・オルタ博士の話相手ルアノ（ここでは固有名詞として使われるが、直訳では「行きずりの

人」の意味）は、じつは仮面をかぶった著者ダ・オルタ自身なのである。

フロイスが改宗ユダヤ人の出身であったかどうかについては、今のところ確証はないが、フロイスというポルトガルでは珍しい名前を持つ人物の何人かが、ブラジルの歴史家アルベルト・デニスによって改宗ユダヤ人の家系に属していることが明らかにされている。このことから、ルイス・フロイスもその家系の出身であることはほぼ間違いないと思われる。

フロイスの全作品についてとも言えるべきことは数多くあるが、ここでは最も重要なことに限定したい。彼の業績として最もよく知られている『日本史』は、歴史的な作品としてよりも文学的なテキスト、いや小説として読まれるべきものである。そういう観点から読むと、たとえば、ユダヤ人とマラーノの文学において重要なモチーフである「海」がいかに大きな役割を演じていたかが分かる。また、フロイスが一五年間にわたるインド滞在中ヨーロッパへ送った書簡も、マラーノに特有の曖昧な言葉で書かれている。

Ⅲ 三人の夜話

一五五四年三月一六日、深夜になって周りはようやく静かになった。マンドヴィーの川辺からささやくような波の音が聞こえてきた。そのとき、忍び寄る人種主義の足音が、三人の部屋まで届いて来るように思われた。

一五一〇年、ポルトガル人に侵略されたゴアではすぐに聖カタリナ礼拝堂が建設され、その後、世俗聖職者やフランシスコ会およびドミニコ会修道士の宣教活動が始まった。そのときすでに、宗教的不寛容主義の雰囲気が存在していたことは否定できない。しかし、ユダヤ人と改宗ユダヤ人にとってゴアは、四〇年代までは比較的安全なところであった。四〇年代に入った頃から、一五三〇年代に創立されたばかりのイエズス会の会士たちがゴアに到着すると同時に、ゴアにも反宗教改革的な空気が一際強く感じられるようになった。イエズス会は、創立後すぐにポルトガル王室によりポルトガルの植民地での活動を依頼されたため、海外へ派遣されたイエズス会士はたちまちポルトガルの植民地政策に巻き込まれ、場合によってはその代表者にもなったのである。反宗教改革や海外宣教活動で重要な役割を担わされた初期イエズス会から、「信仰プロパガンダ」のための代表的な人物、とりわけ聖人が出現すると、その立場は一層強くなった。同時にポルトガル王室の方も、その植民地過程を仮借なく推し進める中で、

(3) Luis Frois, *Historia de Japan*, Lisboa 1976-84; 『フロイス・日本史』、松田毅一、川崎桃太訳・注、中央公論、一九七八―一九八九年。



オールド・ゴアにある当時のさらし柱
(ペロリーニョ)

ますます宗教を利用していった。たとえば、

イエズス会の標語「神の栄光がいや増すように」の下では、植民地での搾取の隠蔽が一層容易になっていった。だから、一五五四年頃のリスボンやゴアでは、世俗政府の方も、ザビエル崇拜に多大の興味をそそられていた。あの三月一日、ゴアの副王た

ちは、ザビエルの死体をまるで聖人の死体のように町へ運び込もうと計画していたが、イエズス会の方がそれに反対していた。イエズス会士たちは、もっと長期的な視野に立ってザビエルを奉るほうが一層価値があり、より印象的であると思っていたのだろう。一六二四年ゴアで行われたザビエルの列聖式の祭りを考えれば、当時の彼らの打算がはっきりと読み取れるのである。

ポルトガル植民地政策の頂点と言われているこの時期に、ザビエルの死体が運び込まれてきてゴアでの宗教的熱狂が高まれば、三人の議論の結論はもはや一つしかない。まずイスラム教徒が脅威にさらされ、それからユダヤ人、とりわけ改宗ユダヤ人に対する不寛容主義が時を追ってきびしくなっ

てゆくだろう。

一五五七年二月四日にゴアのカトリナ礼拝堂が法王パウロ四世によって大司教座に指名された背景には、おそらくザビエルの死体の存在があったのだろう。この指名によってカトリック教会の権威はより強くなった。

三人の議論は次のような話題に移っていく。V・ダ・ガマがインドに到着したマヌエル一世時代（一四九五―一五二一年）のポルトガルでは、ユダヤ教徒の間でも王室においてもそれぞれにメシアニズムが発展したが、当時のカトリック側のメシアニズムには反ユダヤ主義が混在していた。ザビエルが「第二の聖トマス」として、つまりインドに渡りインドで宣教したというイエスの弟子トマスの跡継ぎとして崇拜されるようになれば、当時のポルトガル同様ゴアでもいわゆる純血思想が主張され、ユダヤの血を引く者に対する迫害が高まってくるように思われた。

まだ暗かったが、夜明けの風は少し強くなった。フロイスは急いで朝の礼拝の

ために帰らなければならなかった。しかし、話の結論が見えてきた今、彼ら三人は今日から、明日からどのように生きてゆけばよいのだろうか。話の口火を切ったのは、ダ・オルタだった。楽観的な性格のためか年齢のゆえか、あるいはまた旺盛な研究心のためか、ダ・オルタはヨーロッパには帰らないと言った。「私はこのインドで、ポルトガルでデ・ボチカと言われるあの医療用の麻薬を見つきたいし、その他の葉草やあらゆる果物、あらゆるスパイスについてもっと知りたいと思う。それらの名称も知りたいし、またそれらが見つかる国々についても知りたい。さらに、インドの医者がそれらをどのように使っているか、また医学的な価値のない色々な食物についても、この国の習慣や歴史についてももっと知りたいのです」。

ダ・オルタの決心は変わらない、とピントとフロイスは直観した。しかし、二人とも同じ道を進めないと思っていた。「私はインドに来て一八年になる」と、ピントが語り始めた。「今のところ一〇クルザドスにもならないけれども、自分の全財産をもって、私はモンテモル・オ・ヴェリヨに帰りたい」。二人の相手にその理由について聞かれたとき、ピントは再び話しをつづけた。

「今まではインドはポルトガルより安全だったが、異端裁判所は間もなくゴアにも創立されるだろう。アジアであれ東インドであれ、このポルトガルの世界はあまりにも狭く、ユダヤ人と改宗ユダヤ人の立場は難しくなるだろう」。

フロイスは黙っていた。そんな彼にヒントは意見を求めた。フロイスは、「私はこのところ噂になつてゐる日本へぜひ行きたい」と答えた。「数年前にザビエルと一緒にマラッカからゴアに来たあのヤジロウの話によると、日本にはユダヤ人は一人もいないようだ。それを考えても、また、ゴアから日本への距離を考えても、そこまでは異端裁判所の手は届かないであらう」。そして、声をひそめて、次のようにつけ加えた。「今まで聞いた話によると、日本人の生活習慣は、我々のそれと大いにかかはなれたもので、ひよつとするとそこでキリスト教やユダヤ教を越える何かが見つけれられるかもしれない」。フロイスの声はさらに小さくなつていった。

一五六三年、ダ・オルタの『インドの庶物本草』についての対話¹が出版された。彼は死ぬときまで異端裁判所の喚問を受けることはなかったが、死後二年経った一五八〇年に、ダ・オルタの死体が掘り出され、生前密かにユダヤ教の掟を守っていた廉で、火炙りの刑「アウトダフエ」に処された。ちなみに、その時彼の家族も迫害を受けたという。

ピントは結局すぐにはポルトガルに帰らなかった。彼はゴアのポルトガル副王やゴアで活躍するポルトガルの商人たちの依頼で再び日本へ行った。そして、一五五四年の四月にイエズス会に入った。一年後脱会したが、入会の理由を想像して見ると、ピントはイエズス会のなかにこそ自分の本当の隠れ場所があると思ったのだろう。一五五七年頃ポルトガルに帰国し、家庭もつく

った彼が、晩年に書いた小説は、一五八三年に死ぬ時とある修道院に預けられた。その作品は一六一四年になってようやく出版された。

一方 一五五四年五月にピントと同じ船に乗って日本へ出発したフロイスは、一年間マラッカに滞在し、それから再びゴアに戻った。ゴアから日本にやって来た一五六三年から一五九七年の死にいたるまで、彼は日本で宣教師としてよりもむしろ執筆者として活躍した。晩年の二年間マカオに行かされた時、彼は「地の果てに帰りたい」とある書簡に書いたが、その「地の果て」とは彼にとっては日本だったのであった。



コーチン市エルナクラム地区のカダヴムバガム・シナゴーグの前にて
(左より小岸氏、セナン氏、筆者及び徳永氏)

ドッグウツドの並木道
戸部 博（京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究

四月初旬、京大構内のあちこちに植えられたハナミズキが白や紅色に咲き始める。花びらに見えるものが白や紅色に着色したものと葉であったものが白や紅色に着色したものである。実際には小さな花が二〇〜三〇個集合し、それらを総苞片が取り囲んでいる。白いのは別名アメリカヤマボウシといい、紅色のはベニバナハナミズキという。英名ドッグウッド (dogwood) といい、樹皮の煮汁でイヌの皮膚病が治るという。米国では良く知られた植物で、かつて東京市が贈ったサクラの苗木の返礼としてアメリカから送られたものが、身近な植物となっている。

このドッグウッド、東大路を挟んだ人間・環境学研究科の対岸にある医学部構内の並木が最も美しい。四月半ば午前一一時過ぎ、偶然そこを通り抜けることがあった。春の明るい日差しのおかげ、人けの少ない構内を南北に走る路の両側に、白や紅色はまぶしいほど明るく輝いて見えた。用事を済ませて我が人間・環境学研究科、総合人間学部の構内に回ると、そこに見たものはいつもの光景。あふれんばかりの学生と自転車、バイク、おまけに自動車も入ってくる。見慣れた光景とはいえ、今見てきたものとの違いに胸が突かれた。人間・環境学研究科と総合人間学部の学生およそ千名、全学からの学生二学年分約六、七千名、この数が狭いキャンパスの中をまるでアリのようにな、あっちいってごっつん、こっちいってごっつん、している。

そして五月、学生はだいぶ少なくなつた。なにがあつたのか、いってもしやうがないと、大学や授業に絶望したのか、授業よりも楽しいものを見つけたのか。梅雨を前にして、ハナミズキはたくさん小さな実を結びはじめている。

(4) 松田毅一、E・ヨリツ
セン、『フロイスの日本覚書』
中公新書、一九八三年、六六
頁を参照。

マッタンチェリーの対話

アルメイダ vs. ザビエル

小岸 昭 AKIRA KOGISHI



小岸 昭（こぎし あきら）
一九三七年、北海道生まれ。京都大学大学院文学研究科修了。京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科教授。一九九〇年より、主にスペイン系ユダヤ人「セファルディ」の離散の歴史について研究している。主な著作に、『スペインを追われたユダヤ人』（筑摩書房、一九九六年）、「離散するユダヤ人」（『岩波新書』、一九九七年）など。

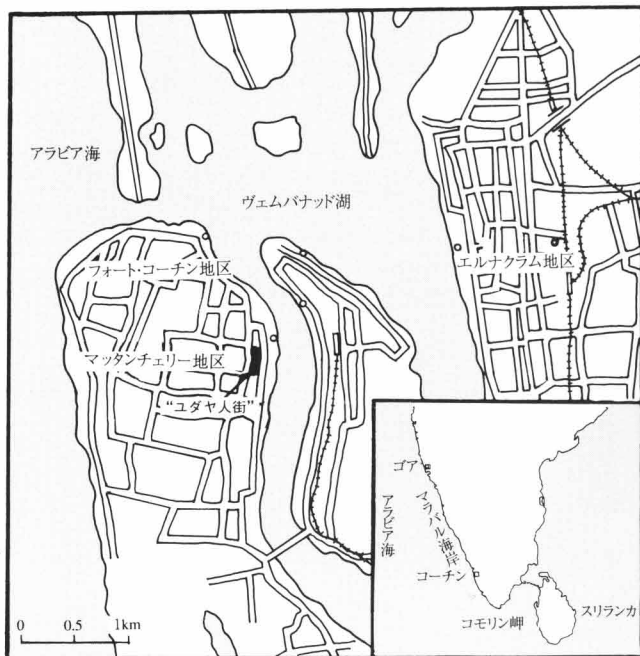
が何隻も停泊している。

一五四九年二月二日の午後遅く、ひとりの若いポルトガル人が、インド南西ケララ州の港町コーチンの砂州内側の棧橋に着いた。原色のサリーや白い腰巻「ドーティ」を身につけたドラヴィダ系の住民が二〇人ほど賑やかに談笑しながら船を降り、マッタンチェリー棧橋から町中へ吸い込まれて行った。だが、ブロンドの蓬髪を風になびかせた青い目の青年ルイス・デ・アルメイダは、ひとり棧橋横のわずかな砂泥地へ降りて行った。よく見れば、甲幅三センチほどのシオマネキがそこらじゅうで、片方だけ異常に大きい挟み脚をさかんに振り上げたり下ろしたりしている。前方には、土地の人々が親しみをこめてヴェムバナッドと呼ぶ青緑色の汽水湖がさざなみを立て、いたるところに布袋葵の群棲を浮かべている。

新しい乗客を乗せた連絡船がゆっくり棧橋を離れ、再び本土側のエルナクラム地区へ向かうとしていた。その上に飛び交うカモメの群れを見ながら、この湖の向こうにはアラビア海が広がっているのだと考えただけで、アルメイダの思いは遙かな故郷リスボンに飛んでいる。そこでは迷路さながらのアルファマ地区を降りると、もうテージョ川の船着き場である。水の中には魚が蟄集し、カモメが飛び交い、大きな帆船

自由への脱出を求めて、あるいはどこかにきつとあるに違いない幸せの島を捜し求めて、テージョ川からやがて大西洋の大海原へと船出したのは、一五四八年三月一七日のことだった。同日出航したサン・ペドロ号には、ガゴ神父が、またガジェガ号にはアントニオ・ゴメス神父と、弱冠一六歳でイエズス会に入会したばかりのルイス・フロイスが乗っていた。もうあの祖国に戻ることはできないが、それではこのアジアのどこに安住の地を見つければよいのだろうか、という思いにまた心を乱されながらアルメイダは、シオマネキたちの砂泥地を後にした。

マッタンチェリーの棧橋に入り口を向けて、小さなユダヤ人街があった。戸口に取付けられた魔除けのメドゥーサや扉を飾るダヴィデの星で、それと分かる。一五世紀末にスペインおよびポルトガルから追放されたユダヤ人が、紀元七〇年ローマ軍により第二神殿が破壊された後、国を追われ、インド南岸に辿り着いたユダヤ人とともに、ここに共同体をつくっているのである。そこへ一歩足を踏み入れると、強烈な香辛料の匂いが迫ってくる。それが黒胡椒やウコン、あるいは生姜などが混じり合った匂い



コーチン市（インド・ケララ州）

であることが、彼にはすぐ分かった。この頃すでに、行き交う土地のインド人も、目の青い異邦の青年を特別好奇の目で見ることはなかった。

アルメイダは、イエズス会士の宿舎になつているコーチンの司教代理ペドロ・ゴンサルヴェスの家を訪ねようとしていた。つい昨日、前の年の暮れからそこに滞在しているフランススコ・ザビエルと会う約束ができたのだった。まもなく日本に発つこの男が自分の将来に決定的な影響を与えるだ



コモリン岬で夜明けを待つ少女たち（撮影は筆者。以下同じ）

ろうということ、彼から何か大きな力を授けられるかもしれないということを、アルメイダは直観的に感じていた。道々彼は、貿易商人としてゴア以南からインド亜大陸最南端のコモリン岬まで約千キロにおよぶ、この世界最大の香辛料産地マラバル海岸を走破した今回の旅のことを考えていた。自分にはリスボンに帰ることのできない事情があるのだから、このインドからさらに大きな利点を求めてマラッカへ、いや南中国のランパカオや、場合によっては日本まで行動半径を伸ばすしかないのではないかとアルメイダは思った。それでは今頼れるのは、結局金以外にはない。しかし今後とも一番恐ろしいのは、異端審問所の回し者がいつどこでこの自分の胸の奥まで見通す目を光らせているかもしれないということである。実際ゴアでは、マラーノの医師ジェ

ロニモ・ディアスが六年前ユダヤ教を信じていた廉で火炙りの刑に処せられているのだから。

そう思っただけでアルメイダは、腋の下に汗がじっとり吹き出してくるのを感じた。やはり人間は、信仰の力というものが必要なのか。己の祖先の宗教が許されない以上は、カトリックの、いやもっと過激な宗派の信仰が必要なのか。もうゴンサルヴェスの家の前だった。ポルトガル風の黄色い壁の横には、アラビア海から吹き寄せる風に、二本のココ椰子の木が巨鳥の翼のような葉を揺らしていた。アルメイダが家の扉を叩いた時、晩課の鐘の音がフォート・コーチン地区の聖フランシス教会から鳴りひびいてきた。アルメイダを直接招き入れてくれたのは、当主の司教代理自身であった。「パードレ・ザビエルがお待ちです」と言っ

て彼は、アルメイダを右手の部屋に通した。黒い僧服に身を包み、首から大きな十字架を下げた小柄な男が、窓を背にして立ち上がった。「はじめてお目にかかります。あなたが日本へ行かれると聞きましたので、失礼も顧みずにおうかがいしました」と言いながら深々とお辞儀をしたアルメイダに、ザビエルは椅子にかけるよう促した。「私はインドに来る二年前の一五四六年三月三〇日付で、ポルトガル国王ジョアン三世より、その全領土における外科医師の免許状を下付されました。昨年九月下旬イエズス会士数人とともにインドに着きました。その後ゴア王立病院で医療の勉強をさせてもらったりしておりましたが、将来は貿易商

として一本立ちしようと、今こうして香辛料買い付けの商談をまとめる旅をしております。一昨日、コモリン岬から当地に着いたばかりです」。

「ああ、あなたは御商売で……」と言ってザビエルは、窓際の椅子を少しだけアルメイダの方に引き寄せて座った。腰の数珠玉がかしゃかしゃと音を立てた。「私がポルトガルを出発しインドへ来てからもう七年の歳月が経ってしまいました。国王が熱望されるエスタード・ダ・インディアの宣教は、同時に靈魂の救済だけを求めるという途方もない苦行の連続でした。実際コモリン岬では、貧しい人々を地獄から救い出してやることだけで精一杯でした。真珠採集民の新生児たちは、洗礼を授けないうちに、たくさん死んでゆくのですよ。真珠採集民はポルトガル領海の収穫をねらういわば盗人のようなものですから、その子供たちに洗礼を施して助けるというのは並大抵のことではなかったのです」。

この闘う教会の精鋭は、それまで軍事力を後ろ盾にしてこなかったインドの布教活動に、すっかり疲れはてているように見えた。「私にとつて」と、ザビエルは一段と低い声で言った。「生きているのは苦痛であり、神の教えと信仰を証すために死ぬほうがましであると思うこともしばしばでした。こんなにひどい神への侮辱を見ながら、それを矯め直すことができないのですから。このように私は絶望と背中合わせにインドで四苦八苦してきたので、あなたのお役に立てるかどうか」。

この時アルメイダは、あえて自分の訪問

の目的を忘れようとした。そして、この際徹底的に闘う教会の尖兵の本音を訊き出すと身を構えた。「パードレ・ザビエル、あなたのおっしゃる『こんなひどい神への侮辱』とは、どのようなことなのでしょうか」。アルメイダは、自分の心が次第に冷静になってゆくのが不思議だった。

「それは、未信者たちと絶えず商取引をしているため信仰が薄く、救い主であるキリストへの信仰よりも、しばしば物質的な利益のみを念頭に置いている悪いポルトガル人の神をも恐れぬ所業です」。

「しかし」とアルメイダは、この聖なるインドの使徒に逆らうように言った。「悪いポルトガル人をどのように特定できるのでしょうか、さまざまな宗教や人種が混在する、たとえばゴアなどで」。

「ゴアはインドではありません。一五〇年以來、ポルトガルの領土なのです。だからゴアでも、宗主国同様、神に叛いた悪い人間は裁判にかけなくてはならないのです。私はジョアン三世に、異端審問所を設置するように進言しました。インドを救うには、これしかない。ゴアには、モーセの掟にしたがって生活するユダヤ人が神への恐れや世間への恥じらいなしに平然と暮らしているからです」。

射すくめるようなザビエルの目は、自分が新キリスト教徒の、したがってカトリックに改宗したユダヤ人「マラーノ」の出身であることを、すでに見破っているようだった。ゴアが自分にとって「幸せの島」でなくなるのは、そう遠いことではないだろう。それならば、自分は何処へ行けばよい



ケララ州立大学の女子学生たち（ドリヴァンドラムにて）

のだろうか、このコーチンか、それとも「黄金の国」ジバングか。「パードレ・ザビエル、あなたはまもなく日本へ行かれるとお聞きました」と、アルメイダは言った。

「これからゴアに行き、来る四月に日本へ渡航する予定です。この決心をしたのは、一昨年一二月マラッカで会った日本人アンジロウに魅せられたからです。彼は日本の南端、鹿児島で人を殺し、受洗することにより罪の赦しを得たいと、マラッカに來た男です」。

「あのアンジロウに？ あの男には驚かされました。去年一月からゴアの聖信学院で学びはじめたというのに、もうローマの口ヨラ宛に手紙を書くほど、ポルトガル語が上達しているのですから」。

「本当にすごい男だ、アンジロウは。あ

る日彼が上から下へ、また右から左へ字を書いているのを見て、私はその理由を尋ねました。すると彼は、『神父さんたちは何故我々のような書き方をしないのですか。人間の頭が上に、足が下についているから上から下へ書くのが自然ではありませんか』と言うのです。自分の考えをしっかりと持っている。だから日本人は、何事にも知識欲旺盛なのでしょう。それに比べれば、インドは駄目です。インド人は未開無知です。イスラム教徒もユダヤ人もいない日本で、イエズス会士が霊的な成果を挙げれば、理性的な彼らはきつと自力でキリスト教を信じ続けるでしょう。私は内心の喜びをもって、そういう日本へ行く決心をしたのです」。

会見の最後、アンジロウの話によんで、ザビエルにもアルメイダの心の内にも、ほ

のかかな希望の光が射し込んでくるようであった。イエズス会士の宿舎を辞去したアルメイダは、ケララ通りを東に向かって歩きはじめた。しばらくすると、何か強い音が響が聞こえてきたが、明らかにそれは海であった。マラバル海岸沖のサンゴ礁の小島群を抱きかかえるようにして広がるアラビア海である。夕日に赤く染まった海に身をかがめて、背の高いココ椰子の木が影絵のように立っていた。その木々を見上げながら、海岸の砂浜に座ったアルメイダは、ザビエルが異端審問所を永劫の墮落から人間の魂を救う唯一の方法だと



ケララ州のココ椰子の林



かつて異端審問所があったス・カセドラル（オールド・ゴア）前の広場

考えている以上、インドに残酷な異端審問所が出来ることは間違いない、と思った。ザビエルが言うように、日本にユダヤ人がいないとすれば、中世的暗黒をかかえたポルトガルの近代専制主義も、そこまで手を伸ばしてくることはないだろう。先祖の宗教に戻るという「大罪」を犯さずに生き続けるためには、日本へ行くしかない。東アジア諸国で稼いだ金と、医師としての技術をもって、いつかは日本へ行く。いつか？ そうだ、五年後の三〇歳になったら、と我と我が身に言いきかせて、アルメイダはゆっくり立ち上がった。

一五八二年五月一日、日本の夜空に長い尾を引く彗星が現れ、それがやがて起こる悪い事の予兆であるかのように、一か月後、織田信長は四九歳で明智光秀に破れた。

その頃、アルメイダは河内浦にあって、癌の末期にあった天草領主ドン・ミゲル鎮尚の看病を続けていた。夜更けひとりになった時など、彼はマッタンチェリーで、フランシスコ・ザビエルと会った時のことを度々思い出した。あの時彼が予感したとおり、一五六〇年ゴアに異端審問所が正式に設置された。一五七一年その異端審問官に任命されたバルトロメウ・フォンセカが狂信的とも言える異端者摘発に乗り出し、「ゴアを火で満たし、背教者の灰でいっぱいにしてやった」と豪語しているという話を、彼は伝え聞いていた。ユダヤ人に対して世界で最も厳しい異端審問と火炙りの刑が、ゴアで今まさに行われているのだ。そう思っただけでアルメイダは、自分の選択が決して間違っていないことを、神に感謝せずにはおられなかった。そして、今まで大罪を犯さずに生きてこられた幸せを思った。鎮尚が昇天し、その記念聖堂を建ててからまもなく一五八三年一〇月末、もしくは一月初旬に、医師にしてイエズス会宣教師ルイス・デ・アルメイダは、天草河内浦の山の麓、藁葺きの貧しい住院で五八歳の生涯を閉じた。それは、ユダヤ人追放政策を敷く祖国ポルトガルから最も遠い離散地におけるひとりのマラーノの死であった。

アルメイダと同じ日にリスボンを発ち、その後日本で共に布教活動に身を挺したルイス・フロイスは、この永年の友人につきのような追悼文を捧げている。

「豊後（現在の太分）において、我らの修道院の傍らに病院を作ったのは、じつに

アルメイダ師であった。そこには、貧困のために、生まれ落ちると殺してしまうのが最も良い方法だと見なしていた異教徒たちの捨て子が収容された。彼は修道士でありながら、手ずから、あらゆる腫瘍や腐った瘻病、その他あらゆる病気を治療した」。

付記。本稿は三回の現地調査（一九九五年八月および一二月、九六年一二月）と、左記の文献に基づき、日欧文化交流史の中できわめて重要な位置を占める二人の人物、ルイス・デ・アルメイダ（一五二五―一八三一年）とフランシスコ・ザビエル（一五〇六―一五五二年）の生き方を、「マッタンチェリーの対話」という形でまとめたものである。なお、右の対話の日付を一五四九年二月二日としたのは、両者が出会ったいくつかの可能性のうちから設定したものである。

主要参考文献

バチエゴ・デイエゴ『光を燈す医師ルイス・デ・アルメイダ』、長崎二十六聖人記念館、藤木博英訳、一九六四年。
東野利夫『南蛮医アルメイダ』、柏書房、一九九三年。
『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』、河野純徳訳、平凡社、一九九四年。



コーチンのシナゴーク

世界文学・演劇としての能

フェノロサ再来日百周年

村形明子

AKIKO MURAKATA

表記の特集テーマで寄稿を依頼された時、ちょうどこの主旨に沿った国際セミナーを企画準備中だったので、その報告を兼ねてでなければ、ということでお引き受けした。能（謡曲）は日本ではもっぱら芸能とみなされてきた。演劇としての能は国際的にもさまざまに論じられ、演じられて久しい。これを文学として読む伝統は、むしろ西洋から起こったといえる（たとえば、ドナルド・キーン氏はコロンビア大学の学生とともに世阿弥の「松風」を読む度に感激し、完璧な文学作品と絶賛しておられた）。

国際セミナーへの始動

旧知の日本文学・比較文学研究の大家、アール・マイナー教授が国際日本文化研究センター主催のシンポジウム「語り物……東と西」のためこの春来日される予定は、昨十一月駆け足のプリンストン大学訪問の際伺っていた。昨年度授業でテキストに用いたペンギン古典文庫 *Japanese No Dramas* (1992) の編訳者、オーストラリア国立大学ロイヤル・タイラー教授の来日が可能になれば、この機会に能に関する国際セミナーが開催できるのではないかと、希望が持たれた。幸運にも、そのタイラー

教授が『源氏物語』英訳のため今年一月から一年間日文研客員教授として入洛されていることがわかり、お二人のご快諾を得て三月一九日研究者・学生向けの表記研究会開催の見込みができた。

博士論文「英文学と能」で東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程学位取得後、同研究室助手を経て日本大学専任講師となられた韓国の成恵卿さんに加え、新たな視点から東西交流を論じ得る見通しもたつた。成さんによれば、英文学と能に関する先学の研究を参照するうち、重要論文の多くが京大関係者のものであることを知った。その光栄ある学統の基盤ともなるアイルランドの詩人・劇作家 W・B・イェイツ研究により、ダブリンのトリニティ・カレッジから名誉学位を受けられた大浦幸男、一九九〇年国際アングロ・アイリッシュ文学協会年次大会を京都に誘致された佐野哲郎、さらにシェイクスピア研究の第一人者と謳われながら、日本古典芸能の造詣も深い菅泰男の三名が教授も参画してくださることになった。

フェノロサ再来日と京都

筆者の能との関わりは、長年つき合っ

村形明子（むらかた あきこ）
札幌市生まれ。京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科教授。近・現代の芸術・文化交流史、比較文学などを研究中。編著『ハーヴァード大学ホイトン・ライブラリー蔵 E・F・フェノロサ資料』——Ⅲ（ミエジウム出版、共訳・共著『ボワイトヘッド著作集（科学哲学論集）』上・下）——Ⅳ、Ⅴ（松籟社、『豊穣の風上』現代アイルランド文学の群像（山口書店、『アメリカ文化の原点と伝統（彩流社）、*Centennial Essays on Lafcadio Hearn*（八雲会）等。



フェノロサ夫妻（1900年）

きたアーネスト・F・フェノロサ遺稿である。もっぱら美術史家、日本近代美術教育・文化財行政の確立に貢献した美術専門家として知られるフェノロサ（一八五三—一九〇八）であるが、東京大学雇外国人教師として来日中の明治一六年（一八八三）梅若実から数回謡の稽古を受けたことがある。二三年（一八九〇）ボストン美術館日本部主事として帰国後、二九年（一九〇六）新夫人メアリーを伴い再来日して、京都二条大橋西詰め、鴨川から庭に遣り水を引いた瀟洒な仮寓（現ホテルフジタ辺り）で夏から秋を過ごした。その北隣りに隠居住いしていた国際的美術商若井兼三郎が、ときどき話をうなるのが聞こえたらしい。九月かつての教え子で美術教育・文化財行政の

（一）司馬遼太郎・ドナルド・キーン『世界の中の日本』（中公文庫、一九九二）、二〇五、七頁。Royall Tyler, *Japanese No Dramas* (Penguin Classics, 1992), p.2.

同僚、岡倉天心来訪、和漢の文学等を談じるうち、能の英訳が豊かな新分野を拓くことを示唆する。

日本の詩人、学者、芸術家たちと交わり、古代の歴史・文学を学ぶため、永住の可能性をフェノロサから打診された岡倉は、次のように語る。「喜んで先生の協力を求める新博物館が奈良・京都に開館、もつと近い所で、既に建設された大きな煉瓦造りの京都大学は比較哲学の教授を求めており、先生がその座につくことも可能でしょう」。

すっかり乗り気になったフェノロサは、将来建てる家の設計図を描いたり、その敷地探しに人力車を駆って、清潔な家並みに石切る音の響す「理想郷」白川村ヘドライブしたりしながら、京都最後の日々を過ごす。

古社寺宝物取調等でフェノロサと旧知の仲だった帝国博物館総長九鬼隆一は、早くから京都大学創設の推進者であり、初代総長候補の一人であったから、岡倉の樂觀的発言もあながち的外れではなかったのかもしれない。その後フェノロサは奈良正倉院拝観許可の依頼を兼ねて入洛中の九鬼にも会っているが、香しい成果は得られない。事実、帝国奈良博物館は前年四月、同京都博物館も翌五月開館、京都帝国大学創立も翌三〇年（一八九七）六月で、この期のフェノロサ再来、二ヶ月の京都滞在は偶然の一致にしてはあまりに符節が合いすぎる気もある。

日本復帰の夢破れ、一九〇八年ロンドンで客死したフェノロサの遺骨が、生前の遺言により仏教の師、桜井敬徳阿闍梨ゆかりの大津三井寺法明院墓域に移送、埋葬され

ていることは周知の事実である。翌明治四二年墓碑の完成を待つて営まれた一周忌法要の京都関係発起人に、第十代府知事大森鍾一、府会議長・衆議院議員田中源太郎、初代市長内貫甚三郎、市会議長・衆議院議員・日出新聞社長雨森菊太郎らとともに中沢岩太理工科大学（京大の前身）初代学長・京都高等工芸学校（工芸繊維大学前身）初代校長、東京帝国大学総長・文相を歴任、前年京都帝国大学総長に就任した菊池大麓がいたことは、フェノロサの本学との隠れた縁を暗示するのかもしれない。

フェノロサの能楽研究

さて、明治三〇年（一八九七）フェノロサが東京へ戻り、翌秋高等師範英文科に教職を得てから、メアリー夫人とともに梅若月次能の常連となる一方、実の次男竹世（後六郎）に話を習い、能楽研究にのめり込んだことは、美術上の華々しい業績ほどには知られていない。下調べ用に能のテキストを口語訳、観能に同行するなど介添え役を果たした高師の同僚、禿木平田喜一の回想によれば、「月一回の梅若の能へも、特に舞台正面前へ席を取って欠かさず出かけたが、多くの観客のうちに、あれほど真剣な態度で自分の技を見られる者はないと、実翁も云っていた。『錦木』に非常な興味をもち、……ことなくロゼッティの面影があると云って喜んでた。謡曲の掛け言葉にも興味をもち、メーテルリンクはそれを思想の上でやっている」と云われたが、あとで『ペレアスとメリサンド』など

を味読して、その卓見に感服した⁵。フェノロサがすでに比較文学的視点から能のテキストに接していたことが分かる。

「米国の知識社会は今、絵画のように目に訴えるものばかりでなく、心に訴える東洋文学に目覚めるようになって来た。今度はこの方面を開拓するつもりである」というのが、再来日期の彼の新たな抱負であり、能だけでなく天心、平井金三、有賀長雄、森槐南らの協力を得て詩を主とする中国文学の研究も意欲的に進めていた。没後刊行されたエズラ・パウンド編 *Cathay* (1915)、*Noh or Accomplishment* (1916)、イエイツの序文を掲げた *Certain Noble Plays of Japan* (1916)、*The Chinese Written Character as a Medium for Poetry* (1936) は、今日イエール大学バイネッケ図書館に遺る膨大な中国・日本文学ノートの氷山の一角にすぎない。

さらに近年、未亡人メアリーから詩人パウンドに送られた遺稿の一部と思しき能楽研究ノートがプリンストン大学図書館に入り、筆者がこれを解説・翻刻することになった⁶、今回の企画につながった。

(2) 再来日期については、村形編訳「フェノロサ夫人の日本日記」（『京都新聞』、一九八一年十一月三日・八二年六月二十四日）参照。
(3) 宮本盛太郎「京都大学の百年（第2回）——京大の創立と『日出新聞』」、『京大広報』四七三三（一九九四年一月五日）、八四七・八頁。
(4) 「勲三等フェノロサ博士追悼法会々記」
(5) 「フェノロサ先生」『平田禿木選集』第四卷（南雲堂、昭和六一年）四六六頁。
(6) Akiko Murakata, "The Ernest F. Fenollosa Manuscripts on Nô at the Princeton University Library", 『英文学評論』第六十九集、三八・九六頁。



「松葉古今色」——東西交流と茶の心——

一八世紀学会・ミルトン学会・国際比較文学会各会長を兼任、長年の日本古典文学研究の業績に対し山片蟠桃賞、小泉八雲賞、勲三等瑞宝章等を受けられたマイナー教授が東西文明交流の大功労者であることはいうまでもない。三七年前、フルブライト交換教授として来日された時の京大・阪大の教え子たちが相次ぎ定年を迎えていることに、感慨を新たにしておられた。タイラー教授は外交官の父とイギリス人の母の間にロンドンで生まれ、小・中学校はアメリカ、高校はフランス、ハーヴァード大学でエリセーエフとライシャワー、コロンビア大学でドナルド・キーン教授の下に日本文学を

学び、ウイスコンシン大学、オスロ大学東洋研究所等を経てオーストラリア国立大学日本研究所長に就任された世界人。

長年にわたる能の翻訳・研究のご体験を淡々と語ってくださった上、「松風」の音楽性に注目し、この曲を『源氏物語』の変容と見る新解釈を提起された。

“The best host, but the worst correspondent”と定評のある菅先生は、今回とくに奥様のご協力を得て休憩時間に盆点ぼんてんの茶席ちあしを設けることにより、遠来の賓客を能の姉妹芸術でもてなす名ホストぶりを発揮してくださった。タイラー教授の講演の主題「松風」にちなみ、ご所蔵の官休庵書軸「松葉古今色」をはじめ茶道具一式ご持参いただいたご厚意に、一同感激一入であった。幸い、五三五号室は露地に見立て得るちよつとし



俄か茶室（五三五号室）の菅先生夫妻



司会の佐野教授とマイナー教授



休憩時間のタイラー教授と院生

た前室があり、こじんまりした茶室の趣がない訳ではなく、備え付けのスクリーンの筒を縦に立てると、貴重な掛軸の支えができた。

この風流の発端は、桃の節句に菅先生から「一期一会と茶の心」なる講話を伺ったことにある。P・ミルワード神父の新刊書『お茶の巡礼』（日本茶道のルーツはカトリックのミサ）という「発見」を武者小路千家一行とともにローマ、アッシジ等でのお茶会で検証したヨーロッパ紀行が話題に上り、濃茶の所作と「聖体拝領」、佗び・さびの精神とキリスト教の清貧の理想など共通性にふれる中、当時南蛮舶来の最先端を取り入れたモダン・アート——純日本の産物というより、東西文明交流の結晶——としての茶道、という側面が浮き彫りになってきたのである。十数年前、金剛家一行とともにローマで能公演を催し、教皇にも謁見された文化大使としての菅先生は、ご

自身の経験も重ね合わされたい。

菅先生の含蓄豊かな日本芸能論は、能とシェイクスピア劇との比較から説き起こされた心に沁みる東西演劇比較論でもあった。宝生流の名人野口兼資が鏡の間でアイ狂言の口上を聞き、「あ、この能はそういう話だったのか」と述懐されたエピソード、日本芸能史研究会発足に際し、「芸能」の英訳を吉川幸次郎氏の助言を得て Performing Arts としたのがニューヨークの Lincoln Center for Performing Arts より早かったこと、西洋の演劇概念がそのように広がってきたことが能が世界演劇として認められるようになった背景にあること等々、まだまだ続けて伺いたかった。

新作能の新しい流れ

さて、休憩も返上してヴィデオ等の準備に当たられた成さんは、脳死・心臓移植、朝鮮人の強制連行をそれぞれテーマとする「無明の井」（一九九一）、「望魂歌」（一九九三）を正面から取り上げることにより、能の現代性に私たちを目覚めさせてくれた。作者はいずれも、免疫学の権威で上演当時東京大学医学部教授、多田富雄博士である。観世流の人間国宝、橋岡久馬師と一体となつて、韓国の寒村にひっそりと生き延びる夫を奪われた老女の痛みの表現に、一種の使命感を持って取り組まれた大胆な実験の成果に感銘を受けた。能が現代の切実な問題を鮮烈に問いかけるための優れたメディアであることを再確認しつつ、「恨」（内部に沈殿したわだかまり）の表現に「内

向的に深化された抑圧の表現」を洗練させてきた能の形式がふさわしい、という隣国の新進気鋭の講師の指摘は胸を衝くものがあった。しかし私たちがパンソリを知らないように、韓国人も能についてほとんど知らないという。広域の東西交流もさることながら、歴史的により深い絆に結ばれたアジア近隣諸国との地道な交流こそ、今後不可欠の課題ではないだろうか。

能と環境

昭和四二年（一九六七）四月三〇日、パウンド夫人の依頼で、駐日英国文化参事官 E・W・F・トムリン氏が京都英国文化センター館長 J・P・マーティン氏を通じてフェノロサ六〇回忌墓前祭を企画、北岸佑吉氏の斡旋で金剛宗家巖氏が仕舞「杜若」を手向けられたことがある。その月、日本の能がロンドンで初演された報告も兼ねていた、という。この時の法要について、『欧米人の能楽研究』の著者古川久氏は次のように書かれた。「これは英人より先にわれわれが率先して行うべきであった。なぜそれができなかったか。…美術にも能楽にも共通して支えとなっている自然すらわれわれは破壊しつつあり忘却しつつあるからである」。

八年前の来日中、タイラー教授は親友である雲ヶ畑志明院の田中真澄住職に協力して鴨川上流ダム建設反対運動を支援された。高速道路の混交する工場地帯の只中の「江口」ゆかりの寺、埋め立て工業団地の一隅に色褪せる「静御前別れの舞」の標識、高



多田富雄作「望魂歌」
（撮影 シテ 橋岡久馬 森田拾史郎氏）

速道路と新幹線の騒音に挟まれた「斑女」観音堂、造成開発の波に押され、天然の海から遠ざけられた「高砂」の松―そして梅若塚を護り、明治の廃仏毀釈の嵐に堪えた「隅田川」畔の木母寺が今大戦「東京大空襲」後「再び再建されねばならなかった」ことは、自ら英訳した能二四曲ゆかりの地を訪ねた同氏の心眼にどう映ったことか。伝統を現代に生かしつつ継承する必要性を再認識する契機ともなった国際セミナー開催を可能にし、ご協力下さった学内外のよき師友、そして学部・研究科双方の関係者に御礼申し上げる。



成恵卿講師

（7）「ウォーナーと大津（フエノロサ・岡倉・ウォーナー）」「湖国と文化」二二号（一九八二年秋）、三八頁。

仮面を生きる人びと

佐々木重洋

SHIGEHIRO SASAKI

突然の叫び声

「ウォーッ！、ウォーッ！……」

突然、ひとりの男が叫び出す。あたりはまだ薄暗い。それもそのはず、まだ午前五時を少しまわったばかりである。私は大急ぎで飛び起き、ベッドから立ち上がる。用意しておいたヴィデオとカメラをつかみ、フィールドノートをポケットにねじ込むと、その男を追う。男は何かに導かれるように一直線に村の集会所へ向かっている。集会所の中に安置された仮面がこの男を「呼んでいるのである。仮面を用いた託宣パフォーマンスがこれから始まるのだ。

「呪葉の神」による託宣パフォーマンス

大急ぎで集会所に駆けつけると、すでに多くの人だかりができていた。まだ薄暗い空に、スリット・ドラムの音が響きわたる。これはいわゆる太鼓通信であり、託宣パフォーマンスの始まりを告げている。

今朝、託宣パフォーマンスをおこなうのは、現地語で「呪葉の神」と名づけられた仮面である。アフリカでは、不幸や病気が人為的にもたらされるといふ考え方があり、いわゆる妖術・邪術信仰である。呪葉は、このような妖術・邪術がもたらす不幸や病

気から身を守るものと考えられている。

仮面を管轄している結社の成員たちが、太鼓やガラガラ、金属製の打楽器を手にして集会所の前に陣取り、リズム良く演奏を開始する。結社の成員たちが歌を歌い始めると、観衆も一緒になってこれに唱和する。歌と演奏が始まるのを待っていたかのように、仮面がさつと前に走り出す。その後、仮面の従者たちが追う。彼らは五〜七人で構成され、連携して妖術や邪術を無効にする任務を担っている。彼らは、仮面が語る託宣内容にしたがって、たとえば「妖術師がいる場所」に向かって銃を発砲したり、邪術師が仕掛けた「悪の呪葉」を村のあちこちから発見・除去してみせたりするのである。

この日、彼らはいくつかの「悪の呪葉」を鮮やかな手並みで発見・除去し、数人の村人の悪だくみを暴いてみせ、その償いとしてそれぞれヤシ酒や家畜を支払うよう命じた。

仮面をフィールドワークする

ここは西アフリカ、カメルーンの南西部に位置する村である。隣国ナイジェリアまでわずか一五キロ足らず、不法侵入しているナイジェリア人と遭遇するのは日常茶飯事だし、場所によってはナイジェリアの通貨し



仮面に呼ばれた男（中央、上半身裸の人物）

か通用しない「カメルーンの村」とさえある。

私は一九九三年以来、この村に住み込み、とくに仮面に焦点を当てながら人類学的調査を続けている。仮面そのものに対する興味もさることながら、それを用いる人びとの生活やさまざまな価値観、認識や観念に関心があり、仮面文化の研究を通してそれらに接近しようと考えているのである。

ところで、アフリカなどで仮面の調査をする場合、必ずといっていいほど調査者を悩ませるのが、いわゆる「秘密」の問題であらう。

佐々木重洋（ささき しげひろ）
一九六六年、大阪市生まれ。一九九七年三月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。富山大学文学部助教授。専攻分野は文化人類学・民族芸術学。

仮面を生きる人びと

たとえば、託宣をおこなう「超自然的力」は仮面そのものに宿るといわれる。仮面が人間を召し抱えて、自らの言葉を伝えさせるのである。今朝、男が突然叫びだしたのは、仮面に呼ばれたためというわけだ。仮面がいつ男を呼ぶのか、それはこの仮面結社の成員ですらわからない。彼らはみな、口々にそのことを力説した。我々は仮面がいうところに従うだけだと。私は当初、それは嘘だと思った。人類学者が、この種の秘密をめぐる隠蔽に直面するケースをたびたび耳にしていた。みなが共犯的に演技をしているのだと思った。

ところが、フィールドにも慣れ、この仮面結社に加入が認められた後でも、この「Xデー」の謎は依然としてわからないままだった。男はつねに、まったくもって突然叫び出すのである。くわえて、そのときの他の成員たちの慌てた対応ぶりを見てみると、彼らのほうも「Xデー」の日時を前もって知っているようにはみえないのであった。彼らが私に対して嘘をついているとは思えなくなってきたのである。私は混乱した。いったい、どこまでが演技なのか？ 謎は思わぬところから解けた。私の下宿先の家族のひとりが結社に加入し、しかも仮面に応答する男に任命されたのだ。彼は、託宣の日時が結社の長老によって決められること、仮面に応答して叫び出す人物も指

名されることなどを教えてくれた。これらの打ち合わせは秘密裏に、結社の他の成員たちにも気づかれないようにおこなわれる。彼は他の人びと、結社の成員たちにさえ気づかれないように、じつに慎重に行動していた。私には、こっそり、それも言外にそれとなく示唆してくれた。たとえば、彼は私に「明日の早朝、ビデオのバッテリーは大丈夫か？」と聞いてくる。おやと思ひ、「明日は仮面が呼ぶ日なのか？」と聞き返すと、「いや、それは誰にも判らないけど。」と言葉でははぐらかしつつ、目配せをする。その数分後には、近くの木陰で別の仲間たちと「次はいつたい、いつ仮面が呼ぶのか」などと大声で語り合っているのである。してみると、「Xデー」を知らない結社



託宣パフォーマンス中の「呪葉の神」

してみると、「Xデー」を知らない結社の成員がいたとしても、それはまったく不思議なことではなかったのである。「人を欺くときは、まず身内から」などと我々はいうが、仮面の神秘的な「超自然的力」の信憑性を高めるためには、そうした隠蔽工作も必要なのであろう。

このように、「超自然的力」をめぐる秘密化は複雑な様相を呈していた。さらにいうなら、秘密は個人個人によって、時と状況、対象に応じてその都度操作されているといってもよい。何となれば、秘密を知っているということ自体が、対人関係においては有利に作用するからである。秘密に翻弄されたりごまかされているのは、何も社会の部外者たる人類学者だけではない。結社という集団内部、さらには彼らの社会のなかでも、それは常におこなわれているのだ。彼らは仮面を用いつつ、同時にそれぞれの「仮面」を生きているといえよう。

仮面の形態や意匠、材質、色彩、仮面を用いた儀礼などは、もちろんそれ自体で彼ら独自の自然観や世界観、さらには広く人間に普遍的な感性や価値観を知るうえでじつに多くの素材を提供してくれる。このように、仮面の研究は仮面だけでは決して終わらない。その奥には、人間精神の、広大で深遠な世界が広がっているのである。私にとつてのフィールドワークとは、そうした世界への楽しい旅路である。

日本のアカウミガメの生活を探る

亀崎直樹

NAOKI KAMEZAKI



そろそろ長袖から半袖のシャツに衣替えをしたくなる頃、南日本の砂浜ではアカウミガメの産卵が始まる。筆者は日本近海に生息するウミガメ類の自然史を研究しているが、今回は日本で最もポピュラーなウミガメ、アカウミガメの生態に関する話をしたい。

地球の暖海のすべてに生息するアカウミガメは、ウミガメの中でも最も高緯度海域に繁殖の場を持つている種である。太平洋においては、その分布も北太平洋と南太平洋にわかれていく。

日本近海で見られるアカウミガメは、すべて成熟した個体で、生育途中の若い個体はいない。しかも産卵期を過ぎると親ガメも日本沿岸から姿を消す。つまり、アカウミガメは日本を産卵の場として使っているだけで、それ以外はまったく別のところで生活しているのである。では、いったい彼らはどこで育ち、どこに帰っていくのだろうか。以前はまったく返答不能だったこの疑問にたいしても、ここ数年でかなり答えられるようになってきた。その謎解きの現場を少し紹介したい。

メキシコのカリフォルニア半島の沖に海流が沸き上がり潮目を形成する海域がある。この生物豊かな海域に、日本では見ることのない若い未成熟のアカウミガメが集中し

ていることが解つたのはまだ最近のことである。しかし、これが日本のアカウミガメの生育場と決めるには問題がある。何しろ日本とメキシコの間は広大な太平洋が存在し、その間の距離は一万キロにもおよぶ。いくら遊泳能力の高いウミガメとはいえ、太平洋の端から端へ回遊して横断するとは信じ難い。また、太平洋には日本以外にもう一ヶ所、オーストラリアの北東部に産卵場がある。メキシコ沖のカメが、オーストラリアで生れた可能性も捨てきれない。

一方、アカウミガメの太平洋横断を考えるのに貴重な情報が、北太平洋で操業する漁船から得られた。イカやサケ・マスを得る漁網に、ときおり小さいアカウミガメがかかるのである。この北太平洋における子ガメの存在は、日本とメキシコの間のカメのルートを考えるのに、非常に都合のよいものであった。日本で生まれたアカウミガメが黒潮と北太平洋海流にのって北太平洋を横断している可能性が強くなったのである。

この問題に決着をつけたのはアカウミガメのミトコンドリアのDNA(mtDNA)であった。ミトコンドリアとは細胞質に存在し、生物の呼吸に関わる重要な細胞内小器官である。ミトコンドリアは核とは別の独自のDNAを持っており、しかも、そのD

亀崎直樹(かめざき なおき)
一九五六年、大阪府生まれ。一九九七年三月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。現在、京都大学研究員。

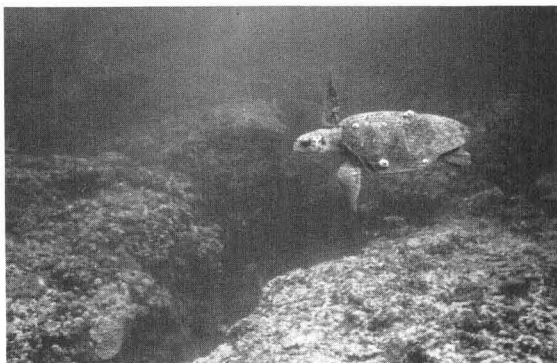
NAの塩基配列の変異は核のDNAより速く、近年ではその違いの度合いから、比較的近縁の生物の類縁関係を論じる研究が多くなされている。ウミガメのmtDNAの研究に着手していたアメリカ・ジョージア大学のボウエンのもとに、メキシコ、ハワイ、オーストラリアの研究者そして日本からは筆者が、それぞれメキシコ沖、北太平洋、オーストラリア、そして日本のアカウミガメをそれぞれ持ち寄って、mtDNAの解析が行われたのである。

太平洋には日本とオーストラリアにしかアカウミガメが産卵する場所はない。もし、両者のmtDNAの間に違いが見つければ、北太平洋やカリフォルニア沖のカメのmtDNAを調べることで、それがどこで生まれたのがわかると考えたのである。その計画は見事成功し、日本とオーストラリアのmtDNAに変異があることが認められ、その変異に基づいてハワイの北方の北太平洋に生息するアカウミガメ、メキシコ沖に生息するアカウミガメのそれぞれ九七％、九二％が日本産で、残りはオーストラリア産であることが明らかになった。

日本で生まれたアカウミガメは北太平洋を東に向かって移動し、メキシコ沖で育っている仮説が遺伝学的に証明されたのである。

産卵中のアカウミガメの甲
長を測定する。

沿岸を回遊するアカウミガメ



では、母親ガメは日本で産卵するとどこへ行ってしまふのだろうか。南日本には屋久島永田海岸、宮崎海岸、和歌山南部千里海岸、遠州灘海岸などのアカウミガメの産卵地があるが、その多くで地元ボランティアによってウミガメの保護活動が行われている。ここでは国内のボランティアが協力して、一九九一年より一斉に産卵に上陸したカメラに標識をつけるプロジェクトを実施した。一九九五年までの五年間で日本全国の一六ヶ所の産卵地で二二一九個体のカメラに標識が付けられ、そのうち二・五%にあたる五五個体が再び発見された。発見された場所は南日本の沿岸と東シナ海に集中し、中にはベトナムやフィリピンで見つ

った個体もいたが、太平洋の真ん中やアメリカ沿岸では見つかったていない。

この結果、成熟して日本で産卵するようになったカメラは、産卵期以外は東シナ海を中心とした大陸棚におり、産卵期になると日本沿岸まで回遊し、繁殖する様子が明らかになってきた。東シナ海は好漁場として知られているが、肉食性のアカウミガメは大陸の河川の栄養で育った豊富な海産物を食べて、次の繁殖に備えているのである。

このように最近の研究から、子ガメの時に太平洋を横断しメキシコ沖に渡り、成長し成熟するとまた再び戻ってきて、東シナ海の餌場と日本の産卵地を往復するという、日本のアカウミガメの生活史のシナリオがかなり明らかになってきた訳である。

現在、太平洋のウミガメ研究者は、南島の東方を西に向かって泳いでいるアデリタという名のカメラに注目している。このカメラは昨年の夏にアリゾナ大学のニコルによってメキシコ沖で発信器を付けられ放流されたアカウミガメで、人工衛星によって日本に向かって泳いでいることが追跡されている。彼女がはたして日本で産卵するのだろうか。

アカウミガメの生態研究は、多くの研究者の協力と先端技術によって日々発展している。

天空からみた熱帯雨林

市川光雄「京都大学大学院人間・環境学研究科教授」

最近、ザイル東部のイトウリの森の衛星画像を見る機会があった。二〇年ほど前からこの森に入り込み、村や森の生活を見てきたが、そうした地上での観察や記憶を天空からの像と対照させてみて、いろいろと面白いことがわかった。衛星画像では、一八〇キロメートル四方ほどの俯瞰図の中に、自分が歩き、生活した場所の景観を大局的に位置づけることができる。また、逆に画像をクロージアップしていくと、村の中まで見えそうな気がして、急に懐かしさがこみ上げてくる。こういうふうな縮尺自在の画像がほとんど瞬時に得られることは、正確な地図が手に入らないこの地域ではとくにありがたい。しかし、もっと興味深い「発見」もあった。

飛行機からのイトウリの森は、道路沿いなどを除けば、のっぺりと森林がつづいているように見える。しかし、衛星画像で植生のちがいが出るように調整すると、同じ森がじつに複雑な色模様になって現れる。緑の部分は密生した原生林で、赤が裸地、その間の黄や黄緑は畑や草地、二次林などである。二次林の大部分は耕地や集落の跡のように人為的なものだから、この森の複雑・精妙な模様は、何世紀にもわたる人為の働きかけの結果できたものだということになる。

現在、この森では国立公園化の計画が行っていて、保護区の中で人間活動が大幅に制限されつつある。このまあいくと、やがては森林景観が「自然保護地域」と「文化開発地域」に二極化することだろう。しかしこれこそは、自然と文化の二元論を景観の上で再現するものではないか。我々が残しておきたいと思う景観とはどんなものか、あらためて問うてみる必要がある。



踊りつがれるエスニシティ

——移民の島ハワイにおけるオキナワン・ボン・ダンス——

城田 愛

CHIKA SHIROTA



移民たちの島ハワイ

黄昏どきのワイキキ・ビーチ。マウンテンバイクをとめ、心地よい貿易風に吹かれながらしばし夕陽を眺める。

サンシン（三味線）と太鼓がかなでる沖縄民謡が聞こえはじめ、ハッと「現実」の世界にもどる。「ひと泳ぎしたいなあ」という気持ちをおさえ、今宵のフィールド調査地へ直行する。ボン・ダンス会場となったホテルの屋外駐車場では、ハワイ生まれの沖縄系移民の子孫が、Young Okinawans of Hawaiiに印刷された揃いの衣装をまとい、陽気に踊っている。かれらは、ハワイ沖縄青年団のボン・ダンス隊員である。

ボン・ダンスは、「ジャズイー（ジャズのように活気がある）、エクサイティング」と人気があり、一歳から八七歳、仏教徒からキリスト教徒までの踊り手たちによって愛されている。常夏のハワイでは、クリスマスや正月の行事にも盆踊りが登場し、一年をとおして週二回の稽古日をもつボン・ダンス・クラブも存在する。

先住民と世界各地からの移民たちの子孫がいける島ハワイ。この多民族社会の住民は、自己の、そして他者のエスニック・バックグラウンド（祖先の出自）に敏感になる。それは、衣食住にたいする嗜好から、

結婚相手や職業の選択、そして「人種・民族」を書類などで申告する場面までおよんでいる。

日本からのハワイ移民は、広島、山口、熊本、沖縄の順に多い。日本「本土」からの日系移民のなかで、自らを「ヒロシマン」などとよんで出身地を明言する者は少ないところが、沖縄からの移民の子孫は、自らを「オキナワン」とよび、沖縄系出身者であることを強調する。沖縄からの移民は、一九〇〇年からはじまり、現在のハワイ全土のオキナワンは四万五千人にたっている。沖縄を訪れたこともなく、そのことばもわからない三世、四世のオキナワンも沖縄にたいして「シンポリック」なつながりを感じており、なかには「沖縄人」と漢字三文字のタトゥー（入れ墨）を刻み込んで、オキナワン・アイデンティティを誇らしげに示す者さえいる。

オキナワンは、ハワイ沖縄人連合会やハワイ沖縄会館を設立し、独自のコミュニティを形成している。かれらは、社会的・政治的条件のなかで、どのように集団性をもつようになったのだろうか。その過程において、沖縄人像、あるいはオキナワン・エスニシティはどのように創られ、また、かれら自身によって再構築されてきたのか。これらの問題にアプローチするために、私

城田 愛（しろた ちか）
一九七二年、大阪生まれ青森育ちの沖縄系三世。現在、京都大学大学院人間・環境学研究所博士後期課程在籍中。沖縄（系）移民とその子孫に関する人類学的調査から、沖縄、日本、アメリカ（ハワイ）における文化の相互関係についての研究に取り組んでいる。

は一九九五年八月から一年をかけてハワイのオキナワン・ボン・ダンスに関する現地調査をおこなった。

盆踊りからボン・ダンスへの変遷

移民の初期、沖縄と日本の他県出身者とのあいだには、ことばや習慣の違いのみならず、かなりの経済的格差があった。ハワイの日本人社会では、否定的な沖縄人像が他県人側から創られ、沖縄の文化や習慣は「野蛮」視された。この状況を知った沖縄の知識人は、沖縄移民にたいして日本人への同化を新聞などで訴えた。そうしたなか、沖縄移民は、日本人社会で盛大におこなわれていた盆行事においてだけは郷土の唄と踊りに興じることができた。身も心もおどる盆踊り。かれらは、踊ることによって、御上や他県出身者から日頃は抑圧されていた本来の人間性を取りもどし、自己のアイデンティティを確認していたといえよう。

一九二〇年以降、沖縄移民はハワイ各地で一応の生活の安定をみるようになった。「ヴァイオリン蛇三線」の演奏を取り入れた沖縄盆踊りは、日系全体の盆踊り大会で、「観衆を恍惚状態に引き込み優勝」した、と当時の新聞はつたえている。沖縄移民は、好評を博した盆踊りをおとして、ポジティブな沖縄人像を自ら創ることができたので



ハワイでサンシン（三味線）と太鼓がかなでる沖縄民謡。

ある。

第二次世界大戦の前後では、沖縄人像をめぐる議論が、ハワイの日系社会だけではなく、アメリカ全体において取りあげられていった。この時期、『ニューヨーク・タイムズ』を含むマス・メディアやアメリカ軍事当局は、沖縄の統治を正当化するために次のようなプロパガンダをおこなったのである。「沖縄（琉球）人は、日本によって支配されてきた被抑圧少数民族である。ゆえに、沖縄の統治は、少数民族の解放であり民主主義の擁護につながる」と。オキナワン・エスニシティは、顕在化し政治的に利用されたのである。

日本軍による真珠湾攻撃以降の排日感情がたかぶるハワイ。この偏見とたたかうために、ハワイ生まれの沖縄系アメリカ人の二世には、他の日系二世と同様にアメリカに忠誠をつくすために参戦していったものもある。だが、沖縄からの一世と二世の間には、今まで他県人に言われてきたとおり、「ミー・ノット・ジャパニーズ、ミー・オキナワン」と主張する動きもあったといわれている。政治的意図のもとに強調された「沖縄（琉球）独立民族像」をオキナワン自身も積極的に用いていくのである。たとえばかれらは、「南国情緒、琉球盆踊り」と新聞上で宣伝し、沖縄を救済するための「祖国沖縄医療救済募金盆踊り」を催

している。戦後の救済運動を契機に、ハワイの沖縄コミュニティは強固なものへとなっていた。

一九六〇・七〇年代に米本土で起きた社会運動やルーツ探しなどの影響をうけて、オキナワンのあいだでもアイデンティティの覚醒化や、それにともなう沖縄文化の再創造が展開されていった。かれらのアイデンティティの拠りどころとなったものは、第二次世界大戦の前後に政治的に強調された沖縄人像ではなく、沖縄独自の、あるいは琉球王国の輝かしい歴史であり、豊かな文化遺産であった。ハワイで沖縄のことは習得するには困難がともなうが、沖縄の音楽や踊りのリズムは、オキナワンの心身にストリートに響きだしていった。沖縄の盆踊りは、伝統的名称である「エイサー」とよばれはじめ、ローマ字化された *Eisa* および *Bon Dance* は、多民族社会ハワイに住むオキナワンにとってのエスニック・シンボルとなっていくのである。

踊りつぐ人びと

現代におけるオキナワン・エスニシティは政治的意味合いがうすれ、ボン・ダンスは娯楽化している。かれらは、クリスマス行事には、アメリカン・スタイルで「メリークリスマス！」といいながらボン・ダンスを楽しむ一方、沖縄からの訪問者を歓迎するときには、ハワイ生まれであることを演出する。その際には、アロハ・シャツやムームー・ドレスを着て、ハワイアン・ス

タイルでボン・ダンスをおこなうのである。現代のオキナワンは、何よりも楽しむために、ハワイやアメリカの文化を柔軟にとりいれながら、沖縄文化の再創造をおこなっている。踊りをたのしむ、という感性の裏づけがあつてこそ、主体的に踊りを今日まで継承してきたといえよう。オキナワン・ボン・ダンスの意味あいや形態は、元来のものから変容したものの、沖縄系アメリカ人のあいだにも芸能を心底から楽しむ「沖縄のころ」は踊りつがれている。

沖縄の唄や踊りは、ハワイだけではなく、他の移住先である日本の関西・関東、北米・南米などの各地でも継承されている。この夏、私はふたたびハワイをはじめとするボン・ダンス会場へむかう。



ボン・ダンスに興ずるオキナワン

●リレー連載● 環境を考える

「環境」について―「現象学の天才」マックス・シェーラーの場合

小川 侃 TADASHI OGAWA



小川 侃（おがわ ただし）
一九四五年、大阪府泉南生まれ。七四年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。京都大学博士（文学）。京都大学大学院人間・環境学研究科教授（哲学／自然文化構造論）。主な著書に「現象のロゴス―構造論的現象学の試み」「現象学と文化人類学」「現象学と構造主義」「自由への構造」などがある。

環境とはなにかという問が切実に私たちの意識に上るようになったのは、比較的最近のことであるように思われる。哲学の世界でも、すでに一九一四年にスペインのオルテガ・イ・ガセットが「私とは私と私の環境である。もし私が私の環境を救うことができなければ私をも救うことはできない」というテーゼをひっさげて『ドン・キホーテについての省察』を著している。もともとこの場合の「救う」という言葉の意味は、エレア派の哲学者たちが運動を否定したのになんとしてプラトンが「現象を救う」といったときの「救う」（ソーゼイン）であって、要するに私たちの周囲にあるものに意味を与えて我がものとせよということなのだ。

オルテガのこういう思想の背景には、フッサールの『イデーン』（一九一三）にお



シェーラー

ける「人間の自然的態度において現われる世界」の現象学的な記述が関与していた。つまり人間がまずおのれの周りの世界に気付き、それを知覚するさいの世界の現われの記述をもつてフッサールは、現象学を始めたのであった。環境は人間がもはや環境に目配りすることを忘れ、科学・技術による「世界支配」（ウエーバー）に乗り出したころに少し遅れて意識されるようになったと言つて過言ではない。

しかし、環境が、古代ギリシヤ以来二〇世紀の始めまでまったく人間の意識に登らなかった概念だと言ひ切ることはできない。たしかに「環境」という概念は、近代の哲学のなかで、しかも二〇世紀になって意識されてきた。とはいえ環境というものについて古代の哲学がなにも知らなかったわけではない。たとえば、プラトンの『ノモイ（法律）』の677Eには、「τὰ περὶ τοὺς ἀνθρώπους πρῶτα»（人間を取り囲む諸事物）というような言葉があり、すでに環境という事態は意識されている。現代の日本語では、「状況」とか「環境」と訳されている。あるいは、プラトンにならって次のような表現を作ることでもできよう。「ἐργὰ ἐπὶ τοὺς τοὺς ἀνθρώπους」（「人間に

付随して生じているものごと」とか「人間の周りにあるもの」という意味に訳すことができる。これらの表現はある意味で人間に焦点が当てられていて、それに付随しつつ人間とともに帰属しているものごとという意味で、人間中心主義を述べている。

だが、アツチカ方言を基本にしたWoodhouseの『英語―ギリシヤ語辞典』を引いて見ると、「environment」に「τὸ περιεχόμενον」が当てられている。この言葉は本来はいかなる意味でも人間中心主義を含意せずに、却って「なにかの周界」「なにかの周りにあるもの」という意味をもつ。コンピュータを使う人であれば熟知している「環境設定」などと言うときの「環境」は、あるソフトが機能するための条件もしくは状況を決定することである。いいかえると、ソフトのシステムの機能条件を予め決定することにより、そのソフトの機能するための機能範囲を限定することである。

「環境」には、だから、基本的に「周りにあるもの」「取り囲むもの」という意味があり、二〇世紀の哲学者たちは、それを当り前のように「人間にとつての環境世界」とか「環境的自然」というふうに関心中心主義的に理解してきた。しかし、このよう

な自明性はあらためて問い返されねばならないだろう。むしろ、環境の基本的な意味は、あるものの周りに見い出されるものという意味であり、なにもそのあるものが人間存在である必要はないのだから。こういうふうには環境をとらえると、環境をより広い意味でいわば機能論的にとらえなおすことができる。

環境という概念は、あるものが活動するための付帯条件もしくは状況という意味をもち、もともと数学のなかでもコンピュータの基礎理論となる「変分法について」の研究から出発したフッサールによって地平性という概念が定義されたときの「可能性の遊動空間」の「先行的な枠どり」という意味にも適合するだろう。なぜなら環境の「取り囲む」あるものが人間の意識や人間存在であれば、「環境」とは人間にとって人間の意識が機能し、活動するために備わるべき「地平性」であるし、それというのも「経験の可能性の遊動空間」として「地平性の先行企投」がなければ人間の世界経験もありえないのだから。もし環境によって囲まれるあるものが、人間の生存や生活であれば、環境とは人間の生存のための条件を形成するものであり、このばあい、環境は人間の住環境としても現われるし、環境的自然や環境世界としても現われる。

環境概念が基本的に前提しているのは、「核となる存在者」と「その周界（つまり環境）」とが相互に一定の関連性に置かれていて、核となる存在者とその周界が相互に影響を受け止めあい、変化していくし、また、この意味で相互に条件づけあっている

るという思想である。

今述べてきたように最も広い意味で「環境」という概念を把握し、世界という可能性の全体から予め一定の範囲を枠取ることとして理解すると、私たち人間にとっては「人類の運命」が今日のいわゆる人類の「環境問題」になるのは明らかであろう。その際に重要なのは、たとえば環境世界、人類、およびコスモスの全体を、オルテガとともにいえば、「私と私の環境」の問題として省察することである。このような意味で私が今日想起したいのは、「全体としての人間」を目指して思惟をすすめながら心臓麻痺による急逝で挫折せざるを得なかった「現象学の天才」マックス・シェーラーのことである。彼は、『宇宙における人間の位置』を究明しようとして、悲劇的なことに結局単なるトルソしか残しえなかった。

認識論の哲学の限界

まず私の個人的な回想から話を始めることをお許しいただきたい。いまから一〇年くらいまえになるけれど、アメリカの東海岸のマサチューセッツのケンブリッジに一週間滞在したことがある。そこは、ボストンの近くで、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学などという世界に名を轟かせる研究教育機関が存在する。私は、ハーバード大学の高名なマイクロ・エコノミックスの教授の家に朝晩二食つきの居候をやっていた。昼は、ハーバード大学の図書館やボストンの、世界にあまりに有名なボストン美術館（とくに東洋美術のコレクションで著名）を鑑賞したりした。ボストンの美術館は東洋の仏像をあるべかりし仕方、つまり薄暗い瞑想的な雰囲気の中に安置しており、アメリカ人の繊細さに気付かされた。さらに、ボストン・コモンという公園やアメリカ独立革命の発火の糸口の一つになった「ボストン・茶党（ティー・パーティ）」と言つてもパーティを開いていたわけではない。私たちの高校の教科書ではあやまって「茶会事件」などと訳されていた。茶は日本でも落ちていてだんらんの中に飲むもので、政治革命とは直接関係あるまい）事件」の記念の船を見学したのもいまでは懐かしい遠い思い出である。



哲学と経済学の交流（写真左からティミニエチカ教授（国際現象学研究所）（ハウタッカー夫人）、筆者、コーヘン教授（ボストン大学哲学科）、ハウタッカー教授（ハーバード大学経済学）

さて、私の驚きはハーバード大学の生協の書籍部に本を見に行つたときに始まる。当時は、私は一貫して「認識論の現象学」に集中していて、しかも、(今日でも基本的にはその見解にかわりはないが)それが最も重要と思っていた。ところが私がそこに見い出したのは、女性学 (Women's Science) と黒人学 (Black Science) というべき書籍群であり、それから当時すでにいわゆる今日の環境学の本棚が、アメリカの分析哲学の書物やハイデッガーの英訳と並んでそれらを圧倒していた。私のいわゆる「認識論の現象学」やフッサールの英訳などは一冊あるかどうかというものだった。私はおおきなカルチャー・ショックに襲われた。少なくとも、ドイツのケルン、キール、フライブルクなどという大学町の書店で見た光景とはかなり違っていたのは確かであった。

この現象学という哲学は、フッサールが難解な術語をたくさん作つたので専門哲学者のあいだでも難解で鳴る。しかし、本来は、現象という人間存在にもっとも近い「現われ」の、とくに現われの構造の探求をする哲学であった。だから、環境問題も女性問題も、はたまた黒人問題も当然ながら考察の射程にはいつてきてしかるべきなのである。ハイデッガーも晩年にはとくに環境問題に関わる発言を多く残している。だが「現象への接近」という点では現実問題に最も肉薄して語つたのは、誰をおいてもシェーラーではないかと思われる。

シェーラーというのは、いったいどういう哲学者なのだろうか。マックス・シェー

ラーという現象学者については、この頃はあまり論じられなくなったし顧みられなくなったように思われるが、しかし、彼こそは、かつては「現象学の天才」と謳われた、将来を見通すバースペクティブの広い哲学者であった。現象学の創設者であるフッサールは、一時はシェーラーに現象学の将来を託そうと思つたくらいである。

いったいどの点でシェーラーは現実問題にもっとも深く関わつたといえるのだろうか。私の見るところでは、シェーラーは「動物と人間にとつての環境の問題」を発見し、そのの人間にとつての意味を説明したひとりであり、シェーラーという一人の男性にとつての他者の問題つまり女性運動つまりは一種の環境問題を論じた最も古い哲学者のひとりである。シェーラーこそ環境 (Umwelt) と世界 (Welt) の違いに注意をはらつた最初のひとのひとりであり、また、女性運動について理論的にもおおくの洞察を投げかけたひとりである。

シェーラーは、ある意味ですべての今日のアクチュアルな問題をすでに発見していたといえるタイプの哲学者である。もとよりほとんどの場合、いわゆるプロブレマテ

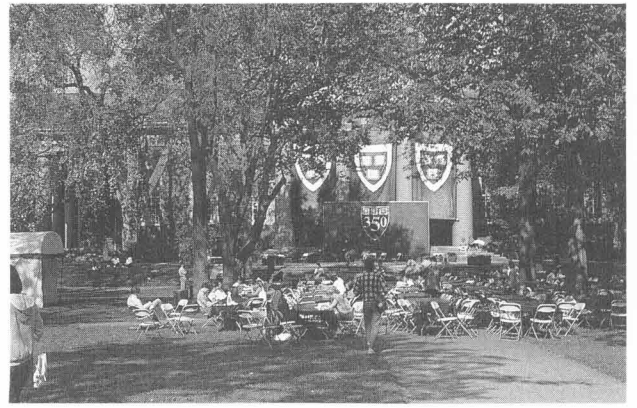


シェーラーとメリット

イクの提示にとどまっていた、解決には至っていないし、また問題解決の単なるプログラムを一般民衆に告知したという次元にとどまるものもおおい。(シェーラーが当時において特別に婦人運動に関心を示したのは、彼自身の個人的な女性問題も動機になつていたかもしれぬ。シェーラーの個人的な不運な女性問題についてはよく知られている。彼はまず年上の貴婦人との結婚で苦しめられ、カトリックのゆえに離婚が困難であつた。離婚したのちの第二の結婚では、ドイツの不世出の指揮者といわれるフルトヴェングラーの妹、メリットと幸福に暮らしたが子供ができなかつたので再度離婚し、第三にマリア・シェーラーと結婚して時わずかにしてフランクフルトにおいて死去した)。

均衡化の時代の到来

シェーラーが先鞭をつけた問題は数多くあるが、しかし、ほとんどは今日の大問題でもあり解決はついていない。たとえば、フェミニズムの問題、環境の問題、そして人類世界の問題などである。これらは、彼の死のすこしまえの思索のなかに非常に荒削りな仕方ですケッチされている。シェーラーの晩年の書物『宇宙における人間の位置』とか、のちに『哲学的世界観』という論文集に収められた「均衡化の時代における人間」などという論文は、じつに今日においても人類の将来を照らしたす力をもつ。人類の「均衡化の時代」という概念で、シェーラーは、人類が一種の「拡散する諸力



ハーバード大学創設350年記念集会

の均衡化」の時代に入ったという時代に対する診断を下した。それは、一九二七年一月ベルリンでの講演であった。

均衡化とは、さまざまな力の相互の相殺とそれらの均衡関係を作り出すことをいう。たとえば、これまでアポロンの人間とデイオニソスの人間（ニーチェ）とか、合理主義と非合理主義などという区別がなされたが、そういう区別は相殺される。いまや問題となるのは、「全体としての人間」であり、「全人類」だということ。

現代は、大人が子供に回帰したが、子供は早く大人になりたがり、エリートと大衆の間の均衡化がおこり、男性は女性になりたがり、女性も男性化する時代である。そしてヨーロッパとアジアのあいだの均衡化も生じる。資本主義経済体制と社会主義経済体制とのあいだにもこの均衡化はおこ

る。（これは、一九七〇年代にヘルマン・リユッベが主張したテーゼでもある）。シエーラーの洞察によると、人間存在は、全人類性というべきものに、均衡化されてゆくというのである。シエーラーは、この均衡化を非常に楽観的な明るさをもって論じている。要するに、シエーラーが求めているのは、全面的な人間存在というべきもので、その存在においては男性存在も女性存在も、アジア人もヨーロッパ人も相互に均衡化され、和解している。この事態を、シエーラーは相殺、和解、均衡などという意味をもつ“Ausgleich”で表現している。さまざまな差異性や部分的な敵対化がおおきな全体のうちで和解しあい、均衡化されるということ、を、「人類の運命」だとも見ている。

シエーラーは、女性解放運動、今日のフェミニズム運動をおそらくドイツの哲学者で最初に肯定的に論じた。一九一三年に出版された彼の小さい論文「女性運動の意味について」は、ある意味で今日においてもなお考えるべきものを残している。

当時ドイツにおいては、出生数の低下が社会問題となっており、いわゆる女性（解放）運動への反駁となる議論が提示されていた。出生数の低下は今日の日本でも次世代形成の問題であり、おおいに論じられているが、この問題は、いわゆる「女性は家庭にもどり、育児と家事に徹底せよ」という反フェミニズムの動きに合体する側面がある。出生数の低下は、民族の滅亡をもたらすであろうし、また、いわゆるフェミニズム運動に反対して、女の本来の天職は

「出産と育児と家事」であるという保守主義からの発言が、問題を紛糾させた。

本来、シエーラーは、すでに述べた「均衡化のテーゼ」をもっていたからフェミニズムと反フェミニズムの両方を睨んだ独自の立場からこの問題に取り組んでいる。第一の点は、高度の工業社会は、純粋な女性的なタイプの女性を排除してしまいがちである。なぜなら、高度の工業社会はどのような女性も知的に労働し、かつ労働させるように全女性を総動員するから。第二に、純粋な女性らしさを強調するタイプの女性のみを、つまりシエーラーのいう「愛と優しさ」のみをもつ女性類型は、おうおうにして女性らしさを売り物にしてしまうことになり、こうして自滅していくという。

しかし、シエーラーにいわせると、「女性性は家に閉じ籠り、育児と家事に専念する



国際現象学研究所

べきだ」という主張は、じつは最近のものである。未開民族では、女性は労働する存在者である。このような極端な場合を除くするにせよ、たとえばドイツの農業では、女性は労働に従事している。このことをシェーラーは、統計の数字をあげて、根拠づけている。当時バイエルン（ババリア）地方では、農業労働人口の半分以上は女性であった。女性は「家庭に帰れ」というのは、最近に始まったことなのである。

女性と男性の差異性についても、たとえば、一八世紀のルソーのような大ざっぱな思想——「男と女の心の差異性は、とりわけ両性の身体的・生理学的な機能差異の結果であり、それ以外は両者ともに同じ様な理性的な心を持つであろうと言うような思想」——は、根こぎにされるべきなのである。シェーラーによると、男性と女性とは、身体の上で相互に異なるのと同じように、それぞれが等しく根源的である。このように男性と女性を相互に異なったものと見ることは、いいかえると、男性にとつては、女性を徹底的に他者として見るということである。そして、高度の工業化した社会では、すべての女性が働くべき使命をもつとされるので、男性的なタイプの女性は、女性運動の運動家や一般に高度に自立する女性にみられるようになる。これにたいして、シェーラーの憂慮は、女性的なタイプの女性に集中する。すべての人々に労働するように総動員する、高度の工業化社会においては、もとよりすべての女性的存在者も働くように要請されている。たとえそうだと

春婦や街娼の類に一緒にたにはうりこんでしまつてはならないといわれる。

シェーラーは、男性と女性の差異性を根本的なものとして認めているのだけれども、しかも、両者のいわゆる均衡化を構想している。それは、男性の男性であることを廃棄することなく、また女性の女性であることを廃棄することなく、両者の相互の等根源性を認めながら差異を通しての「差異を廃棄することなき総合」を目指すことである。ここには、シェーラーに理解された限りでの本質直観の方法が働いている。女性的なタイプが歴史的な変更可能性の限界のなかでどのように変化しても、女性的なタイプの変化のいかなるものも究極的には女性らしさを廃棄することはない。女性は、保守的で改変に反対する存在者である。女性性は、大地に根差し、植物的な存在者である。



ケレン大学（シェーラーが正教授を務めていた）

り、すべての体験においてより統一的で、しかも、本能、感情、愛によって導かれる存在者である。いかなる男性もこの点では女性にかなわない、とシェーラーは考えている。

シェーラーの本来の憂慮は、さきほどのべたように女性的女性のタイプに向けられている。彼女たちを決して街娼や売春婦の類のものとして一緒にたに扱うのではなく、人類の一員として、人類の一翼を担うものとして見るべきだというところにシェーラーの結論はある。そして、女性の経済的自立は、パートナールを、家族関係や社会的地位ではなく「心で選ぶこと」（現在の日本語では「ハートで選ぶ」とか「フィーリングで選ぶ」というような意味であろう）に向かう。このような女性の自立の趨勢は、しかし、私生児を増加させることになる。シェーラーの結論は、私生児を社会的にも国家的にも保護するべきだということになる。

環境世界と世界との差異

シェーラーのもうひとつの関心事はどのようなであったか。つまり、シェーラーのいわゆる環境についての思想はどのようなであったか。彼のこの問題についての思想は、『宇宙における人間の位置』という書物のなかに不十分ながら覗き見ることができる。シェーラーは、環境をあくまでも「人間やとくに動物の環境」の意味で理解している。環境世界と世界との区別をもつとも明瞭にかつドラスチックに画したのは、シェーラーであろう。彼の考えでは、動物はその

行動を通じて周りの世界つまり環境世界とそのつど関わる。動物は、本能によって、あるいは衝動によって環境世界に関わり、環境をまた実在的な仕方に変えてしまう。動物の環境世界への関わりを、シェーラーは、三段階において分節化している。つまり、シェーラーは、動物と環境世界との関わりを三幕の芝居に見立てて、次のように分析している。

第一幕は、生理学的・心理学的な状態性から始まる。環境世界の構造は、動物の生理学的で、間接的には形態学的な固有の種類の在り方に合致していて、動物の衝動と感覚の構造に一致している。要するに、動物は環境世界との「厳密に機能的な統一性」を形成している。「動物がおのれの環境世界から気付いたり、つかみ取るものは、すべて、動物の環境世界の構造の確実な垣根と限界のなかにある」。第二幕は、動物がおのれを導く衝動目標の方向に向って反応し、このことによって環境世界になんらかの実在的な変化を作り出すということである。第三幕は、以上の二幕によって引き起こされ、ともに変化して生じた生理学的・心理学的な状態性である。これらの動物と環境世界との関わりをつうじて明らかになるのは、動物がいれば環境世界とともにその内部に閉じ込められているということ、つまり一定の環境とともに存在し、環境とともにのみ生存するということである。

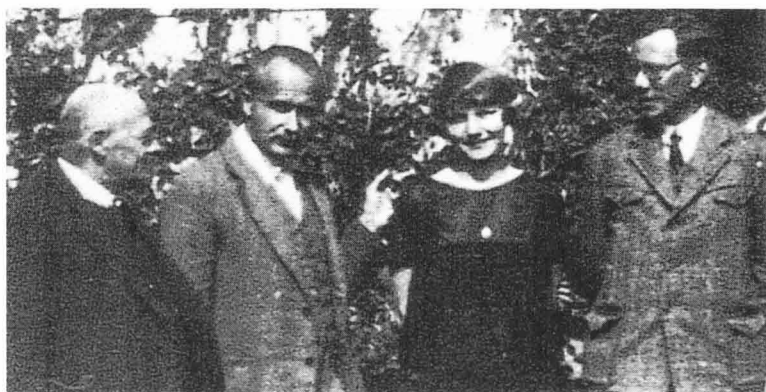
これに対して、人間存在は、精神をもち、精神的な存在として人間は、世界に開放された存在である。周りの世界への人間の関わりは、じつは、閉じられた環境世界への

関わりではなく、むしろこの場合の人間にとっての周りの世界は、無限に開かれている。人間の行為は、環境世界から自由であり、人間の精神は、もはや動物のように、境界への抵抗と反応の中心ではなく、むしろ、世界の全体に開かれている。知とは「存在関係」であり、じつは、開かれた世界の全体との存在論的な関わりなのだ。

人間存在のこのような世界への関わりは、再び三幕の芝居で示される。第一幕は、人間精神は、対象の純粹な本質を見ようとすることによって動機づけられている。そして、これは、人間の有機体の生理学的・心理学的な状態性からの独立であり、人間の衝動の推進力からも自由である。第二幕は、人間の自由である。人間は、人格の中心に由来する抑制力で衝動の推進力を抑えることができるということだ。第三幕では、人間存在は、事象の対象性の変化を自己において価値づけ、決定的に体験するということだ。このようにして、人間精神の開かれた世界への関わりは、環境世界への呪縛から解放されている。

このような思想は、二〇世紀の動物行動学などとの対決のなかから帰結してきたのであるが、しかし、人間存在と動物とのあいだの差異性を明確にしている。日本のサル学などでは、ボノボやチンパンジーにおいて、人間存在とサルとのあいだの差異を決定的なものとしては認めたがらないというような相変わらず方法論的に素朴な見方が支配的なようである。しかし、私は問いたい。いったい類人猿が「対象性の本質直

観」を行いうるだろうか、いったい衝動を抑制しうるだろうか。そして開かれた世界の全体についての形而上学をもちうるだろうか。こういう問を禁じることは、私にはむずかしい。サルとヒトとの間には、なおも乗り越えがたい一線を引くことができるのではないか。



左からシェーラー、詩人のリルケ、一人おいて神学者パウル・ティリヒ

フロンティア ■ 電子が語る、生体組織中の金属イオンの環境 ■ 川村淑子 YOSHIKO KAWAMURA

物質のさまざまな特徴は、物質を作っている原子や分子のもつ電子によって作り出されていると言つて過言ではありません。

したがって、その物質の特徴を研究し、さらにそれを発展させて利用しようとする場合、電子の状態を知ることが不可欠となります。ところが、この電子というものの、非常に小さい粒子で、その存在を直接目で見ることはできません。もちろんそれが置かれてある環境も目で見て知ることは不可能です。しかし、電子の状態はいろいろな方法によって探ることが出来ます。また、環境が電子の状態を変化させることは、いろいろの分野でよく知られています。したがって、その振る舞いを探れば電子の置かれている環境を知ることができるかもしれません。そして、得られる結果を私たちの文化生活上のために利用することが出来るかもしれません。それではどのようにして目に見えない電子の状態を知なのでしょう。

電子には、磁石のそばに置かれると磁石と同じ向きになろうとする性質と反対向きになろうとする性質があります。それは小さい磁石を大きい磁石のそばに置いたとき、くつつこうとする置き方と反発してくつつこうとしない置き方の二種類があるのにたとえられます。この磁石のNSの向きにあたるのが電子のスピンという性質です。磁石にくつつこうとする向きに相当するのはエネルギーの小さいスピン、磁石に反発しようとするのはエネルギーの大きい方のス

ピンに対応します。電子を磁石の側に置くと大部分の電子はエネルギーの小さいスピンの状態になります。これらに適当なエネルギーを与えると、小さいエネルギーの状態にいた電子はエネルギーを受け取り、エネルギーの大きい状態に移ります。すなわちスピンの状態を変えます。このとき受けることのできるエネルギーは電子の置かれてある環境によって異なるため、エネルギーの大きさを検討することにより、目では見えない電子の置かれてある環境の違いを探ることが出来ます。この方法を電子スピン共鳴法といいます。電子スピン共鳴の対象となる原子や分子は、対を作っていない不對電子という電子をもっているものでなければなりません。電子対を形成していると、ちょうど、二つの磁石がNSを互いに逆向きにくつついてしまうように、スピンの状態をかえるためのエネルギーを外部から吸収することはできません。したがって、エネルギー吸収から電子の様子を探ることは不可能になります。いくつかの物質には不對電子をもった原子・分子があり、電子スピン共鳴法によって電子の様子を探ることが出来ます。

電子スピン共鳴による測定の対象となるものに鉄イオン、銅イオン、ニッケルイオンなどがあります。これらは生物組織に微量含まれ、種々の重要な反応を助ける役割を担っていますが、その役割はイオンの周りの立体的構造やイオンが結びついている原子の種類に支配されています。たとえば

川村淑子（かわむら よしこ）

一九四二年、三重県生まれ。一九九六年三月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。現在、京都大学総合人間学部、愛知教育大学等の非常勤講師

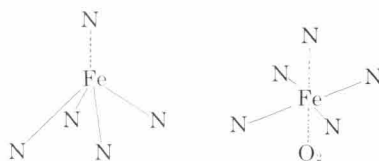


図 酸素分子と結び付いているときといないときの鉄(Fe)イオンの様子

(1) 物質中の原子・分子に強制的に不對電子をもたせる方法もある。

酸素(O_2)を肺で受け取り体の末端部まで運搬するのは血液中のヘモグロビンです。ことにそのなかに存在する鉄(Fe)イオンが直接酸素と結びついて運搬します。酸素を運搬中、鉄イオンは不對電子をもたず、電子スピン共鳴法の対象となりません。一方、酸素分子を組織に与え終わると鉄イオンは、電子スピンをもつようになり、この方法の対象になります。その結果から、鉄イオンは、図のような状態で五個の空素原子(N)および酸素分子に結びついていることが明らかになりました。鉄イオン中の不對電子の吸収するエネルギーの大きさがこの構造を物語ってくれます。また、イカ、タコでは血液中酸素を運搬するのは銅イオンで、これは二個の空素原子、二個の酸素原子と結びついていることが明らかになっています。その他、酸素分子そのものや老化に関係するとして関心の的になっている活性酸素種も不對電子をもち、電子スピン共鳴法による研究の対象になります。

私の研究では、フォルマザンという有機分子が不對電子を持った銅、ニッケル、コバルトなどのイオンと結びつき、これらのイオンに変化に富んだ環境を提供していることが明らかになりました。フォルマザン分子が提供するさまざまな環境についての研究結果が、生物組織で不對電子をもつイオンの置かれてある環境を解明するために役立てばよいと思います。

フロンティア ■ クワガタムシの大顎の謎 ■ 荒谷邦雄 KUNIO ARAYA

クワガタムシの仲間は、全世界に約一二〇〇種類が生息しており、日本からも約三五種類が記録されている。クワガタムシといえば、カブトムシとともに夏の風物として古くから親しまれているが、実際には驚くほど不明な点が多い。クワガタムシの象徴である雄の立派な大顎（よく角と誤解されるが、実際には牙が変化したもの）もその一つだ（図1）。一般に、雄の大顎は、雌や餌場、縄張りなどを巡る雄同士の闘争のための武器であり、闘争に勝つためには、より大きな顎をもっていた方が有利と考えられている。しかし、実際に野外でクワガタムシを採集してみると、大きな大顎をもった立派な雄に混じって小さな大顎しかない小型の雄もかなり採集される（図2）。こうした小さな雄の立場はいつたいうなっているのだろうか。

心配には及ばない。というのも、最近の研究で、貧弱な大顎しかもたない小さな雄も餌や雌を得るために、じつにうまい作戦をとっていることが明らかにになったからだ。小さな雄は、大きな雄より早く活動をはじめ、日が暮れるとすぐに樹液に飛んで来て食事をする。夜がふけて大きな雄がやってくると、小さな雄は、さつさと餌場をあけ渡ししてしまう。じつは、小さな雄は、大きな雄が食事に夢中になっている間に、その目を盗んでちやっかり雌と交尾する機会を狙っているのだ。小さな雄がこの作戦で雌と交尾できる成功率は意外に高いようだし、大きな雄のように闘争によって傷ついたり死んでしまうこともない。小さな雄のこうした行動は、一見、消極的だが、じつは非常にうまい合理的な作戦といえる。移動能力や敵から隠れて身を守る能力も小さな雄の方が勝っていると考えられる。大きな大

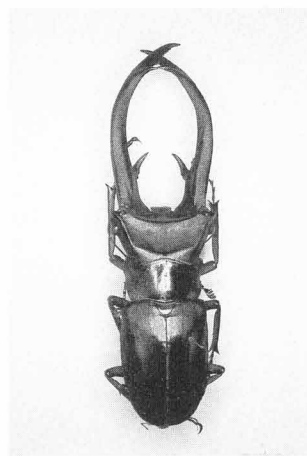


図1 エラフスホソアカワガタの雄

顎は闘争には適していても、飛ぶ時や狭い場所に隠れる時にはかえって邪魔になるだろう。大きな顎を造るための投資もばかにならない。実際、小さな大顎の雄は同種の立派な大顎を備えた雄に比べると、約半分の期間で卵から成虫になった例が報告されている。小さな大顎でよいなら、成長に必要な餌の量も少なくてすむ上に、同じ期間で、より多くの世代を繰り返すことができるわけだ。

こうしてみると、雄のさまざまな大きさの大顎の背景には「大顎の大型化に伴う闘争の勝利という利益」と「移動能力の低下や投資量の増加という損失」に関する巧みな計算が隠されていることがよくわかる。しかし、そもそも小さな大顎の雄が、「幼虫時代の餌の質などの環境条件によって、仕方なく小さくなったものなのか」（後天的要因）あるいは「最初から小さく生まれるべく意図的に仕組まれたものなのか」（遺伝的要因）という大問題には、残念ながら、いまだに満足な解答が得られていない。少なくともいくつかの種類では、雄の体サイズと大顎の長さの関係を調べてみると、ある体サイズを境にして、不連続な変化が生じ、急に大顎が伸長することや、大きな雄と小さな雄の両方が一つの個体群内

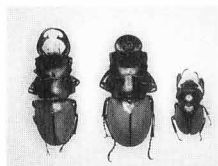


図3 ゾンメルツヤクワガタの雄と雌

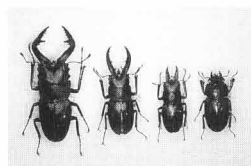


図2 ノコギリクワガタの雄と雌



荒谷邦雄（あらやくにお）
一九六五年、愛知県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士後期課程（動物学専攻）修了。京都大学大学院人間・環境学研究科助手

で互いに比較的安定して存在していることがわかっていく。これらの現象は、大顎の大きさの決定に遺伝的な要因が色濃く反映されていることを示唆している。しかし、同じ親の子どもであっても、飼育条件によって、大顎や体のサイズにかなりのバラツキが生じる例も報告されており、環境的な要因も無視できない。東南アジアに生息するツヤクワガタの仲間のように、体の大きさは全く変わらないのに、大顎には、大きさはもちろん、その形や内側についた歯の位置、数などが全く異なった多様なタイプが存在する例もある（図3）。一見すると、その違いはとも同種の雄とは思えないほどだ。

こうしたさまざまな大顎の形を決定する要因はいったい何なのか、また、それぞれの大顎の形をした雄にはどんな行動上の特性が備わっているのか、さらに、クワガタムシの系統進化の中で、大顎の形態がどのように進化してきたのかなど、興味は尽きない。おそらく、大顎の形や大きさなどの形質は潜在的なパターンとして遺伝的に備わっており、こうした形質の発現に、環境的な要因が、いわば切り替えスイッチとして働いていると考えられるが、複雑な現象が絡み合い、なかなか一筋縄ではいかないようだ。種類によってその発現の仕組みがまったく異なっている可能性もあるし、競争力や移動力などの中で、どの利益を重視するかという選択も種類によって変わってくるはずだ。クワガタムシの不可思議な世界の解明はまだ始まったばかりといえる。その魅力の一つ一つが、まさに現代の生物学に大きな課題を与えてくれている。

フロンティア ■無色の銅化合物が存在するか■ 李 勇 YONG LI

金属製品のうち、人類が最初に認識し、使用したのは銅であるといわれている。その応用は多くの分野におよぶ。銅を含む鉱物が顔料として古くから利用されているのもその一つの例である。花などにみられる美しい色（有機化合物の色）は短期間に色あせてしまうことを知っていたのか、あるいは当時そのようなものを用いたとしても、今日まで色が残らないためか、今日みられる昔の着色絵画や工芸品などに用いられているのは、ほとんど例外なく鉱物系統の顔料である。そのなかで、青色と緑色を出す顔料にはそれぞれ藍銅鉱とクジヤク石がよく使われていた。これらは化学用語でいえば、銅化合物である。このように銅化合物が青色や緑色など鮮やかな色をもつことは今では常識であり、ほぼすべての教科書はそのように教えている。しかし、実際、我々の研究結果によって、無色の銅化合物が存在することが明らかとなった。

化合物はどうして色を出すのだろう。それは分子のエネルギー準位と深く関係している。分子は多くのエネルギー準位をもつが、それには電子の入っている準位（一般には、電子は低いエネルギー準位から充填していく）と入っていない準位がある。低いエネルギー準位にある電子は光のエネルギーを吸収して、高いエネルギー準位へと遷移することができる。つまり、一つの電子状態から他の電子状態に変わる。このように二つの準位のエネルギー差は種々の分子環境において異なるから、電子も波長の

異なる光を吸収して遷移する。銅化合物など多くの遷移金属化合物のこのような遷移、つまり吸収する光はちょうど可視光領域にあるので、いろいろな色を見せるわけである。したがって、無色の銅化合物を造ろうと思うと、このような光の吸収が可視光領域に起こらないような分子環境を造りださねばならない。

我々は五個の酸素原子をもつ環状ポリエーテル化合物（分子の形が王冠によく似ているため、クラウンエーテルと呼ばれている）の一つ、15-クラウン-5、を用いて、上述のような分子環境を造りだすことに成功した。一定の条件下で、銅(II)イオンがクラウン環の空孔に入り、15-クラウン-5の五個の酸素原子と結合する。さらに、銅(II)イオンの上下（軸位）に水分子の酸素原子が結合している。したがって、この銅化合物は銅化合物の中では非常に珍しい五角両錘型の構造をとっている。このような独特の分子環境下では、銅化合物の電子状態も特異であり、光によるエネルギー準位間の遷移はちょうど可視光領域に起こらず、それ以外の領域（人間の目で見えない光の領域）に起こる。その結果、無色の銅化合物が得られたわけである。

我々が種々の物理化学的手法を駆使して、この珍しい無色の銅化合物の構造や性質を詳しく研究しているのはなぜだろうか。それは、この化合物が理論的な基礎研究の対象として非常に興味があるばかりでなく、実際にも多くの分野で応用の可能性を秘め

李 勇 (り ゆう)

一九六一年、中国黒竜江省生まれ。愛媛大学理学部修士課程修了。一九九七年五月京都大学論文博士（人間・環境学）。中国清華大学化学系助教



ているからである。たとえば、その特異な電磁氣的性質を生かして、新しい機能性分子や触媒としての応用が考えられる。

生体系での銅の含有量は、遷移金属の中で、鉄と亜鉛について多いことが知られている。銅を含むタンパク質すなわち銅タンパク質は自然界に広く存在し、生体内で重要な酵素作用を有し、電子伝達、酸素運搬、酸化還元及び酸素添加反応などに寄与している。銅タンパク質中の銅は、一般にはその性質によってタイプⅠ、Ⅱ、Ⅲに大きく分類される。そのうち、タイプⅠ銅を含むタンパク質は強い青色を示すため、ブルー銅タンパク質とも呼ばれている。これに対して、タイプⅡ銅は非ブルー銅タンパク質とも呼ばれている。いうまでもなく、上述のような三種の銅タンパク質の性質の違いは銅における分子環境の違いによる電子状態の違いを反映しており、すでに数多く研究されている。しかし、最近では前述三種の銅タンパク質のいずれにも属さない新たな銅タンパク質が発見されている。その電子状態は、むしろ我々の無色銅化合物のものと同じである。したがって、無色銅化合物は新しい銅タンパク質のモデル分子として期待できる。

銅化合物が色をもつことはよく知られているが、この短文から、無色の銅化合物も存在することをわかっていただければ、幸いである。

私たちは、いつも風景の内にいる。風景を離れて私たちの人生はない。ひとまず、このように風景を捉えることが許されるであろう。許されるということが成立するのは、私たち一人一人が「風景」と、その（本質的）核心をいうものとしての「風景なるもの」をともに知っているから、そしてその両者を共有しているからに他ならない。にもかかわらず、私たちはこれらの言葉が指し示す全体を知ってはいない。私たちは、「風景」と「風景なるもの」をともに知っていて知らないのである。

たとえばその字面を見れば、「風」と「景」の組み合わせのなかに、風景が言われているが、そのいずれをも私たちは直接手にすることができない。この風景という言葉が指し示す領域の拡がりには、類義語の多さによっても知られよう。そうした言葉を一覧すれば、まず風光、風土、風水。これらの言葉にあつては、世界を構成する四大（元素）との結合で言われていることに気づかされる。この場合の世界とは、自然あるいは環境と言換えることが可能であり、自然ないし環境に重心がある言葉であると思われる。次に、景観、観光。「景」「光」ともに「ひかり」を意味する。これらにあつては、「見る」という人間の行為と切り離せない、すなわち人間との結合に着目された言葉であると言えるであろう。さらに、けしき（景色、気色）と言換えれば、なんらかの情意に訴える色合いまでも含むようになり、より人間の側にその重心を移すものとなる。類義語の一瞥によって、どれほど

風景に接近し得たかはおくとして、こうしたごく簡単な反省からも、すでに「風景」の所在する場所と、風景という言葉が内包する幅の広さが明らかにされたと思われる。端的に人間と環境の「間」、あるいは自然と人間が出会うところに風景はある。

風景を主題とする論考は、本邦では志賀重昂『日本風景論』を嚆矢とし、文学、文芸評論、哲学が着目し、地理学、社会学、土木工学、衛生工学、そして建築学等々からも考察が加えられつつある。こうした事実が風景の拡がりを証明してもいいように、論考の多くは自然の側か、あるいは人間の側に偏って、その立脚点が定められていると思われる。風景がその全幅において捉えられるためには、そうした風景論が構成されるべきものであるとすれば、すでにそうした試みがみられるように、立脚点は自然と人間の「間」にこそ求められるべきであろう。そしてそこを離れることなく、人間と自然との相互的、かつ循環的な、生々しいかわり合いの出来事を、この「間」の現象として、垂直方向に深化して構造化することによって初めて捉えられるものであると思われる。だがこのためには風景を対象化することなく、論考することが必須条件となろう。考察し論じることが、対象化することなしにありえないのであれば、対象化して表象する考察でありながらも、生きた事象に触れる方が探されねばならない。加えて考察が論、ないし学として成立するための（学的）根拠はどこに求められるのであろうか。

香西克彦（こうざい か
つひこ）

一九五七年、香川県生まれ。一九九七年三月、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。社団法人啓明社研究員。共著に『環境イメージ論』（弘文堂、一九九二年）



それは、すでに冒頭から掴まれていた、人間存在が自然と真向こうで生きるその生々しい「間」に現象する現実、すなわち「生きること」に求められなければならない。立脚点が正しければ根拠もまたそこに源泉するであろうからである。「間」に立ち現れ、立ち退く風景へと、そしてそこから主客二元に別れるその以前へと私たちを導くものに、こうした「間」で内発的に、かつ自覚的に語り出された詩歌という言葉がある。

へ山も庭も動き入るるや夏坐敷 この芭蕉の一句を掲げるだけで十分であろう。ここでは対象化という言葉が意味をなさない。自然と人間は本来一なるものである。一見不合理にも思われるこの事態こそが風景の真（深）相なのであり、詩歌の形式を通してそうした最奥が確かに言い留められている。詩人の確かな言葉を信頼しそれを生き直すこと。それは個々の「風景」と「風景なるもの」の既知・未知の循環する環に飛び込むことを意味するであろう。すなわち解釈学的方法がここでも有効なのである。今ここに、一回起的に個なる私に経験される出来事は、一端アノニマスな始発層に帰着し、そのかぎりでは他者と共有され、さらに私たち各人に共有される経験へと再度自発自展すると言われてよいであろう。

風景は無限定な場の開けに根源する、そうした場の開け——それこそが真の自然であり、私たちが生きている場所にはかならない——を含んで初めて風景が構造化されるのである。

フロンティア ■ 言語と有機体 ■ 斉藤 渉 SHO SAITO

a という状態から b という状態への変化が生じたとしましょう。このような変化を説明しようとする時、我々は変化を変化でないものによって説明してしまう傾向があります。たとえば、「a は b に変化するもの」となるものをすでにもっていたのだ」という具合に。しかしそうすると、a から b への変化は、b をすでに含んでいる a という状態に還元されてしまいます。

大学院進学のころ、私の一番の関心は言語の変化という問題にありました。修士論文でヘルダー（二七四四—一八〇三）の『言語起源論』を扱ったのもそのためです。私は言語起源の問題を、言語がない状態から言語がある状態への変化として考えていました。私の博士論文『W・v・フンボルトの言語論における言語と有機体の類比性について』も、基本的にはこのような問題意識の延長上にあります。

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、言語に関する著作の中で、しばしば言語を有機体に喩えています。つまり、言葉を生き物のように見なしているわけです。たしかに、言葉も生き物と同様、いろいろな意味で変化していくのですから、このような喩えが出てくる理由もわからないではありません。とはいえ、言語が人間の意図とは無関係に姿を変えていくかのような発想はグロテスクに思われますし、変化のもことになるものが（生物の胚のように）その変

化に先立つてすでに存在するという説明では、変化の説明にならないだろうという疑念が残ります。

有機体という比喩を正面から考察する気になったのは、カントの『判断力批判』（一七九〇）を読んだ時でした。この著作で、カントは有機的生命の問題を扱っています。重要なのは、彼がこの問題を認識論的問題、つまり、「我々が生物を生物として認識するとはどういうことか」という問題として考えていた点です。「我々は生物の内に器官形成力を想定しなければならぬが、その力の正体は（さしあたり）我々にはわからない」とカントは考えます。私は、この正体不明かつ不可欠な力という発想に注目しました。言葉の意味を理解する時にも、「その言葉が何らかの意味をもつと想定しなければならぬが、その意味の正体は（さしあたり）わからない」という事態が生じるからです。

フンボルトは、若い頃『判断力批判』を熱心に読んでいます。私は、彼の用いる有機体という比喩から認識論的問題を読み取れるのではないかと思いました。すると、それまでどうもはつきりしなかった彼の発言が、しだいに明瞭になってきたのです。フンボルトが言語を有機体とみなしたのは、言語の変化を説明する試みだと言えるでしょう。しかし、それぞれの言語が「正体不明かつ不可欠な力」なるものを変化に先立

斉藤 渉（さいとう しやう）

一九六八年、東京都生まれ。一九九七年三月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。現在、日本学術振興会特別研究員

（一）一七六七—一八三五。ドイツのフンボルト財団や南米沖のフンボルト海流に名を残すアレクサンダー・フォン・フンボルトの兄。

ってすでにもっていて、それが言語の変化を引き起こすと考えるとき、さまざまな言語が後の時代に経る変遷は（初期条件としての）さまざまな「力」の差異に帰着してしまいます。言語の数だけ「力」の種類を想定すればよいわけです。フンボルトには言語の差異を固定して考える傾向が強いのも、この点から説明が付きまします（有機的生命との類比で言えば、それは生物種は本質的に不変だと考えるのに似ているでしょう）。ところが興味深いことに、言語を産み出す力の正体が我々には（さしあたり）わからないという留保は、事後的にしか経験できないような変化を「説明」しうるのです。これはある意味で、初期条件としての a に含まれないような b という状態への変化を認めることです。私がフンボルトの言語論に注目するのは、このような有機体概念の両義性のためだと言えるでしょう。



フロンティア ■ 理性の有限性 ■ 内藤可夫 YOSHIO NAITOH

私のこれまでの研究は、一九世紀の哲学者ニーチェの思想の現代的な意義を求め、その可能性を探ることです。研究の特徴は、ニーチェの思想をもつば理論的に検討するということです。ニーチェの名前はしばしばさまざまな分野の学者、専門家によって取りあげられますが、彼は第一に哲学者であつて、諸分野への影響からその思想の本質を論じることはできません。ただし、ニーチェの思想の哲学的な意義はすでにさまざまな哲学者によって議論されてきましたが、まだ決定的な解釈もなければ、その意義も確定してはいません。それは、現代という時代が彼の思想を十分に消化していないからであると考えられます（むしろ、ニーチェのアフォリズムという表現方法にも問題がありますが）。このような事情から、ニーチェ研究はその本質を探ることから始めねばなりません。

では、なぜニーチェの思想の本質を捉えることは難しいのでしょうか。ニーチェが求めていたのは、端的に言うならば、「ニヒリズム」によって規定された近代を克服することです。ただし、ニーチェ自身も私たちは近代の内にあります。ですから、その思想のめざしているのは、近代の内から近代を反省するということ、つまり自らをその本質において規定し制約しているものを反省し、その本質的な意義を取り出すということであるということです。ニーチェの思想が難解になったのは、この課題が困

難であつたからであり、それゆえに、私たち自身もニーチェが表現しようとしたことをすぐに理解することができないのだと考えられます。

この課題、すなわち、自己自身を根本で規定しているものを把握することが困難であるということの本質的な意味は、じつは彼の思想の内に語られています。ニーチェは人間存在を主客対立という図式において捉えることを批判し、それが完全に歴史的なものであるということ、言い換えれば、人間は状況の中ではじめてその人間になるということを主張しました。つまり、人間存在は、それがおかれたすべての状況とその状況が成立するに至るまでの歴史（世界のあらゆる生起の歴史）のすべてから切り離すことはできないのです。よって、私たちが知ったり理解したりするあらゆることは、私たちが背負っている歴史的な状況と切り離して考えることはできないということになります。そのとき、私たちは私たち自身を根本で規定している近代という状況を捉えようとしても、「近代的」な仕方では理解できないということになります。つまり、最終的な理解には到達できないということです。

だが一方では、「権力への意志」や「永遠回帰」などの主張によって、ニーチェは近代を脱した思考を獲得した、とする見方もあります。しかし、彼の後期の著述を理論的に吟味していくならば、その思想の根

内藤可夫（ないとう よしお）

一九六六年、岩手県生まれ。一九九七年三月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。現在、京都大学研修員



柢には、人間存在とは理解し思考することに関して決定的に有限であるという認識があることが認められます。ニーチェはこの認識によって、理性への過度の信仰にもとづく（意識されざる）偏狭さから開放され、まったく異なる人間的生のあり方の探究へ向かつていったと考えられます。この人間存在の決定的な有限性の自覚こそが、近代の表面的な制約を克服しようとすることに比較して、より根本的な考え方の転換であり、彼の思想の一つの到達点であると考えられます。

ニーチェの思想の本質的な意味をそこに見出すならば、他のさまざまな主張に新たな意義を見出すことができます。たとえば、彼が古代ギリシア人の生を終生求め続けたことも、そこに現代におけるのとはまったく違った、人間の有限性を自覚した上で営まれていた生のあり方を見出すことができただからであると理解できます。

人間存在が自分では把握したり理解できないものによって根本から規定されているということ、そして人間の理性が徹底的に有限であるということの自覚は、現代においてさまざまな問題を引き起こし、人間自身をも苦しめている理性に対する過剰な信頼、すなわち自然と人間、そしてその歴史に対する畏敬を忘れた不遜な態度に対する根本的な批判として、有効なものではないでしょうか。

動物の脳からヒトの ところを探る

船橋新太郎

SHINTARO FUNAHASHI



1950年、滋賀県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程中途退学。京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科教授。ワーキング・メモリーを手がかりにした前頭連合野の機能の研究を行っている。主な著書に、『脳と意識』（共著、朝倉書店、1997年）、『ブレインサイエンス最前線'96』（共著、講談社、1995年）など。

のような能力を発揮できるようになったのか。脳の働きの秘密を探る研究がさまざまな分野で行われてきたが、いまだその明確な解答はない。

最近、脳の研究に新しい方法が導入され、目覚ましい成果があげられている。一つは、脳研究への分子生物学的手法の適用である。ある特定の機能に関連する分子の存在がわかれば、その分子の分離・同定、構造決定、その遺伝子の染色体上の位置、DNA配列を明らかにできる。最近では、遺伝子の操作も可能になり、ある特定の機能分子を欠損した動物（主としてマウス）を人為的に作成することもできるようになった。これは遺伝子ターゲティング法とか遺伝子ノックアウト法と呼ばれる方法で、ごく最近ではいったんノックアウトした遺伝子を再発現させる方法や、再発現させる時期を調節する方法なども開発されている。このような方法を使えば、特定の精神活動にともなう生成される物質や変化する構造を見つけて出し、これらの物質や構造変化を誘導する要因を分子レベルで明らかにできる。記憶や学習の研究に適用し、そのメカニズムを分子のレベルで理解しようとする試みが世界中で行われている。

もう一つは、非侵襲性の脳活動記録方法が開発されたことである。非侵襲性の脳活動記録としては従来より脳波が用いられているが、これにかわってPET（positron emission tomography）やfMRI（functional magnetic resonance imaging）と呼ばれる方法が開発された。前者は血中に注入した放射性アイソトープの放射活性の変化を、後

者は酸化型・還元型ヘモグロビンの比の変化をもとに、脳内の局所血流量の微小な変化を検出する方法である。ある精神活動を行うと、これに関連する脳内のある領域が興奮する。興奮にはエネルギーが必要のため、細胞の代謝量が増加する。細胞の代謝量が増加すると、それに必要なブドウ糖や酸素の需要が増加し、そのためにその部位を流れる血流量が増加する。そこで、ある精神活動を行っている時の脳血流量を測定し、対照となる状態（たとえば安静状態）での脳血流量を差し引けば、この精神活動時に興奮する脳領域を検出することができるといえるのがこれらの原理である。

初期の頃は、検査課題時の血流量と閉眼、安静時の血流量の差から検査課題関連部位を同定するという方法がとられていたが、最近では目的とする精神活動に類似した対照課題を使った巧妙な実験が行われ、記憶や学習、言語機能、視覚認知、随意運動制御など、さまざまな高次脳機能に参与する領域をヒトの脳で決定する試みがなされてきている。そして、従来より動物実験で詳細に調べられていた脳における機能局在が、ヒトの脳でもおおむね確認されると同時に、ヒト特有の機能である言語に関連する脳領域の研究、視覚や運動のイメージ、暗算や思考、あるいは記憶の想起などといった、動物では実験が不可能な内的な情報処理に注目した研究などが活発に行われている。

このようにしてさまざまな高次脳機能に関連する部位がヒトの脳で決定されるようになり、ヒトの脳における機能局在地図を詳細に記載することができるようになった。

ヒトを他の動物から区別する特徴をあげるようにといわれたら、どのようなものをあげるだろうか。言語の使用をあげる人もいるだろうし、現在われわれが享受している文明を創造したことをあげる人もいるであろう。基本的な体の構造や機能は他の哺乳類や霊長類とほとんど変わらないにもかかわらず、我々ヒトは現代の文化や科学・技術を築き上げることができた。このような能力は、ひとえに我々の体の一器官にすぎない脳の卓越した能力にあると結論できる。どの哺乳類や霊長類もヒトと同じ構造の脳をもつにもかかわらず、なぜヒトでこ

一五〇以上の国や地域を色別に表示した世界地図のように、記憶や学習、言語機能、視覚認知、随意運動制御など、機能ごとに色分けした地図をヒトの脳の上に描けるようになったということは画期的なことである。このような分析をさらに押し進めれば、意識や意志はもちろん、我々のこころの秘密を解き明かす鍵も、機能局在地図上のある部分として記載できるかもしれないと思わせる。

このように、ヒトの脳の活動を非侵襲的に観察する方法が開発され、その成果が積み重ねられてヒトの脳の理解が深まろうとしているが、ことはそれほど容易ではない。非侵襲性の脳活動記録方法で詳細な機能局在地図が作成され、脳のある部位がある機能を担っていることが明らかになったとしても、それぞれの機能がその部位で独立に営まれているとは考えられない。言語機能ひとつを考えても、視覚・聴覚などの知覚機能、発話にともなう運動機能をはじめ、単語や文章、文法の理解や表現など、さまざまな系が複雑に相互作用した結果として生まれるものであり、特定の部位に局限させて考えられるものではない。

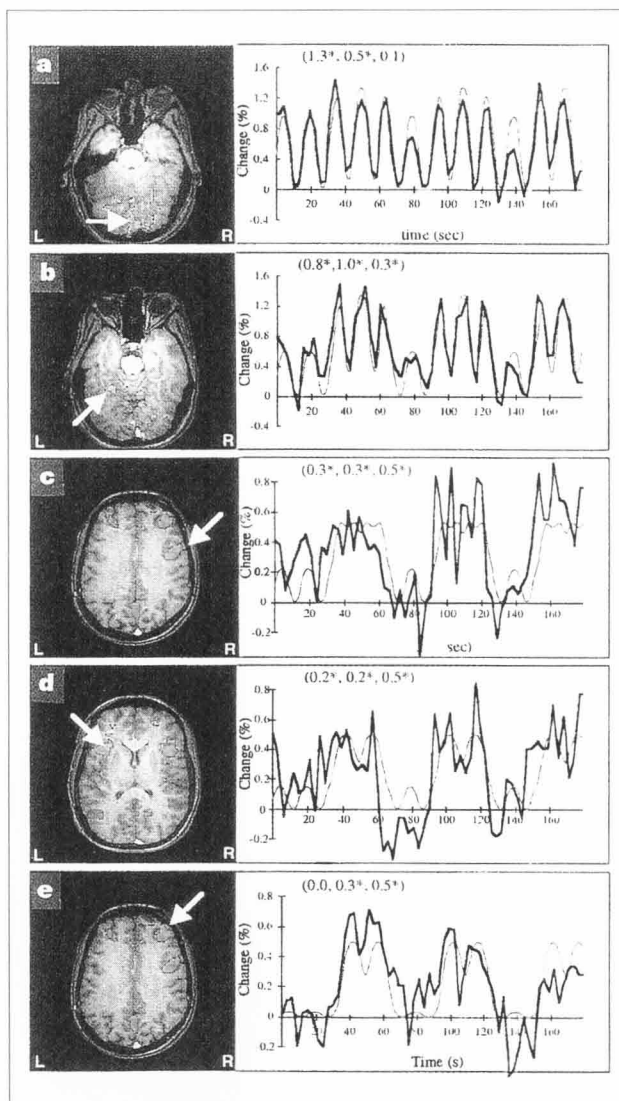
また、たとえ脳のある部位がある機能を担っていることが明らかになったとしても、どのようなメカニズムによりそのような機能が担われ、発現されるのかを理解することはできない。この方法で測定できる項目は、脳のある部位の活動により生じる脳血流量の局所的な変化である。脳のなかには興奮性のニューロンもあれば抑制性のニューロンもあり、他の部位に投射するニュー

ロンもあれば介在ニューロンもある。このようなさまざまな種類のニューロンのミクロな活動の総合を、脳血流量の局所的な変化というマクロな現象としてとらえているわけである。したがって、ある機能に関連して脳のある部位で脳血流量が増加したとしても、その機能と脳部位を結びつけるためには、動物実験によるミクロな研究が不可欠になる。

さらに、脳の機能局在にしろ解剖学的な構成にしろ、そのすべては動物を用いた研究で得られた結果をもとにしたものであり、ヒトの脳で得られた成果はほとんどないに等しい。動物を用いた脳研究により得られている成果も、脳の機能を理解するにはまだほど遠いことを考えると、ヒトの脳の理解もまだまだこれからということになる。

このように考えると、非侵襲的な脳活動

記録法の発展により動物を用いた脳の研究が不要になるところか、ヒトの脳を理解するためにはますます必要になってくると思われる。数年前に京都大学の主催で開催された神経科学に関するシンポジウムの最後に、招待者の一人であるコロンビア大学のキャンデル教授が言ったように、今後の脳研究は、遺伝子操作が可能なマウスを用いた分子生物学的な研究と、霊長類を用いた高次脳機能の研究に二分されることになるのかもしれない。なかでも、記憶や学習、言語機能、視覚認知、随意運動制御など、ヒトに特有な高次脳機能を発現するメカニズムの理解のためには、動物を用いた脳研究が不可欠であると思われる。ヒトのこころのしくみを探るためには、動物の脳の研究が今後とも不可欠なのである。



fMRIを用いて、ワーキング・メモリーに関係する脳部位を調べた研究の例。左図の矢印の部分で有意な血流量の増加が観察されている。右のグラフは、矢印の部分の血流量の時間的な変化のようす(Nature, Vol. 386(1997), p.610より引用)。

私利と公共心

足立幸男

YUKIO ADACHI



1947年、愛知県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。京都大学法学博士。主な著書に『議論の論理』（木鐸社）『政策と価値』（ミネルヴァ書房）『公共政策学入門』（有斐閣）など。

若い頃は小説めいたものを書いたり、頼まれてエッセイを寄稿したこともあるが、元来あまり器用なほうではない。ここでは私の専門の公共政策論の立場から、「介護」政策のあり方についての私見を述べてみたい。

資源配分がどの程度効率的に行われるかによって、経済パフォーマンスは大きく左右される。国民の選好する財（サービス）に私的財（「消費における競争性」および「他者排除の容易性」という二つの属性をもつ財で、市場で取り引きされているものほとんどがそれに該当する）、純粹公共財（防衛、司法など、二つの属性の両方と

もを欠く財）、準公共財（二つの属性のいずれか一方を欠く財、たとえば有料道路）の三種のものがあることは周知の事実であるが、私的財の生産・供給は、市場に委ねるとき、一般に効率的なものとなる。市場には、多種多様な私的財に対する消費者の各々に微妙に異なる選好（各々のものにどれほどの価値を認めるか、どれくらい支払う意思があるか）を全体として最も充足させるよう社会的諸資源を配分するという優れた機能があるからである。だが、外部性、自然独占、情報不均衡などが存在するとき、市場はこの機能を十分に果たすことができない。同様に、準公共財の効率的生産・供給に市場はしばしば失敗する。まして、純粹公共財の生産・供給を市場に期待することはできない。かくして、広範な政府活動が効率性の名において正当化される。

資源配分の効率性に加えて、福祉（健康で文化的な生活の保障）、平等（許容限度を超えた経済的・社会的格差の是正）、社会連帯などもまた、公共政策の設計を導く重要な価値である。そして、その各々が政府活動を要求する。だが、いかなる価値の実現・増進を目的とするのであれ、政府活動はどこまでも最少費用による最大効果の達成をめざすべきである。政府活動の原資のほとんどが国民の血税である以上、浪費は認められない。また、資源利用において政府部門と民間部門は競合関係にあり、しかも資源の有効利用という点で前者の方が後者より一般に劣っていることを考えると、前者の肥大化（過大な資源消費）は資源配分の非効率、ひいては経済パフォーマンス

の悪化を招く恐れがあるからである。

公共政策の設計者が目的達成にとって最も有効な手段（具体的方策）を探索せねばならないことは言うまでもないことだが、この点で留意すべきは、国民の私的・経済的インセンティブに訴える方策の方が、権力的規制よりも、多くの場合、目的達成にいつそう有効だということである。このことは、あるがままの人間の姿を直視しようとする者には、容易に理解できるだろう。私利ほどに強力な行動動機はないのである。しかし、多くの人は、同時にまた、社会全体のために何か有意義なことをしたいとも考えている。そこで、各人が私利にもとづいて行動することが結果として公共的利益になるといふか、人々の公共心を喚起・強化するような工夫が、政策設計者には求められる。エゴイズムではなく公共的観点から公共政策の優劣を判定しようとする国民が多くなればなるほど、公共問題の解決・緩和は一般にいつそう容易になるだろう。

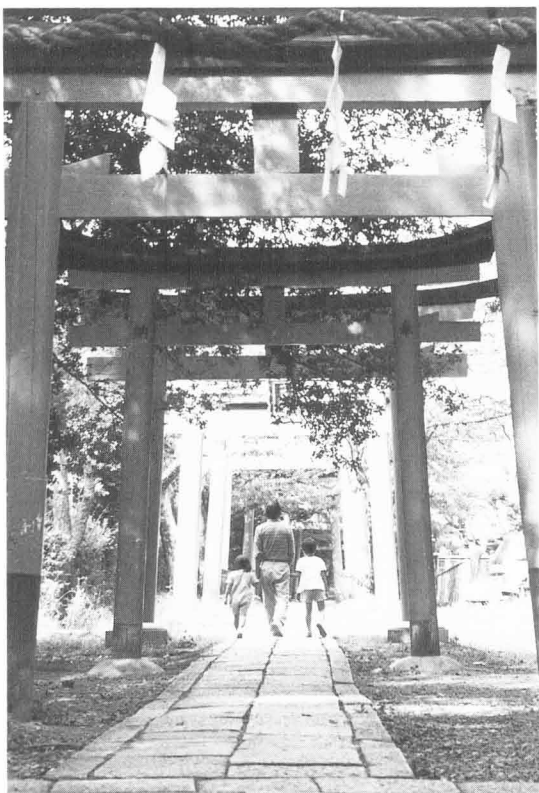
さて、介護サービスはまぎれもなく上述の二つの属性を備えた私的財であり、したがってその供給は基本的に民間部門（企業、ボランティア・アソシエーション、家族など）に委ねることが望ましい。ただ、そうした場合、面倒を見てくれる家族がいなかったり、十分な蓄えをもっていない人は、介護サービスを受けられないことになりかねない。これは、憲法の定める生存権保障に抵触するゆゆしい問題である。姥捨て山さながらに、多くの要介護者が「遺棄」されるような国は文化国家とは言えない。政府は、最低限の介護の保障を自らの責務と

して引き受けなければならない。

問題は、その原資をどうやって調達し、サービスをどのように分配するかである。産業・就業構造の変化、ライフスタイルの多様化に伴い、保険業務が今日さまざまな困難（事業の不透明性、行政事務の複雑化、政府補助の急増など）に直面していることを考えると、保険によってその原資を賄おうとする方法には難点がある。費用負担の公平性という点からも、目的税（消費税）の方がよい。他方、分配のあり方としては、要介護者（や、その家族）のすべてにパウチャーを給付し、それをどう使うかの判断（ボランティアへの謝礼、企業等が提供するプロフェッショナルなサービスの購入のたしにする、家族で介護しパウチャーを換金する……）を当事者に任せ、選択の自由を拡大することが望ましい。

介護ボランティア活動に参加した者には、

その実績に応じて、税を還付したり、パウチャーの給付額を上積みしてはどうか。その結果、それほど専門的な知識や技能を要しない介護の相当部分をボランティアで賄えるようになれば、国民の税負担はその分だけ軽減される。そもその動機が私利であつたとしても、介護ボランティア活動に参加するうちに、社会共通の問題として介護を考えるようになるのではないか。また、そうした経験を通して、介護のプロフェッショナルとして生計を立てようとする者が増えれば、それはそれでたいへん結構なことである。一人でも多くの国民がボランティア活動に参加したくなるような環境を一日でも早く整備しないと、わが国は未曾有の人口高齢化を乗り切れないのではない。公共倫理を説教することも大切だが、それだけでは不十分。制度のあり方こそが問われるのである。



平安京は「パンドラの箱」?!

西山良平（京大文学部・同大学院人間環境学専攻）

京都市の中央部（上京区・中京区・下京区、右京区の東部）は、かつての平安京の範囲にある。平安京の東西の中軸は朱雀大路で、現在の千本通に相当する。一〇世紀以降、平安京の右京は衰退し、やつと近代以後に都市化する中で、かえって平安京の遺構は保存が良好である。右京一条三坊九町（京都府立山城高校）や右京六条一坊五町（京都リサーチ・パーク）では、九世紀の貴族邸宅が検出された。とくに、後者の建物配置は「寝殿造」に類似し、その先駆と評価できるという（『平安京提要』）。しかし、右京は一〇世紀に衰退するので、平安中期の「典型的」な「寝殿造」は期待できない。平安中期の「寝殿造」は、平安京左京のおそらく六条以北にのみ造営されたしかし、その遺構は中世や近世・近代の都市生活の発展とともに消滅し、発見の可能性は稀少であった。

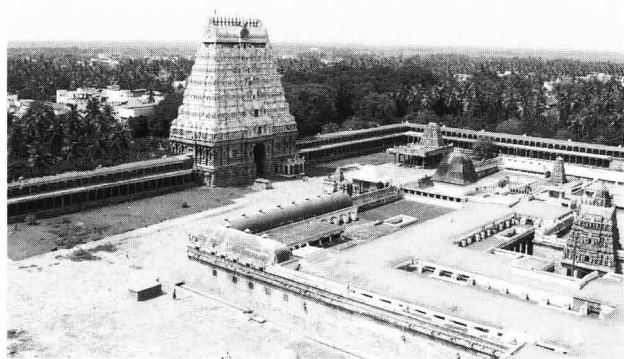
ところが、今年の四月二十九日、新聞紙上に「平安の栄華、高陽院発見」「建物跡は初めて」の文字が躍った。高陽院は左京二条二坊九・一〇・一五・一六町にあり、藤原頼通の邸第で、一〇二一年に落成する。礎石（柱の基礎の石）一個とその北西コーナーの雨落溝が検出され、「寝殿造」の西対などの可能性があり、池跡も発見された（『朝日新聞』『読売新聞』『産経新聞』四月二十九日、『京都新聞』五月一日）。堀川丸太町の交差点の東北角である。幻の「寝殿造」がついに我々の眼前に出現した。これは画期的な事件である。しかし、残念ながら、この遺構は建築工事のため消滅した。幻の「寝殿造」はまた幻となってしまった。高陽院の発掘調査では、すでに広大な苑池の一部が検出された（『平安京提要』）。高陽院の遺構はなお地中に存在する可能性が高い。平安京の左京で、平安中期の「寝殿造」がこれ以外に遺存する確率は僅少である。高陽院の今後の発掘調査が大いに期待される。

神の食事と人の食事

——南インドの寺院調査から——

田中雅一

MASAKAZU TANAKA



ナタラージャ寺院——写真中央の丸い屋根の建造物が台所

わたしはヒンドゥー社会を対象に、これまで二つの場所を主要な調査地としてきた。一つは一九八二年六月から翌年一月までの一年半の間に行ったスリランカのタミル漁村での調査、もう一つは一九八八年より断続的に行なっている南インドのチダンバラムにあるナタラージャ寺院の調査である。チダンバラムは、タミルナードウの州都であるマドラスより南に二五〇キロほど下ったところにある小さな町である。以下ではナタラージャ寺院の日々の礼拝で用意され



る神への供物と司祭の日常食を比較してみたい。

ナタラージャ寺院での供物

供物は神々の食事であるという点で清浄でなければならぬ。それは清浄な場所ので清浄な状態にある人によって準備されなければならない。台所は神像が安置されている内陣とともに最も清浄な場所とされており、不浄な人々が入ることができない。ナタラージャ寺院のような格式の高い寺院では、ブラーマン（バラモン）・カーストに属する専門的な料理人が供物の準備をする。鍋などの食器道具などを洗う女性がいるが、女性はいかなるカーストでも台所に入ることはできない。

ナタラージャ寺院の場合、神事を司るデイクシタル・ブラーマンより少し地位の低いヴァダマー・ブラーマンが料理人として雇われている。ここで毎日料理される大量の御飯（二〇〇キロの御飯とバターから作ったギー油、ゴマ油を混ぜたサンバー）は、昼夜デイクシタルの食事として分配されることから、供物の料理人は司祭たちの料理人でもある。司祭たちは、これに家の女性の作るオカズ（各種の野菜カレー）を足して食事とする。

寺院の本尊ナタラージャ（シヴァ）神に

田中雅一（たなか まさかず）
一九五五年、和歌山県生まれ。ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス博士課程修了（人類学）。京都大学人文科学研究所、同大学院人間・環境学研究科助教授。南アジアを中心とする宗教と社会の文化人類学的研究に従事。著書に「Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka. (Manohar) がある。」

は目覚めの儀礼を除いて日に六回の儀礼が行われる。これらの礼拝での供物の特徴は上述のサンバーと混ぜご飯である。混ぜご飯はタイル・サーダム（ヨーグルトを混ぜた御飯）、プリ・サーダム（ギー油や阿魏、タマリンドを混ぜた御飯）、牛乳で炊いた砂糖入りの御飯（サツカレイ・ボンガル）、砂糖の入っていないヴェン・ボンガル、テインガリー・サーダム（ココヤシの果肉の混ざった御飯）、パール・サーダム（御飯に牛乳と砂糖とを混ぜた物、干しブドウを入れることもある）などである。祭りにはさらに油であげたお菓子が特別に供えられる。

司祭たちの日常食

朝食や夕食では、米粉とクロレンズ豆の粉を丸めて一晩おいて発酵させたものをベイスとし、これを蒸したイデイリ、類似の材料を薄くのばして焼いたドーサイ、ボンガル（牛乳で炊いた御飯）などが一般的である。

司祭たちは、昼前三回目の礼拝が終わると、寺院の台所でサンバーを受け取り帰宅する。家ではサンバーと家で用意した野菜カレーを食べる。四時頃にコーヒーを飲む。夜は朝と同じ軽い食事をする。

特別の場合を除くと、昼食が主要な食事

である。食事はバナナの葉を床に敷いて、その前にあぐらをかいて座る。まず、飲料水をすこし右手ですくって、これをバナナの葉にふりかける。そして表面を掌でこすってきれいにする。その所作を見てから、給仕役の女性が御飯をよそう。この時、副食の野菜カレー、ピクルス、塩なども盛られる。足りないときはいつでもおかわりが可能だ。御飯にかけるカレーやスープ類は食べる順によそわれる。食事は右手を使って、直接食べる。大きな具をちぎったりするのすべて右手の指だけで行う。歯でちぎるのは無作法である。

少量の混ぜ御飯（ライム・サーダムやテインガイ・サーダム）がつくこともある。これは最初に食べる。

白御飯（ソールあるいはサーダム）にかけて食べるものは、大きく二種類に分かれる。一つは数種類の野菜を炊いたり炒めたもので、これらのオカズはいつでも御飯と一緒に混ぜて食べたり、それだけで食べることができる。

もう一つは、手で御飯に混ぜて食べる「カレー」あるいはスープで、これにはかける順番がある。味の薄いパルプ（豆をどろどろに煮たもの）、サンバルというよく煮込んだハト豆のスープにやや大きめに切ったトマトや茄子を入れたカレー、かわりにプリ・クランブというタマリンドの木の汁をベースにしたやや辛目の玉葱カレーやヨーグルトの上澄み（モール）をベースにしたモール・クランブというカレーをか

ける。この後、ラッサムというタマリンドの汁で酸味のある粒胡椒入りスープを御飯にかける。これにはトマトなども入っている。それからヨーグルトを御飯と混ぜて食べる。ヨーグルトのかわりにモールだけのこともある。

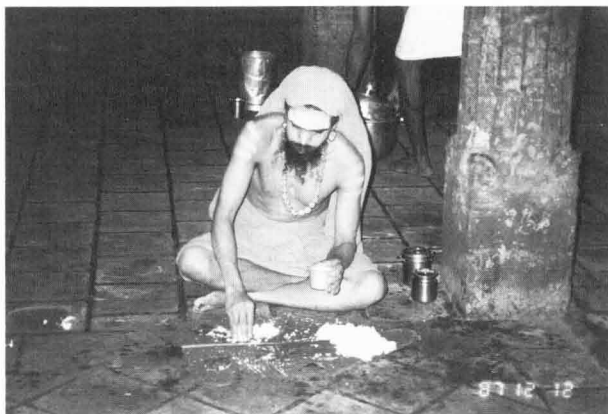
食べ終わったら手を洗い、口を濯ぐ。

比較

日常の食事と比べると、寺院での供物の特色は御飯類の多様さである。これらはそのままオカズなしに食べることができる。しかし、ポンガルを除くと、日常食では、たとえばピラフのように混ぜ御飯を主食として食べることはない。とくにサンバルは家庭で料理されないし、食堂などのメニューにも見かけない。サンバルはシヴァの好物として知られており、日常食というよりはもともと神の食事という意味合いが強い。さらにナタラージャ寺院では通常の白御飯が供えられないという点にも注目したい。構造的な視点からまとめると、神々と人間との食事の相異は、神事に関わるハレの世界とそうでないケの世界の断絶を効果的に示している。そして両者の媒介者たる司祭は、二種類の食事を日常的に楽しむことができるのである。

追記

本研究は、平成五年度（一九九三年度）味の素食文化研究助成金によって可能となったことをここに記して感謝の意を表したい。また調査地においてお世話になったディークシタル司祭たちの協力に感謝する。なおナタラージャ寺院の概略および組織について、詳しくは拙著「南インドの寺院組織と司祭たち——自立への志向と相互依存」（井狩・長野編『インドⅡ複合文化の構造』法蔵館、一九九三年）を参考にしてほしい。



モールをかけて食事をする聖者

中国の少数民族トン族における風水思想の受容

兼重 努

TSUTOMU KANESHIGE



風雨橋にカルチャー・ショック

日本人が一般にもつ、橋のイメージとは「渡る」ことを主要な機能とする交通施設であるといつてよいであろう。

ところが、中国の少数民族トン族は、中国語で「フオンイーチャオ」(風雨橋)とよばれる屋根つきの橋を数多くつくる。その風雨橋の内部には、腰掛けが設置しており、休息や雨宿りや納涼ができ、社交の場ともなる。さらに橋の中には、関聖帝、岳公などの道教系の神がまつられている。

一方、風雨橋のなかには、川を渡るのにも人びとが集まるのにも不便な、変な場所に建てられている橋も多い。そのような橋は、たいがい集落より下流に架けられ、中には一キロも下流に架けられている橋もある。そのほか、川や溝もない所に「架かる」屋根つきの「橋」も存在し、それを中国語で「ハンチャオ」(旱橋)とよぶ。こうした旱橋のなかには、「渡る」という機能をまったくもっていないものもある。

中華人民共和国は、人口の九二%を占める圧倒的多数の漢民族と合計九千万人あまりの五五の少数民族から構成される多民族国家である。私が調査をしたトン族は、主に西南中国の貴州省、湖南省、広西壮族自治区に住むタイ系民族で、主に水稻耕作を

営み、人口は、一九九〇年の統計によると、二五一人ほどである。彼らの社会には、風雨橋のほかに「クローウ」(鼓楼)という塔状の集会所が数多くみられる。

調査をすすめるにつれて、不思議な橋の背景には「風水思想」があることがわかってきた。風水研究で著名な渡邊欣雄氏は、風水を「気によって広義の気候現象(気象)が生じ、それが環境条件の良し悪しにより、人間生活に吉凶禍福をともなつて作用・影響するという思想」と要約する^{*}。風水思想では、気が理想的に作用する地形や自然環境をもつ場所をいかにみつめるかということが重要になってくる。ところが現実には、完璧に理想的な場所をみつめるのは困難である。そうした際に、なにか造営物をたてたり、植林をしたりして、補正や調節をするといわれる。

こうした気の原理による風水からみると、川の水にそって流れ去ると信じられている気をくいとめ、村に残すためには、橋は集落より下流側につくられる必要がある。その橋に屋根をつけ、背を高くすることにより、流れ去るよい気をせき止めるのに役だつといわれる。同じように旱橋は、水の流れない場所において、よい気を村から逃さない働きをしている。

こうした気の原理によらず、地形を人や

兼重 努(かねしげ つとむ)
一九六二年、山口県生まれ。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程在籍中。西南中国の少数民族文化の研究のため、一九九四年より一九九六年までの二年間、中華人民共和国の広西壮族自治区社会科学院に留学し、トン族の村にて現地調査を行う。



程陽橋：トン族の代表的な風雨橋、国家の重要文化財に指定されている

動物あるいは物に見たてることによる吉凶判断もある。「船」に見たてられているA村と、淡水に棲む貝である「タニシ」に見たてられているB村が、川を挟んで向いあっている。両岸をつなぐ橋の建設にB村は以前から猛烈に反対してきた。B村にとって、両岸をつなぐ橋は、B村という「タニシ」の殻をつき破ってしまう凶器とみなされ、彼らの生存を脅かすものなのだ。結局、橋のB村側の部分を切断して、すき間を設け、B村に橋を接触させないよう処置する

ことで、B村は妥協した。

入試合格のために鼓楼をたてる

鼓楼も、風水思想と関係が深い。C村は、最近新しい鼓楼をたてた。新鼓楼をたてる以前は、高校や師範学校などに、C村は一人の合格者も出していなかった。その原因はC村全体の風水がよくないからだ。集落の外れの溪流の湾曲部の傍に鼓楼を建て、そこで溪流を流れ下るよい気を象徴的にせきとめることにした。その鼓楼をつくる際に用いた材木の寸法は、鲁班尺という大工の秘密の物差しを、官僚を意味する「官」の目盛にあわせて決めた。すぐにも翌年にはC村から五人も合格者が出た。中国では大学生は今でも、科擧の合格者になぞらえられることがある。トン族が入試合格を重視しているのは、彼らも官僚主義的中国社会に組み込まれてきたからだ。

重要視される墓地

風水理論では、墓の位置や向きも重要視される。私は、トン族の村で何度か「おまえが中国に留学に来ることができたのは、おまえの父方のじいさんの墓（の位置）が良いからだ」と言われたことがある。「よい風水のところは父や祖父の遺体を葬ると、死人はあの世での生活が良くなり、この世の我々を助けてくれる。死人がああ世で貧乏になれば、この世の我々を助ける余裕もないのだ」と村びとは話してくれた。

理想的な墓地は、きわめて稀である。墓

を作つてはならないとされる、村全体にかかわる風水の要の場所に、特定の個人が密かに遺体を埋葬し、よい風水を「盗む」という事件が以前発生した。その際多くの村の子どもが死んだ、という話もきいた。

トン族の運命論的風水観

中国における少数民族の文化は、漢民族の文化と無関係ではなく、大なり小なりその影響をうけている。これを「漢化」という。風水思想は、漢民族文化に発し、江西学派と福建学派に大別され、中国華南地方で発展してきたといわれる。こうした点からみると、風水は少数民族の漢化の実態を具体的に検証する指標になりうる。私は、調査の体験をとおして、風水思想は、トン族にとってもたいへん身近なものであり、彼らの社会や文化を研究してゆく際に、避けて通れないものであると痛感した。

風水理論は、一般にきわめて機械論的な因果関係にもとづくものだといわれている。しかし、よくよく吟味してみるとトン族の風水観を単なる機械論では説明できないことがわかった。トン族は「福地は福人を待つ」という。いくら風水がよくても、人がそれをうける運命をもっていなければ、よい効果は得られない。人の運命の前では、風水は絶対的なものではないのだ、と考えられている。

こうした彼らの運命論的な風水観は、きわめて限られた風水のよい場所に対する限りない争奪戦の発生を抑制する働きをして

いる、と考えることができる。

中国は、広大で地域差も大きく、また民族もすこぶる多い。風水思想は、そうした多様な地域と民族の歴史をふまえて、さまざまに展開していったものと思われる。

* 渡邊欣雄「いまに生きる風水思想」曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編『暮らしがわかるアジア読本中国』（河出書房新社、一九九五年）一九四頁。



入試合格のためにつくられた新しい鼓楼の落成の日の様子

民俗知識で彩られる魚

——沖縄県糸満の伝統的魚販売にみられる価値世界——

川端 牧

MAKI KAWABATA



沖縄の魚は極彩色である。体長約一メートルの真紅のアカマチ（ハマダイ）をおばさんがさばくと、桜の花びらのようなイリキ（鱗）がとぶ。

沖縄県糸満では、女性が魚を売る姿が多くみられる。沖縄方言で母さんのことを「アンマー」とよぶが、「糸満アンマー」といえば魚売りの女性の代名詞でもある。私は糸満のアンマーたちが営む伝統的魚販売について、一九九六年二月から翌年四月まで通算約六カ月にわたり、フィールド調査をおこなった。

糸満は琉球王朝の時代から、漁撈集落として名をはせた。糸満の「ウミンチュ（海人）」は、第二次世界大戦前までの一時期に東南アジアの海にまで進出したほどの、名うての漁民である。そのウミンチュである夫や父、兄弟の魚を売り、強固な経済的基盤を築いたのが、アンマーたちであった。しかし、現在の糸満ではセリが導入され、直接、夫や父のとった魚を売るアンマーはまれである。また、かつて主流であった行商は、ほとんどみられず、多くのアンマーは、サシミヤ（鮮魚店）における魚販売をおこなっている。

アンマーの魚売り

トゥクヤーのオバー（おばあさん）は、

現在の糸満でただ一人、本格的な行商をするアンマーである。トゥクヤーとは屋号であるが、オバーの呼び名となっている。一九九六年の五月現在、オバーは満八〇才であった。魚を入れたバーク（かご）を、誰かに手伝ってもらって頭にのせる。頭とバークの間には、新聞紙でつくったクッション、「ガンシナ」がある。頭にのせると、不思議なことに小さなオバーが楽々と重いバークを運ぶことができる。

オバーは、まっすぐに伸びた背中をとんとんとたたきながら、独特のリズムで歩く。「この道が近いさあ」と言いながら、他人の家のガレージを突っ切る。一軒目の家では、マグロがたくさん売れた。オバーは、出されたお茶と菓子を食べ、友人でもある買い手のオバーとひとしきり話す。二軒目の家では、ブルーマチ（ヒメダイ）が売れた。オバーは、ガレージにまな板をおくと、魚をさばく。数件目の家ではこう聞かれた。「アマクチシルユー（サザナミダイ）はないね？熱が出て困ってる人がいるわけさ」。シルユーとよばれるタイの仲間が沖縄では熱冷ましになるといわれ、「クスイムン（薬になるもの）」の一つなのである。行く先々でユンタク（おしゃべり）をしながらの魚売りで、一〇時半から売りはじめ、売り切ったのは四時であった。

川端 牧（かわばた まき）
一九七二年、兵庫県生まれ。現在、京都大学大学院人間・環境学専攻博士後期課程在籍中。沖縄県糸満の伝統的魚販売について修士論文をまとめた。漁撈社会を対象として、民俗知識に関する研究をおこなっている。

「糸満の魚」をつくりだすアンマーたち

行商にかぎらず、対面販売が基本となるアンマーの魚売りでは、買い手とアンマーとの間で、つねに会話が交わされる。魚の専門家であるアンマーは、自らの経験と先人たちから学んだ豊かな魚についての知識を持ち、的確に魚の質をみきわめ、買い手にとって有益なアドバイスを与えることができる。たとえばアバサー（ハリセンボン）を前にして、こんな会話が交わされた。

「アバサーはクスイムン（薬になるもの）さ」と、アンマーが言う。「何に効くの」。「サギグスリ（下げる薬、チブル（頭）下げるよ）」「便秘にも効くかな」「効くんじやない」。また、アバサーを買った客に食べ方のアドバイスをする。「フーチバ（よもぎ）入れるんだよ」。

糸満では、魚について豊かな民俗知識が培われてきた。魚種を表す方言名は、私が把握しているだけで二〇〇をこえ、それぞれの魚についてくわしい知識が共有されている。たとえば、クスイムンである一八種類（魚介類）についてアンマーの知識を採集したが、その効能は多岐にわたり、一種類の魚に一一の効能がある場合もある。

アンマーは、クスイムンや、魚のおいしい時期や、食べ方などについて、民俗知識



アンマーの伝統的な魚運搬法

を用いた語りをする。そのことによって、魚は、糸満の民俗社会における価値体系にとりこまれる。つまり、アンマーによってその質を吟味され、民俗知識にもとづく語りをなされることによって、魚は生物としての魚から、「糸満の魚」に転換されるのである。

魚の価値の変化と民俗知識

アンマーたちが用いる知識は、生活や社会の変化にもなつて、活性化されたり忘れられたりする。

現在、マグロは糸満において日常的な魚であるが、フカ（サメ）は、ほとんど海に捨てられる。マグロについては、「キハダ（キハダマグロ）」、「メバチ（メバチマグロ）」などの魚種名が、ほとんどのアンマーに認知されているが、フカの魚種名をいえる人

はほとんどいない。しかし戦前、貴重とされたのはフカであり、捨てられたのはマグロであった。当時フカは、「ナカー（ハナザメ）」、「カマンタサバ（ミナミサカタザメ）」などと魚種レベルの方言名でよばれていたが、マグロは一括して「スビ」とよばれていただけであった。現在、マグロが和名をもとにした名称でよばれていることは、マグロの魚種が近年になって認識されたことを示唆している。

魚名だけではない。フカの利用についての知識は、今では忘れられつつあるが、マグロは戦後のセリ導入をきっかけに、糸満においても価値が認められるようになり、新しい知識がたくさんうみだされた。この知識の変化に、アンマーたちはどのようににかかわってきたのだろうか。

アンマーたちは、ここ一〇年の間にマグロを漁法によって評価する知識を身につけた。「このマグロはパヤオ漁でとられたものだから、変色しやすいけど味があるさあ」と語ることで、マグロについての新しい評価基準が買い手に示される。つまりアンマーは、自らの手で、積極的に知識をつくりだしているのである。

急速な社会変化の進む糸満において、「魚の専門家」であるアンマーは、海と糸満のくらしをつなぐ、数少ない架け橋である。そのにぎやかな魚販売において、アンマーたちは、民俗知識を自由にあやつり、魚を糸満独自の色彩に染めあげている。



細やかな目で魚を見立てるアンマーたち（糸満の市場で）。

時間の文学的再構成

木村 崇 TAKASHI KIMURA



木村 崇（きむら たかし）
一九四四年、旧満州生まれ。東京外国語大学大学院修士課程修了。
京都大学総合人間学部、同大学院人間・環境学研究科教授。ロシア
文学や、日本との比較を含むロシア文化論を中心に研究。主な
著作に『ロシア文学を学ぶ人のために』（世界思想社、共著、一九九六
年）、『注釈漂流記』（京大人文研、共著、一九九六年）、『一葉亭が
用いたツルゲーネフ作品集』（岩波書店、季刊『文学』第八巻、第二
号所収、一九九七年）など。

時間を自由に組替えられることは、文学の特権であろうと思う。物理的客観世界では人間は時間に完全に従属させられているが、意識の世界ではだれでも過去や未来に移行できる。文学は現実に人間が生きている様相を模倣するので、小説中の時間も時間軸上を前後自由に往来する。柳美里の『フルハウス』の冒頭部分を例に見てみよう。

父はなぜ玄関に私たちを待たせておいて勝手口から入ったのだろう、新築したばかりの家の主として家族を迎え入れたかったからだろうか。二十数年前、横浜の西区に引越した直後、母に唆^{そそのか}されて買ったこの百坪の土地に、「家を建てる」というのが父の口癖だった。私と妹は母が家族を棄てて家を出た十六年前からその計画を聞かせられつづけた。そして父が鉛筆で描いた稚拙な設計図は去年の春頃から現実味を帯び、それでも建つことはあるまいと高を括っていた私たちを後目に、つい一カ月前に完成したのだ。水っぽく、地鎮祭でたったひとり首を垂れている父の姿が浮かんだ。

小説中では語りの現在時点が否応なく推移していくが、ここでは父の姿が見えなくなった時点の現在をポーズさせて考えよう。語り手である私にとってこの現在には、「横浜の西区に引越した直後」という遠い過去、「母が家族を棄てて家を出た十六年前」というその次に遠い過去、父が稚拙な設計図を書き始めた「去年の春頃」という近過去、家が完成した一カ月前という至近過去が併存している。そして過去の各時点には「家を建てる」という父の、その時点の意志未来が交差し、また「建つことはあるまい」と考えた語り手の、近過去時点での推量未来が重なる。記憶がほとんど保てなくなる特殊な病があるというが、その人はけっしてこの語り手のように「現在」を生きることはできないにちがいない。混入してくる過去や未来がなく、ただ「今・今・今……」と現在が生成消滅するだけなら、「水っぽい憐れむような感情がふいに沸き立」つこともないし、「地鎮祭でたったひとり首を垂れている父の姿が浮か」びもしないはずである。理由もなく父が姿を消したと思っただけで途方にくれるだけであろう。小説において文学が成り立つだろうか。



ロシア文学の父といわれるプーシキン（1799～1837）の男系最後の末裔とともに。昨年の「プーシキンとチェーホフ」国際学会にて。

果は脳内に小分けされて蓄えられるのだが、それを文字によってファイル化すれば、時間も同時に閉じ込められる。日記、手紙、講義録、覚え書き、報告書、調書、始末書、稟議書、証明書、契約書等々、およそ人間が書くものには、作成された時が自動的に刻印されてしまう。文学は、そのようなファイルを適当に並べ替えることによって、時間そのものを組み替えてしまおうと試みる。もちろんここでいう時間は、いわばコ



毎年6月はじめ、プーシキンの誕生日頃に詩人の墓前で行われる追善供養。

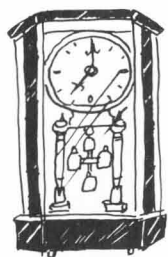
ピーであって、書記時に実在した時間はすでに過去のかたに流れ去っている。しかし、生きている人間にとって大切なのはむしろ各ファイルに固着した時間のほうなのである。その並べ替えられた時間順序を筋の展開上の「正順」にしてしまうところに、文学の根源的志向が働いている。

ロマン主義文学はこの時間操作のおもしろさにすっかりハマった。一九世紀はじめのロシア文学にも、おびただしいほど、偶然入手した日記や手紙、他人の原稿などが登場する。しかも判で押したように、あれこれもつともし理由をつけてそれらの断片を提示するだけで、読者に内容を明かそうとはしない。そのうえ時間系を無視した配置替えを行う。これまでの研究では、これについてはロマン主義の「謎好み」という、同義反復的な説明ですませてきた。しかし私には、それが文学の存在論的本質に根ざしているように思えてならない。文学は現実の人間生活の単純な模倣では決して満足しないのである。

婚約中の女性に別に恋人がいて、夫となる男のことをあれこれ書いた数通の手紙を出していたとする。作家がそれを逐次描写するなら、読者はその順序で三人の関係を認識していくことになる。しかし、妻の遺品から、かつて恋人にあてた書きかけの手紙が見つかり、その数通の手紙の存在を知ったという描写から小説が始まったとしたらどうであろう。しかも、手紙は発見されるものの、日付の順序どおりではなかったとしたら。読者は作中人物の心境を追認しつつ、組み替えられた新しい時間の世界を

生きることになるだろう。

文学では、このように叙述の順と実際の時間の経緯をズラすだけでなく、時間の空白を積極的に取り入れる。もともと文学には、時間の切れ目なしに状況をベッタリ描写しきることなどとうていできないのだが、その「欠陥」をむしろポジティブな手段に変えてしまうのである。描写のなかの余白は、行間を読むという努力を読者に強いる。時間の空白はさらに読者の想像力をかきたてずにはおかぬ。数年前にベストセラーとなった『マディソン郡の橋』は、文字通りの意味で通俗小説なのだけれど、ロマン主義以来、文学史上開発されたさまざまな時間操作の手法を駆使している。メロドラマにすぎないことが見えにくいのは、述べたような手法を一見さりげなく、しかしじつはたっぷりと利用しているためである。アメリカや日本の広い読者層が、もう少しロシア文学に親しんでいたなら、あの程度の作家を大富豪にすることはなかったはずなのだが。



トイレ考古学事始め

松井 章

AKIRA MATSUI

松井 章（まつい あきら）
一九五二年、大阪府堺市生まれ。東北大学文学部卒業。考古学専攻。
奈良国立文化財研究所主任研究官、京都大学大学院人間・環境学研
究科客員助教授。専門は、考古学を通じた生業史研究、食生活史、
動物文化史など。

日本考古学とトイレ遺構

不思議なことに、一九九一年までの日本の遺跡でトイレが発見されていたのはごくわずかであった。全国では年間一万件にも上る遺跡が発掘され、さまざまな新発見がマスコミを賑わしているが、それにもかかわらずトイレ遺構はさわめて少なかった。その理由として日本では環境考古学が充分に根付いておらず、実際にトイレを実証するための方法論を欠いていたことが挙げられる。

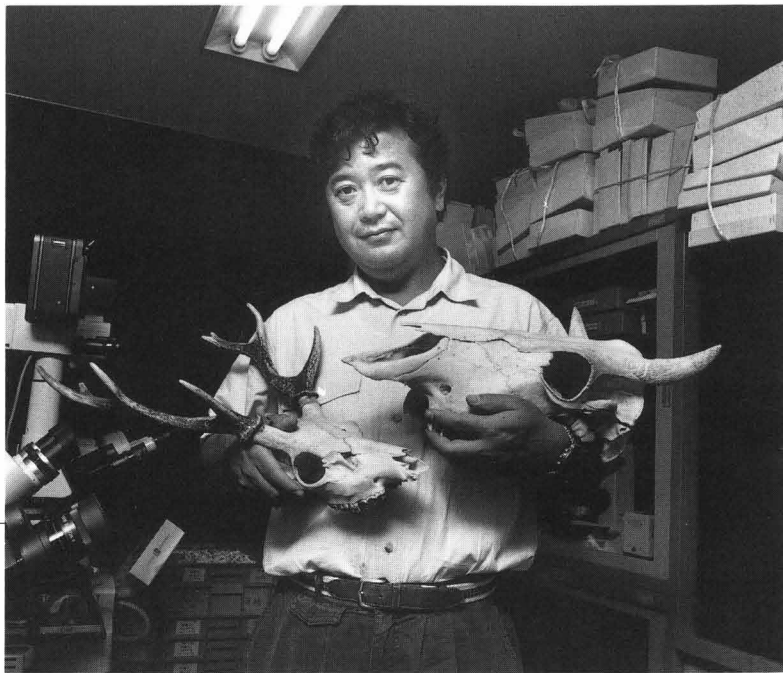
発掘で一番多い遺構が「土坑^{どこう}」である。これは「穴」という言葉を、難しく言いかえたに過ぎない。不思議なもので、考古学者にとって「土坑」と言い慣れてみると、それだけで機能がわかったという錯覚に陥ることが少なくない。この錯覚のために、「土坑」の機能に関する研究が立ち遅れていたことは否めない。こうした無数といつてよい土坑の中に、トイレも含まれていたのである。

例外的にトイレ遺構とわかったのは、埋土の中にウリの種、籾^ひ木^き、ハエの囲蛹^{いぶどう}などが見えたからトイレと判明したのである。籾木^{ひぎ}というの、民俗学では、「糞^{ふん}ペラ」

と呼ばれ、戦後しばらくたっても紙が普及するまで各地で使われていたから、年輩の人ならすぐにそれとわかったのである。さらに朝倉氏館跡では、石組みの土坑の中に、木製の金隠しまで落ち込んでいたのである。では、どうして他の遺跡ではトイレが見つかっていなかったのだろうか。それは、日本の国土の広くを火山灰性の酸性土壌が覆い、土中では「有機遺物」と呼ばれている動物性や植物性の遺物はほとんど残らないからであった。糞便もただの土に帰ってしまえば肉眼では見分けがつかなかったのである。

糞石研究との出会い

私は、東北大学文学部に提出した卒業論文の題目に、縄文時代の貝塚に含まれる動物遺存体から食生活を明らかにすることを選んだ。そして大学院の時に、ネブラスカ州立大学で人類学を学ぶことができた。留学の目的は、アメリカで人類学の一分野としての考古学の理論を学ぶことと動物遺存体の研究法であった。その時の友人にマーク・スタイガー君がいた。彼の専門が、北アメリカ南西部に分布するブエプロ・インディアン^{ブエプロ・イン}の遺跡出土の「糞石^{ふんせき}」の研究であ



った。薬品で糞石を分解してマメやトウモロコシなど、彼らの食べていた食物を顕微鏡で同定する作業は、とても面白く、日本でも糞石が出土するので、いつか糞石の研究にも手をつけて見ようと思った。

- (1) ちゅうぎ 割り箸を割る前のような偏平な木の箸（へら）
- (2) いよう 蛹の抜け殻
- (3) Coprolite

トイレ土壌の分析法

一九八九年には、文部省の在外研究員としてロンドンの自然史博物館に派遣された。そのとき、環境考古学でめざましい成果を挙げているヨーク大学のアンドリユー・ジョーンズさんが遺跡から出土する魚類の骨を専門としており、話を聞くために会いにかけた。そこで彼から思いがけない成果について聞くことになった。それは、地下水位の高いヨークで検出されたヴァイキング時代の土坑の中に、木製の便座と柳の小枝で編んだ目隠しの衝立が落ち込んでいた例があり、その埋土を調べたところ、花粉や胞子に混じって鞭虫と回虫の卵を見つけたというのである。これこそ日本考古学でトイレを発見する鍵になるという直感を感じて、文献をいただいて帰った。

トイレ考古学への参入

一九九一年一月、私は奈良国立文化財研究所の行っている藤原京の発掘現場からトイレらしい土坑が出ているという知らせを受けた。それは長円型の土坑で、地下水の湧いてくる真っ黒い土を前に、次のようなトイレ研究の方法を実践してみようと思っ

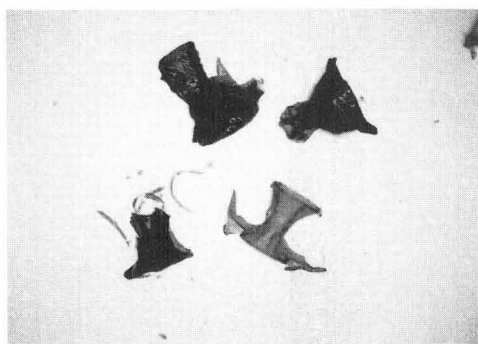
た。いくつかの方法を試して、低倍率の実体顕微鏡で観察しながら採集した昆虫や植物種子を分類した。

魚骨は私自身がカタクチイワシと同定したが、その他はお手上げであった。そこで関連する研究者に参加してもらい、昆虫はマルエンマコガネ、マゲソコガネなどの糞虫、ハエの囲蛹、コクゾウムシの吻部などの種子は、アカザ、ヒユ、アサノミ、サンシヨウ、ノブドウ、ウリなどが判明した。花粉分析では、種実と同様にアカザ／ヒユ、ベニバナなども含まれ、薬用に摂取した可能性を示唆した。トイレの決め手となったのは寄生虫卵で、やはり日本でも大量の回

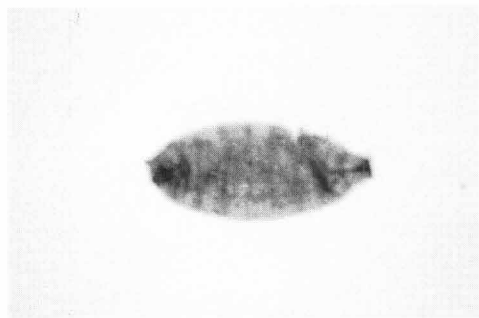
虫、鞭虫（ともに農耕、飲み水の汚染）、横川吸虫（アユを中間宿主）、肝吸虫（コイ科を中間宿主）などの卵を見つけることができたのである。

最後に

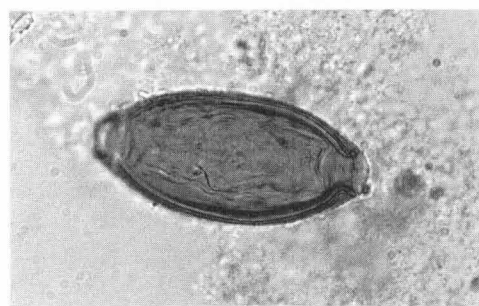
この分析をきっかけに、各地からトイレ遺構の検出例が相次ぎ、古代から近代にいたるトイレの変遷も明らかになりつつある。このように、考古学の域を越えた多くの人々との共同研究のおかげで、短時間のうちに日本のトイレ研究も世界的水準に達することができた。現在も土壌微細形態学的研究を行いつつあり、また生化学的研究も試み、女性ホルモンなどの生化学的分析結果も得ており、さらに世界的にも未知の分野へと乗り出しつつある。



カタクチイワシ椎骨



ハエの囲蛹



藤原京 鞭虫卵

(4) 板材の中央に丸い穴をあけた、西洋式便座の原初的なもの。

(5) Wet Sieving

(6) Dry Sieving

(7) Floatation

(8) Vayany Technique

(9) 麻実（おのみ）ともい

(10) Soil Micromorphology

日本美術に関する感傷的記述……………狩野博幸

HIROYUKI KANO



狩野博幸（かの ひろゆき）
一九四七年、福岡県生まれ。九州大学大学院文学研究科博士課程中退。京都国立博物館学芸課美術室長、京都大学大学院人間・環境学研究科客員教授。桃山時代および江戸時代の絵画を研究。主な著書に『歌麿』（小学館、一九八一年）、『桃山の花鳥画』（学研、一九八二年）など。

チューリップと風車、これがオランダという国に寄せる日本人の一般的なイメージといつてよいだろう。あるいは、鎖国の時代に唯一わが国と交流のあったヨーロッパの一国とか、〈高地オランダ人〉という驚愕すべき立場で来日したドイツ人医師シーボルト、などを想起するひとつもあるだろう。何かしら昔から親しい関係にあった国……というのが日本人にとってのオランダである。旅行案内書を読んでもだいたいそんな感じで書かれている。

一〇年以上前、京都国立博物館で「シーボルトと日本」展を開催することになった。それまでも各地でこれに類する展覧会はあったが、日本とオランダについての展覧会ではこれが質量ともに最高、最大のものだった。そのことにはたいへん満足しているが、ちよつとショッキングな出来事があったことを報告しておきたい。

事前調査で三回渡蘭したが、シーボルトの収集品をもとに設置された国立民族学博物館のあるライデン市のバーで呑んでいたときのこと。機嫌よく呑んでいる僕たちのひとりに老人が絡んできた。ただの酔っ払いと思っていたのは間違いで、老人はインドネシアで日本軍の捕虜となり、苛酷な使役に遭った記憶が、我々日本人を見て甦つ

たのだ。いうまでもなくインドネシアはオランダの植民地だった。オランダにとっても旨いインドネシア料理店が多いのは、そのせいである。言い募る老人はむしろ素直な方で、日本人の観光客を苦々しく思っている老兵士（あるいは家族）は数多くいるらしい。そういえば、昭和天皇にトマトが投げつけられたのはオランダではなかったかつまり、オランダは、一面では、反日の国であつたのだ。展覧会の開会式にベアトリクス女王が来日される筈であつたのが、反対運動のせいで取り止めとなり、皇太子が代りに来日といったおまけまでついた。

植民地問題の是非はしばらくおく。先次のいくさはまだ終っていないということだけは、オランダを訪れるとくに若い日本人には知っておいて貰いたいのである。昨今はやりの〈自虐趣味〉に陥る必要はないが、一種の礼儀として知っておく必要があるのではないか。真珠湾ツアールで沈んだアリゾナのところでピースサインをして写真を撮った日本人は、殴られても仕方あるまい。同様に原爆ドームの前でそんなことをするアメリカ人がいても、そうされてしかるべきであろう。

僕が大学で日本美術を専攻したのは、語学にまったく自信がなかったからである。

学部生、大学院生の頃、ヨーロッパに見学旅行に行ったり留学したりするのは、すべてイタリア・ルネサンス絵画やネーデルラント絵画を研究する先輩たちや先生たちであつた。語学が苦手で逃げるように日本の近世絵画を専攻した自分が、後年、人並以上に諸外国に行くようになるとは夢にも思わなかった。湾岸戦争の最中にガラガラ飛行機に乗ってベルリンに行ったり、零下二〇度という〈暖冬〉サンクト・ペテルブルグやポーランドを訪れたりするようになるなど、誰が予想し得ただろう。考えてみれば、海外に遺る日本美術の調査に日本美術の専門家が呼ばれるのは当り前のことで、つまりは日本美術研究者であるからこそ語学の才能がなければならなかったのである。まったく皮肉なことというほかない。大学院の入試で語学が課せられたのは当然だったということだ。後悔先に立たずヨチヨチ歩きの海外調査は、かくて今後も続くのである。

世界的建築家のフランク・ロイド・ライトの日本絵画コレクションの調査を依頼されたのは、もう八年ほど前のことになる。片コト英語でくたくたに疲れながら、一年に二、三度、渡米することが続き、その全容が明らかになるにつれて、わが国の桃山

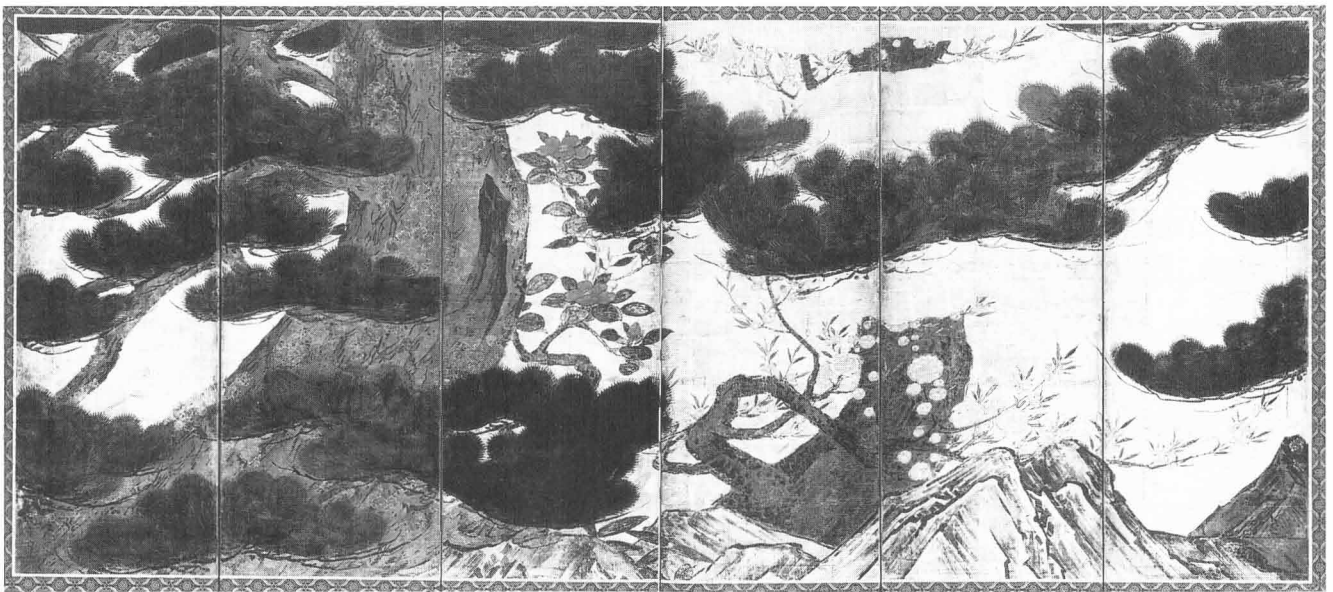
絵画研究に貴重な貢献をすると確信できる作品が次々と現われてきた。

その代表的な作品が、写真で掲載した「老松図屏風」六曲一隻である。詳しい考証は別に論文に仕立てることになっているので、ここでは省かせて貰うことにするが、ともあれ、桃山絵画の「伝説的」な巨匠である狩野永徳と深い関係をもつと思われるのがこの「老松図屏風」で、その名の高さに比較して遺存作品のはなはだしく少ない永徳の研究に、この作品が及ぼす影響はかなり大きいといってよいだろう。

しかし、僕のいいたいことは実はそんなことではない。

ライトの居宅と学校のある広大な敷地の「タリアセン」は、アメリカの二箇所にある。一つは北部のウィコンシン州スプリンググリーンに、いま一つは南部のアリゾナ州フェニックス郊外に建てられており、暖いときはウィコンシン、寒くなるとアリゾナへと、学生たちを引き連れて移動していたのだった。その移動の際、ライトはお気に入りの屏風類も運んでいたのである。初めて屏風を見たとき、その余りの破損の状態に呆然としたものだったが、理由を聞いて納得した。

現在の目で見て、こうした扱いを乱暴だと非難することはたやすい。だが、そんなことは意味のないことだ。あのいくさのときにも、ライトが一貫して日本の絵画を常に自分の身の回りに置いていた、ということに僕はほとんど感動したと告白しておきたい。経済的余裕のないライト財団のために、何とかして傷んだ屏風を修理してあげ



老松図屏風

られたら、と思い初めたのは、その感動がもたになっていく。日本の心ある人々の協力のもとに往時の面影を取り戻した「老松図」を始めとする屏風たちは、今、里帰りをして日本中を回っている。それを見た友人の冷泉為人氏が「作品も良いが、それ以上に、良いことをしたな」といつてくれたとき、本当に日本美術をやつてきて良かったなと思ったことである。



篠原資明 著

評者・上倉庸敬(大阪大学文学部教授)

「心にひびく短詩の世界」

講談社現代新書

一九九六年一月二二・九頁

定価六五〇円



長くても四行におさまる短詩ばかり三六篇。それを篠原資明が読み、あわせて詩人たちがどんなふうになきたかを素描する。読者はなにより、詩人が詩を語る、その贅沢を堪能するだろう。どの詩も、どの詩人たちも、篠原さんが読むと、新鮮な姿で立ちあらわれてくる。

宮沢賢治の「報告」。

「さっき火事だとさわぎましたのは虹でございました」

もう一時間もつづいてりとんと張つて居ります」

この詩について篠原さんはいう。虹が火事の炎に見えて人々が騒いだわけではなく、虹が「火事だ!」と騒いだのだ。だからその火事を消すために「にわか雨がざあーと来た」。この詩は、「雨の後にかかる虹を、雨を降らせた張本人に仕立て上げる」と。

びっくりする。なるほど、「虹」とい

う言葉は、虹があらわれるまえの「にわか雨」まで描きだしていたのか。どこ

なくおもしろいとは思ったものの、こう聞くと、つまっていた鼻が突然とおった

ような、すっきりした気分になる。

「火事を消した後で、いや火事を消したような顔をして、やけに気張って、それでも神々しく颯爽と、張り続ける虹の姿は、おかしくもあり、頼もしくもある」。微笑をさそう品のよい雰囲気は、たしかに宮沢賢治のユーモアに独得のものである。

近年の篠原さんは、詩を作るときも詩を読むときも、言葉の幅をひろげ、奥行きを深めることに、意識して専念しているように見える。言葉の沃土をひろげることが、そのまま詩の可能性をひろくことになるだろうという洞察。

それを実践にうつす仕方が、いかにも篠原さんらしい。この詩人はまた、現代芸術を鳥瞰できる屈指の美学者でもあるので、言葉を規則で矯め、かえって力のみなごった解放のエネルギーをひきだそうと、実験に富んだ理論をあみだす。それが方法詩、わけでも超絶短詩ということになる。本書もその仕事の流れのなかにある。

開巻、「冬眠」という題のもと、ただ黒丸があるだけの、草野心平の詩がおかれています。その黒丸に、「言葉そのものを吸収しつくすブラックホール」を感じた篠原さんは、ブラックホールに抗して、能うかぎり短く、それでいて能うかぎり豊かな空白をとりこんだ詩を模索する。本書は、そうした視点からふりかえられた詩人たちの仕事であり、現代詩史でもある。

だから、詩人たちの言葉が黒丸の吸引力に負けぬ用途の立つあたりから、篠原さんの歩みにゆとりが出る。楽しげに言葉と遊びはじめる。吉野弘の「漢字喜遊

曲」に寄せて、

「『漢字喜遊曲』は、ずいぶん詩の幅を広げてくれた。感謝の意を込めて、ぼくの超絶短詩をこの詩人にささげたい。」

よ 詩の広し。

超絶短詩は、ひとつの語を分解してできあがる。「ただし、分解前と分解後とで、同じ音列が保持されていること。また、両極分解されたどちらか一方が、擬態語と擬声語をふくめた広義の間投詞であること。それが最低限の規則である。また、分解後の両項の間に、かならず空白をもうけるという付則も伴う」。

じつは、規則は言葉にエネルギーを貯めるだけではなく、規則をまもる人すべてを、詩の遊びの場に招くものでもある。三六の短詩からなるこの歌仙、主人の座はもちろん篠原さん自身の超絶短詩が占めなければならない。

客のひとり、大岡信が挨拶すれば、

「一羽でも宇宙を満たす鳥の声

二羽でも宇宙に充滿する鳥の静寂」。

「ライフ・ストーリー」

まれびとの著書『うたげと孤心』で主人の篠原さんが、

「一人でも宇宙を満たす宴の声

二人でも宇宙に充滿する孤心の静寂」。

以後、篠原さんの繫応は、工藤直子から上がりまで、歌仙ひとまきの座を、存分に和ませて締めくくりに足りている。

「より短く」、「より長く」、しかも厳として「心にひびく」詩の姿と、それに対峙する篠原さんの真面目をつたえて、読者は著者の風格にお礼を申し述べはかはない。

小岸 昭二著

著・細見和之大阪府立大学総合科学部講師

「離散するユダヤ人——イスラエルへの旅から——」

岩波新書

一九九七年一月 二一六頁

定価六五〇円



本書は「スペインを追われたユダヤ人」、「マラーノの系譜」につづく、ユダヤ人の思考と足跡をたずねた、著者の新著である。背景には、キリスト教の圧倒的影響下で成立したヨーロッパ近代（被植民地地域をふくめて）五百年の歴史を、ユダヤ神秘主義思想・カバラの観点から問いなおそうという、壮大なモチーフがある。

一四九二年にスペイン国王によって発せられた「ユダヤ人追放令」とともに、

流涕」という印象的な概念で呼んでいる。この二つの流涕のドラマを、ヨーロッパ近代思想の岩盤の下に地下水のように伏流するカバラ思想を導きに描き出すこと、それが本書の狙いである。

しかし本書の真価は、このような流涕のドラマを、ユダヤ人たちが離散していった各地を実際に自ら訪ねてゆく旅とともに描きだすところにある。不案内な土地を旅しつつ、自らの五感を研ぎ澄ますことによって、流涕のドラマに等身大で耳を傾けること。モロッコのマラケシュにはじまって、カイロ、エルサレム、サフエドへと、旅は東へつづけられてゆく。それが、本書で繰り返し紹介されているカバラ思想にも、たぐい稀ないわば地誌的リアリティを付与しているのだ。

神は、世界の創造に先立って、自己の内部へ収縮・撤退し、世界は悪の跳梁する場となった。これによって破壊された器を修復すること（ティクーン）、それが離散ユダヤ人の使命である。本書によれば、これがイサーク・ルリアのカバラ思想（ツィムツムの形而上学）の核心である。この一見抽象的で神秘主義的な思想にはしかし、まぎれもない離散ユダヤ人の痛切な歴史的体験とそこから紡がれた知恵と勇気が結晶しており、まさにそのことによって、ルリアのカバラ思想は他の多くの離散ユダヤ人の知恵と勇気を鼓舞してきたのだ。そのような経緯を、自らの発見的な旅とともに綴ること。とりわけ、マラケシュの「ユダヤ人墓地」の光景、夜の「死海」を覆う満天の星空を描く著者の文章は、自らの思考と体験を優れた文体のうちにみごとに定着させている圧巻である。

それにしても、現時点でユダヤ人をまづもって「離散」（ディアスポラ）という観点でとらえるところには、多くの困難な問題が待ち受けている。たとえば、

ばくは著者とともに神戸を拠点とした「日本・ユダヤ文化研究会」に属し、神戸のユダヤ人コミュニティを形成している何人かのユダヤ人と面識があるが、彼らにたいして「あなたがたの本質は「離散」にあるのです」と語るのは、場合によってはたいへん身勝手なことになるだろう。彼らの大半は現在の国家としてのイスラエルに帰属意識をもった、敬虔なユダヤ教徒なのである。著者の観点からすれば、現実のイスラエル国家もまた「離散」の一形態であるということになると思われるが、そのことを彼らとどのように語りあえるのか。

他方で、著者自身の周辺、そして多くの親しい友人たちにも、イスラエル国家の問題を、まづもってパレスティナのアラブ人の視点からとらえてきた、そして現にとらえようとしている人々がいる。彼らの観点からすれば、イスラエル国家が建国以来発揮してきた途方もない暴力性、そして現に発揮しつづけている暴力性は、覆いようもないのだ。「離散するユダヤ人」という視点は、この問題までも包摂することができるのだろうか。これらの点が、ほかならぬイスラエルへの旅における著者の体験と記述の絶えざる揺らぎとして、この本の終わり近くで集中的に現われているようにぼくには受けとめられる。

ただし、これをばくはたんなる批判として書いているのではない。著者の身近にいてばくは、著者がどれほど消耗感に苛まれつつこの「離散」という観点を手放すまいとしているかを知っているからだ。「イスラエルへの旅」を同時に「パレスティナへの旅」として果たすこと、それは、「私はつねにイスラエルの旅を考へつづけてきた」と記している著者自身をふくめて、困難であるとともに切実な、ばくら自身の課題にはかならないのだ。

坪内良博 著

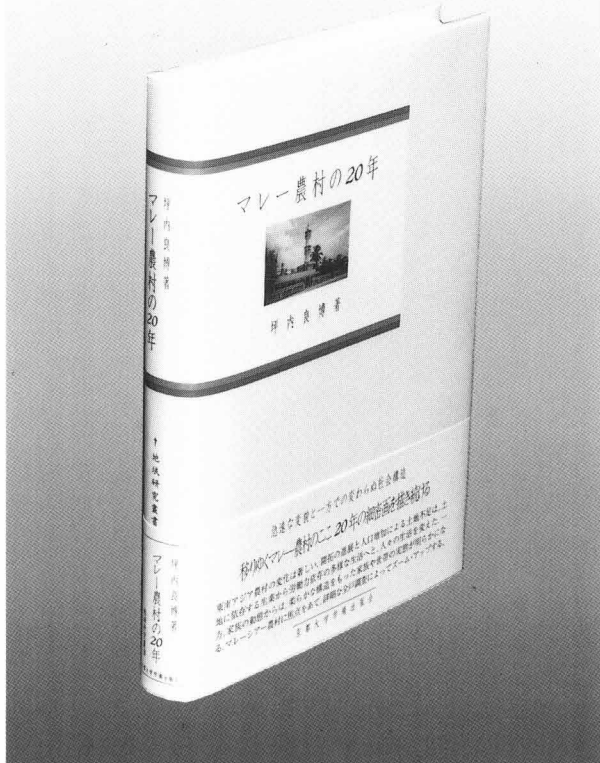
評者・松田素二（京都大学大学院文学研究科助教授）

「マレー農村の20年」

京都大学学術出版会

一九九六年一月 三三三頁

定価四、二〇〇円



その道の大家の書いた『マレー農村の20年』と聞くと、なつかしい昔の回顧か、教科書風の解説か、と思ってしまう。ところが、いっけん固い実証研究のように見えるこの本は、じつは安心して読める平穩なものではない。それは一言でいえば、若々しい挑戦と苦闘の記録である。

一九七〇年から一年余りの初調査から、マレーシアのクランタン州にある小村ガロックと著者とのつきあいが始まった。著者はその後、タイ、インドネシア、マレーシアでいくつものフィールドワークをつづけるが、つねにガロック村を起点にした地域研究を構想してきた。そのさい、著者の比較の視点は、差異と変化を

追求める昨今の異文化研究とは一味違う。彼は、むしろこれまで暗黙の前提とされながらも打ち棄てられてきた、類似と不変という現象に注目するのである。小人口世界、移動と開拓の原理、集団のコイボレートの性格の強弱、といった概念をキーワードにして、著者は地域文化の共約作業の可能性を探る。

先にこの本は挑戦と苦闘の記録だといったが、それは地域研究という領域を立ちあげる「生みの苦しみ」のことだ。一九八〇年代以降、地域研究が脚光を浴びるようになったのは、十分な理由がある。その一つは、従来の人類学、経済学、政治学、生態学といったディシプリンご

との対象の切り取りが、現実からますます遊離するようになったことの認識がある。それぞれの知的世界における「理論の競合」にあわせて、現実が都合よく解釈され、その理論の正当性を主張するというスタイルの「手前勝手さ」が、我慢できなくなったのだ。地域を、そして地域固有の論理を、ディシプリンの区分けを越えて明らかにしたい。こうした素朴で健全な欲求が、地域研究の出発点であった。

しかし問題は残る。では地域研究はいったいどのような方法論を持っているのか、という問題だ。昨今の人類学批判は、異文化理解のサクセス・ストーリー（人類学者がフィールドに向き、艱難辛苦を乗り越えてついには対象社会の謎を解き明かす）を完膚なきまでに解体してしまった。「彼ら」を理解するという傲慢なフィクションは否定され、近代実証主義の痕跡は徹底的に摘発された。そうすると地域研究も、地域に行つて「彼ら」の社会の固有な論理を探ってきます、と安穩には言えなくなったのである。どのようにして、そうした目的が達成できるのだろうか。この本は、この問いへの著者流の回答でもある。

ポストモダンな異文化研究批判に対して、居心地の悪さを感じる人々が出現するのも無理はない。こうした人々は、この批判のなかに潜む空虚な観念の遊戯性を指摘して、現実との接点を求めはじめた。そして彼らは、観念に解体されない根拠を対象世界のなかに求めた。それはモノであったり、歴史であったりした。著者も、近代科学主義批判の風潮のなかで、地域研究の居場所を確立するために、その根拠を捜し求める。

地域研究は、たんなる民族誌の集積ではないと考え、著者の到達した回答は、人口動態の活用である。「他者理解」の難渋な落とし穴から逃れ、対象記述の主観

性批判を避けるために、著者は、ガロック村を人口動態から捉えようとしたのである。

そのために著者は、村の生態環境、農法改善、品種選択などの農業技術、親族集団の生活単位など、地域を取りまく現実を、一つ一つとりあげながら、それらを人口動態と関わらせながら、確固とした地域像をつくりあげようと試みる。

たとえば移動と開拓という原則が一九世紀後半に誕生し、相対的小人口世界であったこの地域の姿はがらりと変わってしまった。その傾向は、現在に至るまで継続している。著者は、この傾向を以下のような言い方で説明する。一九七一年当時の村在住の男性は総数三四九人、一九九一年の時点でのその子孫から死亡者を差し引いた男性人口は五八二人。うち二八五人が在村で、残りは村外へ他出。人口は年率二・五九%の増加だが、集落内居住者は年率一・〇一%で減少する。

いっけん数字の羅列に思える、この記述はきわめて刺激的なものだ。出入りの激しさと社会の開放性を明快に指し示しているからだ。また同業者としては、こうした数字の背後にある「力仕事」にも感嘆してしまう。

このように人口動態を用いて、著者はガロック村の家族の紐帯、農業労働の担い手、賃金労働の浸透具合などを、一つ一つ浮き彫りにしていく。その作業の積み重ねによって、語りや象徴分析を多用することなく、地域固有の論理を導き出していくのである。

本書はポストモダンによる異文化理解の本質主義批判の先を見通している。この方向性は、近代実証主義への素朴な回帰の危険性をつねに内包した不安定な選択である。しかし著者は地域研究の方法論的確立のために、あえて挑戦的な選択を提示して、私たち後につづく地域研究者を挑発しているのである。

谷 泰二著

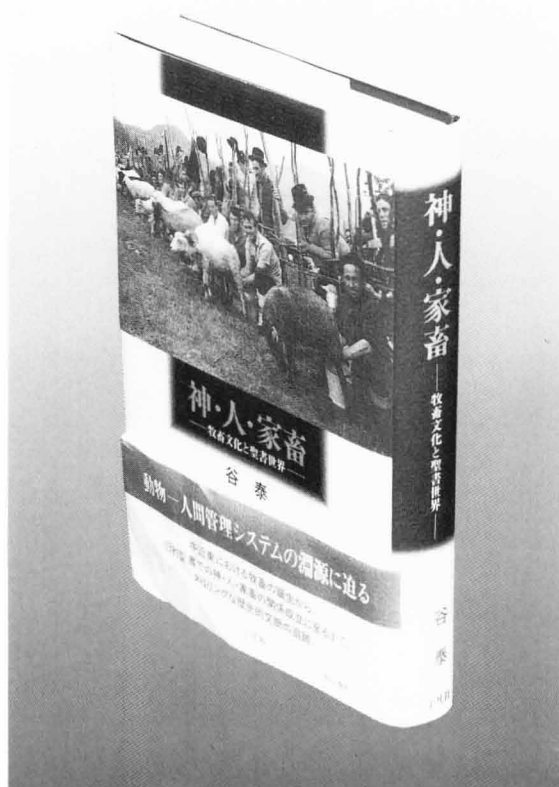
評者・小長谷有紀(国立民族学博物館助教授)

「神・人・家畜―牧畜文化と聖書世界―」

平凡社

一九九七年二月 三九六頁

定価三、八〇〇円



末尾の付記にあるように、IV章を除いて既出論文にもとづいているが、表現についてはかなり手が加えられており、読みやすくなっている。そして何よりも、一連の議論がまとまった形で読めることは、読者にとって幸福なことである。

ちなみに評者は、学生時代に社会主義下のモンゴルに留学し、フィールドワークが許されないままにむなしく帰国した時点で、谷氏の名著『牧夫フランチェスコの一日』と遭遇した。搾乳の起源をめぐる示唆的な議論に大いに刺激され、やがて中国内蒙古自治区でフィールドワークを開始した。あの出会いこそが、私の今日を導いたという自覚と感謝の念から、不遜も省みず、ここに本書の紹介をつとめる次第である。

I章の牧畜起源論は、家畜化を「動物群と人との新たな相互関係性への移行の過程」としてとらえ、「考古学者が示した、骨に残された家畜化の結果」に至るまでのプロセスについて、現在の「家畜群への技法的関与」から順序だてて推測する。まず人の居留地に群れを繋留し、日帰り放牧が始まる。すると、出産期に母子関係が不安定化し、哺乳・授乳への介助が始まり、家畜個体への親和性が確立し、年齢に応じた計画的消費が可能になるという「出来事連鎖」と、日中の母子分離によって、新生児の共同保育が始まり、群れの輪郭が強化されるという「出来事連鎖」が推論されている（八三頁、表6など）。

これらの出来事のうち、授乳介助の開始はただちにII章の搾乳起源論へ展開する。また、対個体的な親和性の確立は、III章の去勢誘導羊の成立論と無関係では

ない。さらに、年齢に応じた消費の成立は、都市への食糧供給の基地であり、放牧を委託する都市の側と実際に放牧にあたる牧人集団との緊張関係を読み解くIV章に連なる。こうした「支配者・人・家畜」の関係が、旧約聖書に描かれた『神・人・家畜』関係のモデルであることはV章で明らかになる。と同時に、牧人集団（イスラエルの民）が優越的な神殿都市権力に対抗して自己のアイデンティティを回復する際、支配者の論理を模倣しているという。ファラオのもとに集められ、それゆえに権力の象徴となる「オスのういこ」を、殺すことによって対抗権力の権威が破壊されるという回路は、まさに権力側の論理を借用して成り立っているからである。この「オスのういこ」が記号化される論理について、家畜管理の実態から評論されてはいないが、搾乳の成立によって発生した「家畜の（ジェンダー論）」と関わることは十分に想像されよう。

このように、本書は、壮大な時空間を射程におき、技法から社会関係、世界観まで牧畜文化の源流を包括的に考察した特筆すべき業績である。今西錦司以来の「自然と文化」の関係に焦点をあてた研究は、「環境」や「共生」をキーワードとする現代思想の波にのって、今日、「自然誌」という一つの学問的奔流を形成するに至っている。そうした系譜の中に位置づけられる本書は、とりわけ、わかることの分析（実証）を通じてわからないこと（仮説）を論ずるという学問の真髄を具現化する、という意味で意義深いと思われる。

官を機にまとめられた。

本書は、順に「中近東における牧畜の起源をめぐって」「搾乳の開始とその意味」「去勢オス誘導羊と宦官」「都市と牧人集団」「旧約聖書における神・人・家畜関係」と名づけられた五つの章から構成されている。すなわち、中近東の牧畜文化をめぐる起源、搾乳、去勢、都市との関係、神との関係という重要なテーマが並び立っているのである。紙面上ちやうど前半部分をしめるIII章までが、主として技法の成立に関する議論であり、後半部分をしめる二つの章が、社会関係の特質に関わる議論であるといえよう。

谷泰氏の長年にわたる業績は、大きく二つの領域にわけられよう。一つは、聖書に描かれた世界を中近東に展開した牧畜文化の文脈から読みとる仕事で、西洋史学という氏の出自と密接な関係をもつ。端的に言えば、時間軸を意識しながら、人と動物のあいだの相互関係を論じる領域である。もう一つは、人と人のあいだの相互関係を論じる領域である。二つの領域はコミュニケーションというキーワードで通底している。本書は、前者に関わる業績を集大成したものである。なお後者については、編著として『コミュニケーションの自然誌』があり、ともに退

安枝英評・西村健一郎著

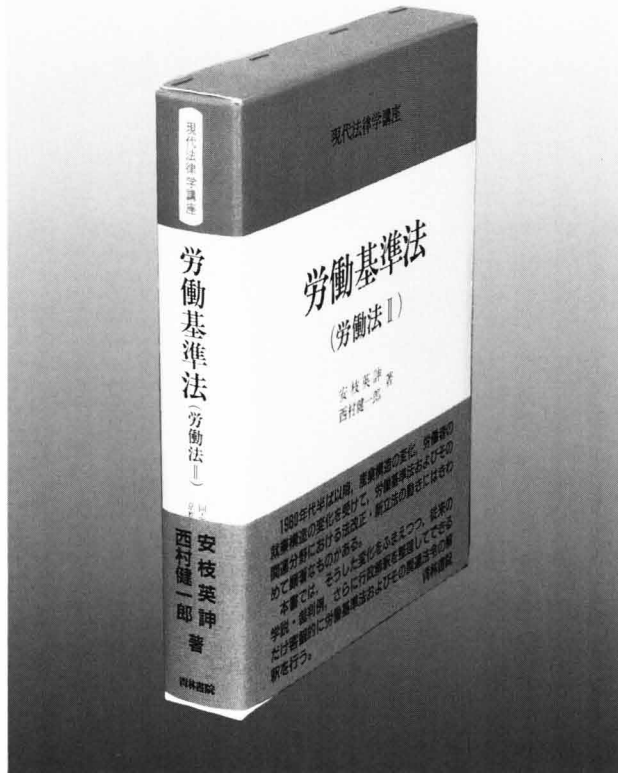
評者・小島典明(大阪大学法学部教授)

「労働基準法(労働法Ⅱ)・現代法律学講座31」

青林書院

一九九六年四月 五〇四頁

定価六、〇〇〇円



らなる『労働法』の三分の二強を占める第二編「個別的労働関係法」の内容を約三倍に拡充して、単独の書物として独立させたもの。それが本書ともいえる。しかし、ただたんにボリュームが増えたというだけではもとよりない。たとえば、『労働法』の一部にみられた羅列主義的な傾向が、次の例にみるように、本書においては見事なまでに一掃されている。

『労働法』第二編

第二章 労働者保護法の一般原則

XI 実効性の確保

実効性確保の方法

労働基準監督制度

XII 労使協定

『労働基準法』第一編

第六章 労基法の実効性確保

第一節 実効性の確保

第二節 監督行政

第三節 罰則

第四節 付加金

第五節 労使協定

労使協定を労基法の実効性確保のワンツールとして位置づけるなど、アイデアとしては卓抜である。労働基準法を体系的に学びたい(教えたい)者にとっては、本書の目次だけでも参照する価値が十分にある。こういっても言い過ぎではないであろう。

また、分量が三倍になったといっても、すべての項目が同じように詳しくなったというわけではない。判型が異なること

『労働法』B六判、『労働基準法』A五判)を無視すれば、女子労働者の保護に関する記述のように、頁数が減少したものもある。一方、男女の平等と就業の援助に関する記述は大幅に拡充されており、本書の刊行後急速に進んだこの分野における法制度改革(時間外・休日労働及び深夜業に関する女子保護規定の撤廃と均等法の強化)をあらかじめ予見したかのような内容となっている。

ただ、本書において内容的に最も拡充をみたのは、安全衛生・労災補償の部分(第二編第七章)と労働契約の終了に関する部分(同第一章)である。前者とくに労災補償については西村教授が名実ともにわが国における第一人者であり、その記述はこの分野に関する基本的かつ正確な知識を提供して過不足のないものとなっている。司法試験用六法に収録されていないことを口実に、労災保険法については授業でも触れずにきた評者ではあるが、逃げ道をふさがれたという感もないわけではない。

他方、労働契約の終了、とくに解雇に関する問題は実務的にも最も重要なテーマの一つとなっている。その意味で、記述の充実が図られたことは喜ばしいが、雇用保険に関する記述もできれば欲しかった(『労働法』では第三編「雇用保障」で取り扱われている)。会社を辞めたときナンボもらえるか。それが評者のような大阪人(ちなみに著者はともに京都在住)の最大の関心事だからである。

人生(生産年齢人口に含まれる期間)五〇年。労働基準法(昭和二年法律第四九号)も齢五〇歳を迎えたことになる。本書は、この労働基準法に関する重厚にして最新の体系書である。

たしかに、重厚のみならず重高(重量と価格)でもある本書は教科書としては使いにくい。ただ、安枝・西村両教授には労働法の全分野をコンパクトにまとめた『労働法』(有斐閣ブリマ・シリーズ)があり、一九八六年の初版以来、斯界のベストセラーとしての地位を確立して、

今日に至っている(九五年刊の第4版が最新版)。この『労働法』をテキストとし、本書を参考書として利用する。それが最良の活用方法であろうが、独学自習も十分に可能ということになれば、下手な講釈など不要ということになりかねない。評者のような怠け者の教師(講師)にとってはある種の脅威でもある。

本書の対象は、書名からまたやすく理解できるように労働基準法とその関連法規。いわゆる個別的労働関係法(雇用関係法)の分野がこれにあたる。計四編か

人環図書

— 本研究科教官の新著より —

映画 視線のポリテクス

— 古典的ハリウッド映画の戦い —

加藤幹郎 筑摩書房

第二次世界大戦中、ふたりの人気喜劇映画監督が対照的なふたつの道をあゆむ。一方はハリウッドからワシントンへ出かけ、枢軸国を圧倒するプロパガンダ映画の監修をつとめ、他方は、ハリウッドにこもるようにして荒唐無稽なスクリーン・ボール・コメディをつくりつづける。しかし、ふたりは妥協を知らぬ同じ芸術家として、ひとつの敵と対峙することになる。検閲である。前者は陸軍情報部の執拗な検閲の目と、後者はハリウッドの自主検閲機構ブリン・オフィスの検閲と、それぞれ戦うことになる。

本研究科で「映像表象文化論」を担当する著者は、一次資料を駆使して、このふたりの映画監督の戦いぶりを再現し、スクリーンに映っているもののなかに何が欠落しているのかを、ディコンストラクティブな映像分析をとおして解明する。本書は他に、戦中から戦後にかけてハリウッドがいかに国内の女性市場を搾取したかを、精緻なテキスト分析をふまえて解明するフェミニズム的読解や、白人たちの戦いに動員された「黒人兵」のプロパガンダ映画製作の現場の証言をふくむ。

〔四六判一七七頁〕
定価（本体）二、四〇〇円

事典 東南アジア

風土・生態・環境

東南アジア研究センター編 弘文堂

まずは、本書を手に取り、目次なりとも目を通して頂きたい。そうすれば、それが事典と銘打ちながらたんなる事典ではないことに、すぐ気づかれよう。

本書の特徴的な構成は、東南アジア世界の原像とその現代の変貌の様子を明らかにするとともに、二一世紀を迎えんとする世界へ、その好ましい将来像を提示しうる新たな視座を確立しようとする編集者らの気概・思想性の高さが強く反映されたものである。そして現在までの個別研究の概括と、より高次の論理を抽出する作業を通じて浮上したのが風土と生態論理という二つのキーワードである。

各項目を分担した一〇七人の研究者には、研究論文の作成以上に、執筆にあたる困難さがあつたことと想像される。編集方針に應えるには、自分の専門のみを説くことでは済まされず、小世界の全体を約四千字で描ききることが要求されたはずだからである。そして、こうした困難さに多くの執筆者が正面から挑んだために、各項目が統合された体系的な書として仕上がっている。

読者にとっては、関心のある項目から読み進むことも理解が進み、新鮮な旅に導かれて自分の発見できるであろう。

〔B五判六一七頁〕
定価（本体）二〇、〇〇〇円

ファシズムの想像力

— 歴史と記憶の比較文化論的研究 —

小岸 昭・池田浩士・鶴飼 哲・
和田忠彦編 人文書院

ファシズムの時代から半世紀が過ぎた今、ファシズムを問う作業は過去のものとなつたのか？ 否。国民国家のゆらぎが語られ、原理主義や歴史修正主義といった形をとって「国民」の再定義とその「歴史」の捏造が呼号されている、我々が生きている状況は、ファシズムが問い返される必要を浮き彫りにしている。

しかしその問い直しは、ファシズムを「悪」の代名詞として陳腐化することでも、日本・イタリア・ドイツの「特異な国家体制」に収斂させて論じることでもない。人々が「主体」として進んで身を投げ出すのを可能にした文化、今もって隠蔽された記憶、国境を超えた連環の中での呼応や批判、何より植民地や「人種」を巡る「帝国の版図」と「国民」の暴力、それらを生み出したいくつもの歴史を問題化する回路の設定が不可欠なのだ。

本書は、そうした課題を共有する二〇名の論者による共同研究の成果である。学際的な領域と、ロシア・南北アメリカ・「南洋群島」におよぶ諸地域への注視から追究されるファシズム像は、私たちの「いま・ここ」を新たな光の下に照らし出すだろう。

〔A五判五〇一頁〕
定価（本体）五、八〇〇円

科学哲学者 柏木達彦の多忙な夏

富田恭彦著 ナカニシヤ出版

本書は科学論・科学史を担当するある大学教官を主人公とした小説で、京都の夏の数日の出来事が、五つの短編に記されている。

「小説」であるとの著者の主張とはうらはらに、帯には「超・小説の哲学入門」とあり、また、新聞などの書評・紹介でも、本書は哲学書として取り上げられているようである。実際、この短編集では、パラダイムや、概念相対主義、物語や事実の解釈の構造、意味基準の問題、真理の対応説などが、主人公の柏木達彦と学生・同僚との対話の中で、かなり立ち入った形で論じられている。その意味で、奇妙な小説ではある。

主題の重さに比して、論調は軽く、その軽さの底にあるものが、読者の側で読みとれるかどうか、かえって問われているのかもしれない。

〔四六判一三五頁〕
定価（本体）二、一〇〇円

瓦「かわらばん」版

◆“人環”とは？

本雑誌の標題「人環フォーラム」の“人環”は、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究所」の略称です。“人環”は学部を併設していない独立大学院であり、平成八年度の組織構成は三専攻一九講座でしたが、平成九年度に新専攻（環境相関研究専攻）が設置され、四専攻二八講座となりました。

◆研究の助成を得て“人環”ではつぎのような研究が本格化しました。

◆遺伝子環境とその制御 研究代表者 竹安 邦夫 教授
住友財団基礎科学研究助成金および文部省科学研究費補助金（重点領域研究「転写調節機構」、「チャンネルとトランスポーターの構造・機能協同」）の助成により発足した本研究は、原子間力顕微鏡という物理学的手段と生化学・分子生物学の手法を用いて、「遺伝子まるごと」の機能とその調節機序を明らかにしようとするものです。ゲノム計画からの情報（塩基配列）と光学顕微鏡下の染色体像とのギャップを埋めるものと期待されます。

◆受賞

◆藤堂 剛 助教授 「平成八年度御園生賞」（放射線影響協会）（614） 光回復酵素に関する研究。
◆光谷拓実客員教授 「平成九年度吉川英治文化賞」日本で初めて、樹木年輪による年代測定表を完成し、先史時代の遺跡に実年代を与えることに成功した功績。
◆佐伯啓思 教授 「第七回読売論壇賞」「現代日本のリベラリズム」（講談社）。

◆催し物のご案内

◆京都大学創立百周年記念展示のサテライト展示会

本学では、本年度（平成九年）秋、附属図書館と総合博物館（旧文学部博物館）を中心会場として全学部局が協力する創立百周年記念展示会が開催されます。本研究科でも、総合人間学部と協力して、所属教官有志（約二十名）の研究成果をパネルやビデオさらには実物で紹介するサテライト展示会を開催します。本研究科の特色を生かした多方面にわたる研究を未来に向かってアピールする予定です。ふるってご見学ください。

会期 十月二十八日（火）より十一月一日（金）まで

会場 大学院棟東ウイング一階ロビー

◆京都大学大学院人間・環境学研究所公開講座（第二回）

（地中・水中から見た自然と人とのかわり）

日時 平成九年十一月二日（水）・三日（木）各日午後一時三〇分～四時五〇分

会場 人間・環境学研究所大講義室

一日 自然界における動物性廃物のゆくえ

二日 古代都城の生活と環境―近年の環境考古学の成果から―

三日 両生類はいま―水と陸との接点での環境の問題―

琵琶湖の生きものたちとその現状

受講資格は特に問いません。

受講料 五、四〇〇円

申込方法 往復はがきにて郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を記入し、返信用はがきに郵便番号、住所、氏名を記入の上平成九年十月三十一日（金）までにお申し込みください。先着順により、返信用はがきに受講通知をしますので、現金書留にて所定の期日までに受講料を払込みください。

申込先 〒六〇六〇一 京都市左京区吉田二本松町 京都大学大学院人間・環境学研究所公開講座担当宛

TEL 〇七五・七五三・六五二七 FAX 〇七五・七五三・二九五七

人間・環境学研究所教授	相良直彦
人間・環境学研究所客員助教授	松井章
人間・環境学研究所助教授	松井正文
滋賀県立琵琶湖博物館学芸技師	中井克樹

人環フォーラム

第4号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.4

座談会

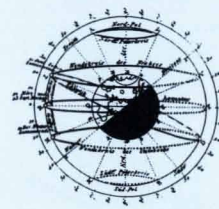
ポスト京大百周年を考える

齋藤清明・筒井清忠・東正彦・福井勝義 司会・佐伯啓思

特集

京のかたち

浅川滋男・金子務・灰野昭郎・宮崎興二



表紙1「写真説明 沖縄・豊島の南に位置する土地（かみち）の汀線。土地には、六〇戸くらいの家がみられるものの、じつさい住んでいるのは二人の老人だけ（撮影：福井）。

表紙4「写真説明 島根半島の先端にある美奈間町で、二月に行われる諸半舟（たぶね）神事。二艘の船が競争し、ゴールに近づくとお互いに水をかけあう（撮影：福井）。

「人環フォーラム」創刊号の対談に登場していただいた井上民二教授（京都大学生態学研究センター）には、去る九月六日（土）調査地であるサワクク州のランビル国立公園に向かわれる途中、不運にも飛行機事故により逝去されました。世界の第一線にたつて活躍され、日本における生態学のリーダー的立場におられただけに、まことに惜しまれます。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集委員会

委員長
副委員長

福井勝義
高橋恒夫
植松義人
加藤真
佐伯啓思
田中耕司
山宮陽誠
間中陽誠

人環フォーラム 第3号

平成九年九月三〇日 発行

編集 『人環フォーラム』編集委員会

発行 京都大学大学院人間・環境学研究科

〒606-0101 京都市左京区吉田二本松町

電話 〇七五七五三二六五三

印刷製本 河北印刷株式会社

編集後記

作曲家マーラーにとって、第九という数字は鬼門の数字であった。ベートーベンやブルックナーの轍を踏むまいと、彼は本来なら第九交響曲となるはずの「大地の歌」を無番にした。だが彼もまた第九の鬼門を超えることができなかった。次の第九交響曲は彼にとってもまた最後の交響曲となったのである。

雑誌にとっては第三が鬼門であろう。三号でつづれる雑誌を俗にカストリ雑誌と呼ぶが、本誌は、三合で酔いつぶれるどころか、飲めば飲むほどに味わいを増す銘酒のような雑誌をめざしていきたい。

だが、油断は禁物。第二号の対談中の発言——「古代ギリシアでは成人男子が日常生活でも素裸でいて」——に対し、事実と反するという指摘が寄せられた。読者の御批判・御叱声によって本誌をより良き雑誌にしていきたい。

(Y・M)



HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM